
猫と絵画と召喚獣

MAGIC RAIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫と絵画と召喚獣

【コード】

N3200L

【作者名】

MAGIC RAIN

【あらすじ】

私立文月学園、それは召喚獣を使った少し変わった学園

そこに在籍している坂本雄二と霧島翔子の幼なじみである少女遠月優羽の物語

気まぐれ猫と呼ばれるオリキャラ遠月優羽が巻き起こすドタバタコメディー

駄文、誤字などが多いと思いますが宜しく願います。

主人公プロフィール（前書き）

問題

盾と矛を用いて作られた故事成語を答えよ、またその意味も書きなさい

姫路 瑞希の答え

故事成語 矛盾

意味 つじつまがあわないこと

教師のコメント

さすがに簡単すぎましたかね

遠月 優羽の答え

意味

この矛最強に強いぜ、この盾最強に堅いぜ

教師のコメント

矛盾しています

吉井 明久の答え

故事成語

矛盾

教師のコメント

先生も風来のシレンは好きです

主人公プロフィール

そう言えば優羽のキャラって、きまぐれで頭いいと言っぐらいしか書いてないなあ。と思い急いで作成

名前 遠月とらつき 優羽ゆう

容姿

翔子と同じような髪の長さだがポニーテール、顔は可愛いと言っぐり綺麗。

黙っていれば男が寄って来るほどの美人。

性格

極度のきまぐれ気分屋な性格、本能の赴くままに行動し自分がやりたいように行動する。

しかし芯はしっかりとしており、友人の為なら怒る事もいとわなしっかりした面もある。

趣味

スケッチ、昼寝、翔子との会話、雄二いじり、などなど

多趣味だが飽きっぽい性格かためかあまり絵以外は長続きしていない

特技

変装、料理、スケッチ

勉強

得意教科

保健体育以外全般

苦手教科

保健体育

勉強に関しては保健体育以外は真面目にやれば教師陣並み

保健体育については小学校からまともに授業を聞いてないので勉強をしなかった

性知識は皆無でそこら辺の園児と同レベル

因みに

アルコールに極端に弱く消毒液のアルコールだけですら酔う

酔うと物凄い事になり雄二はトラウマとなっているが翔子曰わく可愛いと言っていた。

別段勉強が嫌いという訳ではなく、授業を受ける事が嫌いなのである。

文月学園には試験召喚システムに興味を持った雄二と雄三を追っかけて入学した翔子達がきっかけで、二人が行くなら私もーっと数多な超名門校の推薦を蹴り、入学した。

現在【気まぐれ猫】の通り名で学園生活を悠々自適に過ごしている。

また、昔観察処分者の称号を手に入れようとし、自ら進んで数々の悪戯で学園を荒らし、職員会議に候補に挙がるまでになるが鉄人に「奴にそんな事したら学園が崩壊する」の意見で満場一致で反対で棄却された伝説を持つ。

主人公プロフィール（後書き）

問題ネタわかる人いるかな？

まあ主人公のルートどうしよう、とりま予定は秀吉ルートか、オリキャラを出してそいつと引っ付けるか考案中。

もっと面白いアイデアある方募集

2011年1月27日追記

読みやすいように場所を以降しました。

オリキャラ設定その2（前書き）

オリキャラその2である
雨咲蒼夜あめなみ せいでの設定です

オリキャラ設定その2

蒼夜のキャラプロフィールです。

名前

雨咲あまなぎ
蒼夜そうや

性別 男

概要

優羽の最後の幼なじみ、ちなみに蒼夜、雄二、翔子の順に優羽は知り合っている。

小学校6年時に両親の両親が事故で亡くなり、母の妹にあたる人物が経営する孤児施設暮らしとなる。

現在4人の義理の妹と義理の弟と叔母との7人家族である。

本人も現在の生活が気に入っており、弟達にはよき兄でいようとする一面がある。

性格は基本的に落ち着いており静かな性格である。しかし騒がしいのは苦手な訳ではなく、むしろ好きな部類に入る。

基本的に騒ぎには被害者側である。
所謂そこら辺の落ち着いた今時の青年的な性格。

小学校時代、翔子や雄二、優羽などの天才が溢れていた事が原因か彼らのように成りたいと目標を持ち中学時代はかなりの事に手を出していた、また学業のほうにもかなり精を出していた（当時1日最低5時間勉強は当たり前というレベル）現在は現状維持程度にしか勉強しておらず。

天才でも無く才能が待たたく無いわけでも無く普通である。しかし本人は常に上を目指す
才能という絶対的な壁を乗り越えようと日々奮闘中。

容姿

短髪の黒髪の青年、中肉中背

特徴が無いのが特徴というぐらいの普通の顔立ち

得意教科は世界史、日本史、基本的に暗記科目を得意とする

苦手科目は数学、物理や化学など理系教科

点数は常にばらつき

得意科目では勉強を単科目に絞る事で400ギリギリのラインまで行く事が出来る、しかしその際他の教科は200点台まで落ち込む。

平均点は280〜320点のあたりBクラス上位〜Aクラス最下位レベルの成績

モットーは「常に平和で普通の生活を送る」

腕輪について……

教科を単科目に絞り一夜漬けする事でギリギリ可能

ただし他の科目が疎かになり他教科は平均点200点……最悪150にまで下がる

能力

召喚フィールド内に爆発を引き起こし、フィールド内の召喚獣の点数能力を全て初期化する能力、初期化の影響を受けた相手は文字通り装備、性能、全て初期化される。因みに点数は一点という状態になる。点数による能力ステータスすら消えるため、点数の高い相手

の操作にかなりの弊害を及ぼす。高得点者には有効だが、装備すら初期化するため。相手は丸腰+制服という状態にする極悪能力。反面使くと自身の全教科の点が一点となる弱点もある

召喚獣

蒼夜をデフォルメした見た目に西洋甲冑に刀という不釣り合いな装備をした姿

因みに本人の操作技術は中の上、人より多少うまい程度である。

コラボ企画：気まぐれ猫とちび娘 前編（前書き）

これはレフェルさんの『僕とちっさいな幼なじみと召喚獣』とのコラボです。

相手方のキャラのキャラ崩壊、こちらのキャラ崩壊が起きている可能性がありますが、それでもおこな超上級者だけどうぞ。

因みに誰得の前編、後編合わせての2話構成です。

コラボ企画：気まぐれ猫とちび娘 前編

「つぐみん、つぐみんにはこれを着て欲しいな。」

喜々として目を輝かせて期待の眼差しでつぐみを見つめる優羽がいた、そしてその手には小さな女の子が着たらさぞかし似合う服……
…いわゆるゴスロリ衣装を手に持っていた。

場所は所謂服屋にいる二人。

(どつしてこうなったんだろう……)

私は頭の中でそう考えて事の発端の出来事を思い出していた。

それは昨日のお昼の出来事である。

いつものように私はアキくん達とお昼を食べていた時のことだった、私がお弁当食べようとしていた時隣にいた優羽がじーっと見つめていた。

「遠月さん、どうしたの？」

あまりにも奇妙な光景につい口を開くつぐみ、しかし優羽は何でもないと答えて再び見つめ始めた
視線は明らかに私のお弁当だ。

「遠月さん私のお弁当半分食べる？」

あまりの視線に耐えられなかった私は思わずそう言ってしまった、
今思えばこれが事の始まりだった。

「えっ！……いいの……！」

羨望の眼差しでつぐみを見る優羽、つぐみのお弁当に興味を持っていたようだ。

「ってゆうか遠月さんお弁当は？いつも持ってきてるよね？」

ふと気が付いたようなに小首をかしげる素振りを見せるつぐみをよそに優羽は少し照れながら……

「実はね、冷蔵庫が壊れて中身が全部痛んで材料が無くて作れなかったの、冷蔵庫自体は新しいのがすぐ来るから問題ないんだけどね。あっこの卵焼き美味しい！！」

分けて貰ったお弁当を頂きながら言う。

「ありがと、でもそれならコンビニでお弁当買えば良かったのに、学食だつてあるのに。」

「私もそれを考えてたんだけど、持ってきてる財布に26円しかなくて買えなかったの。」

そう言ってカバンから財布を出してそれをつぐみに渡す、しかし中はほぼ空で、10円玉2枚と一円玉と5円玉が一枚ずつ入っただけだ。あまりの財布の悲惨さにつぐみが思わず呟く。

「何……これ？」

優羽は気まずそうに笑いながら答える。

「実は今月の食品は全て冷蔵庫に入っていて、今は月末なわけで中身も壊滅的な訳で……」

優羽は基本的に食事の材料をまとめて買うようにしており、食費も決められた仕送りを意外ながらも管理していた。しかし明久程ではないが、自らの趣味に殆ど費やし全く貯金をしない、という訳で月末になると必然的に財布が寒くなるわけである。

「きちんと食費を管理している分アキくんよりましだけど……酷い。」

「いやあそれ程でも」

「誉めてないよ……」

そう言って照れる優羽につぐみはひたすら呆れていた。

そんな会話をしていると食事も終わりつぐみが弁当箱を片付けていると突然優羽が話しかけてきた。

「つぐみん、お弁当ありがとう。お礼代わりに今度の休みの日って空いてる？」

にっこりと眩しい笑顔のもとに、優羽はつぐみに質問する。

「特に用事はないけど……どう？」

そう答えるにつぐみが言い終わる前に優羽が矢継ぎ早に答える。

「それじゃあ二人で遊びに行こう。大丈夫お金は私が全額負担する

から、じゃあ次の日曜日にね私がつぐみんを呼びに行くから。」

「え……ちよ……」

慌てるつぐみをよそにお構いなしに優羽は喋る。

「時間はぐ早いほういいから8時半に迎えに行くから、それじゃあ決まり！……それじゃあ早速私は予定を立てていくからよろしく。」

そい言うともう直ぐ授業が始まるのにも構わず教室を出て行った。

取り残されたつぐみはポツリと呟く。

「遠月さん、その日はテスト週間だよ………」

すると廊下から鉄人の怒鳴り声が響く。

「遠月、またお前か！……今日という今日は許さんぞ！……！」

「じゃははははは〜」

鉄人の怒鳴り声でつぐみの小さな突っ込みは誰にも聞こえず、その場に響いた。

そして日曜日、一緒に服屋に入って現在の状況になったといういきさつがあったのである。

「さあ！！さあ！！つぐみんこれを着て欲しいな」

「ちよっ！！遠月さん！！やめ、たーすーけーてー」

服を抱えたまま優羽はつぐみの体を引きずって試着室に連行されていた。

「さあさあつぐみん、お着替えしようねー。む、つぐみんって意外とスタイルいいなあ、ちっちゃくてスタイル抜群……かーわーいいー」

「ひゃ！……！遠月さんどこ触ってるの！！自分で着替えられるから大丈夫、ってやめて〜」

完全に暴走している優羽に振り回され無理やり着替えさせられるつぐみ。結局つぐみは優羽に無理やりゴスロリ服を着せられていた。

現在つぐみが着ているのは白いニーソに白を基調にしたゴスロリ服サイズもぴったりである、何故優羽がサイズを間違えなかったのはもうこの際突っ込むのは止めよう。

「ううもうお嫁にいけない……」

純白のゴスロリ服を無理やり着替えられたつぐみは一人へこんでいた。

「大丈夫だよまだまだ小さいつぐみんは10年早いから。」

「私は同級生だもん……！小学生じゃないもん」

「あー、かーわーいーいー。どうしようこのまま家にお持ち帰りして一日中もふもふしていたい……………」

結局服はそのまま買う羽目になり（勿論優羽が自腹）、そのまま店を後にした。

現在、優羽の独断で遊園地に行くはめになりバスに乗って移動中な訳である。バスが混んでおり席が一つしかとれず、つぐみは優羽の膝の上に座っている状態だ。

「そついえば優羽ちゃん。」

ふとつぐみが優羽に質問をする。

「今月はもうお金が無いって言ったたよね？なんでこんな恥ずかしい服買うお金があったの？」

「はぁ……………かわいい服着たつぐみんが膝の上……………今なら私渋い顔

の凄腕スナイパーに撃ち殺されても本望だよ」

つぐみの疑問をよそに優羽はゴスロリ服姿のつぐみを膝の上に乗せて夢心地状態だ。

（全く耳に入っていない……しょうがないなあ。あれをやってみよう）

つぐみがそう考えると少し前に蒼夜に教わった方法を試そうとしていた。

優羽ちゃんはかわいい物が好きだから、上目遣いで「お姉ちゃん」って言えば確実に反応するよ。

b y 蒼夜

（同学年のそれに顔見知りの相手がやっても意味がないと思うけど、それに私が恥ずかしい……）

「ねえ……お姉ちゃん……つぐみの話聞いて欲しいな。（膝の上からの超上目遣い）」

つぐみの行動を起こすが、優羽はつぐみを見たまま固まっていた。

よ。) やっぱり効果無いじゃん雨咲君の嘘つき、私が恥ずかしいだけだ

しばらくすると異変につぐみが気づいた、そしてつぐみが心底自分の行動に後悔をした。

そう蒼夜の作戦はあくまで通常状態の時だ、それに気づくのに3分遅かった。今までの優羽の状況を見れば安易に理解ができる、現在つぐみの服装は優羽が完全に好みで選んだものだ、つまりそれは優羽がつぐみに一番着て欲しい服。それはこの服装が優羽にとって一番ダメージが大きい事を理解した、しかし時既に遅し。

「あーもう絶対離さない。ずっと一緒にいるよ、ずっとつぐみんの話聞いてあげるから」

優羽が膝の上に乗っているつぐみを抱きしめま頬をこすりつける。

「ちょ……遠月さん苦しい苦しいはーなーしーてー」

狭いバスの中、つぐみの小さな体から響く小さな悲鳴がバスを和やかな空気にしていた。

日もようやく上に登り、目的地である遊園地似つく。優羽とつぐみの二人の時間はまだまだ続くのであった。

コラボ企画：気まぐれ猫とちび娘 前編（後書き）

感想があれば宜しくお願いします。

そしてレフェルさんの『僕とちっさいな幼なじみと召喚獣』のほうも宜しく願います。

次回は恐らく本編を進めます。コラボの後編は同時進行でゆっくりやるので出来上がり次第更新します。

コラボ企画 気まぐれ猫とちび娘 後編(前書き)

永らくお待たせしました
後編です

ではございませう

コラボ企画 気まぐれ猫とちび娘 後編

遊園地……ここは本来恋人や友人、家族と一緒に楽しむ憩いの場である。よって誰もが楽しめる場所ではなくてはならない。

「私そんなにちっちゃくないもん」

だから何をするにも身長に左右されるこの場所は私にとって矛盾した場所だ。

〈コラボ後編〉気まぐれ猫とちび娘【遊園地ではしゃぐつ】〈

「つぐみん、元気だしなよ」世の中身長だけが全てじゃないよ!!

「！」

遊園地のベンチにてしょんぼりするつぐみに対し慰めの言葉を言う遊羽、しかしつぐみの立ち直る様子は見られない。

相も変わらずコスプレまがいなゴスロリ服に身を包んで落ち込むつぐみ、何故こうなったのだろうか……

(2時間前)

来園直後遊羽とつぐみは既にはしゃぎきった様子であたりを見回していた。最初に比べゴスロリ服を着ている事から来る視線にも慣れた様子だった。

「遊羽ちゃんコースターがあるよ」

「よーしつぐみんレッツゴー」

「お客様、申し訳御座いませんこちら身長制限がありまして……………」

「遊羽ちゃんごめんね」

「つぐみん気にしないで」

（１時間半前）

「ジェットコースターにて」

「つぐみんあれがここの一番ジェットコースターだよ」

「うわ遊羽ちゃん引つ張らないで」

「申し訳御座いませんこちら身長制限が……………（以下略）」

「……………」

「だ、大丈夫だよつぐみん、ジェットコースターならもう一つあるから」

(1時間前)

(フリーフォールにて ひたすら上下に落ちるあれ)

「つぐみん上下に落ちるあれだよ」

「私……ああいうのはちょっと……っはーなーしーてー」

「申し訳御座いませんおk(略)」

「……………(涙目)」

「あーつぐみんあんな所にもう一つのジェットコースターが(な……涙目……か、可愛い……!……)」

(30分前……………)

「再びジェットコースターにて」

「つぐみんつぐみん早く行こう風よりも早く」

「ちよつ遊羽ちゃん……早いって……きやああ」

「申しわk（以下略）」

「じめんね遊羽ちゃん……（涙目状態）」

といった訳である。

流石に2時間に近くも歩き回って疲れたのと、自らの小さな体躯を再認識した結果となり再びしょげて落ち込むつぐみ。

現在園内の片隅の小さな休憩所で休む二人、周りには遊羽達意外誰

もない。

「私だって好きで小さい訳じゃないもん。」

落ち込みながらも怒った様子は周りから見るとかなり微笑ましい光景なのだろう。

しかし当の本人は真面目に落ち込んでいるようである、まさか園内の殆どの乗り物が身長制限の為乗れないのだから。

遊羽とつぐみが休憩所で休んでいる時、少し離れた所で見張っている三人の影が見える

深紅と蒼夜、そして明久である。

「雨宮さん落ち込んでますね。」

「それもそうやるあんな状況をスルーできる人間じゃあらへんし……」

「お客の危険回避の為だとしてももう少し言い方があると思うだけ

どなあ。それにしてもつぐみの格好。」

つぐみを見て少し顔を赤くする明久それに対し反応する蒼夜

「吉井君どうかしたのですか？」

「つぐみが死ぬ。」

「深紅さん解読お願いします。」

いきなり理解不可能なセリフにも動じない辺り遊羽の幼なじみと言った所だ。

「つぐみが可愛すぎて死にそうって意味やと思うで。」

深紅の解読に再び視線を明久に向けると顔を赤くしたまま目をそらすやはり図星なのだろう。

「所で深紅さん。」

「なんや」

「なんでテスト週間前の人間がここにいるんでしょうか？」

「だって雨咲はんあの二人やで？こんな面白い組み合わせ見ないわけにはいかへんやろ」

「はぁ……………」

「雨咲君大変だね」

「君ほどじゃないよ」

ここにも気まぐれな人間に振り回された人間がいるのだった。

(全く、なんでこんな人が気になるんでしょうか……………)

「お、二人が動いたで、二人共尾行再開や」

ノリノリな深紅とは反対にいまいちやる気を出さない蒼夜とつぐみの様子を見にきた明久。

こうして三人の尾行作戦が再開される。

「つぐみん、元気出してまだまだアトラクションは沢山有るんだからな」

「私そんなにちっちゃくないもん」

(うん、全く耳に届いてない……………)

遊羽は必死につぐみを慰めているがあまり効果が現れない……………どうしようか考えているとふとある物が目に入る。

こういう時は言葉より行動で示したほうが遊羽らしい……………まさにそう語るかのように遊羽はベンチから勢いよく立ち上がると、いつもの明るく活発な笑顔でつぐみの手を引っ張った。

「つぐみん、どンドン回ろつ。既に4回も負けてるんだから今度は大丈夫だよ」

「ちょっと遊羽ちゃん!?!どこに行くの〜」

そういつて先ほどの時のようにつぐみを強引に引っ張り駆けていく(うん、こっちのが私らしい。つぐみんには落ち込んだ顔より笑った顔のが似合ってるから)

遊羽は心の中で呟くと再び最初の時のように……いや先ほどよりも早い速度でつぐみを引っ張りながら駆けていく。途中覚えのある視線を感じたが、気にせずに行った。

「観覧車?」

つぐみは意外といった様子で遊羽と観覧車を交互に見続ける。それもそうだが、遊羽のイメージは絶叫系のアトラクションを案内する感じがするのだが実際連れて来られたのは観覧車という休憩所のような

なアトラクションなのだから。

「遊園地と来たらジェットコースター、観覧車、そしてお化け屋敷が鉄板だよつぐみん！！！！ここお化け屋敷無いけど……とにかく行くこつ。ここの遊園地はこの観覧車が目玉なんだよとにかく大きいんだ」

遊羽のペースに吞まれながらもつぐみは先ほどの落ち込んだ空気は感じる事無く、いつの間にか笑っていたのは本人すら気づいていない。

「つぐみんつぐみん凄いや周りがみんな小さく見えるよ。」

「本当だ……ここからだ遠くの景色まで見えるね。」

観覧車に乗り、相変わらずのテンションの遊羽にいつの間にかそのテンションにつられていたつぐみ。

観覧車もしばらくすると遊羽は静かに観覧車の窓から外の景色を眺

めるつぐみを見つめて語る。

「少しは元気になった？」

「えっ？」

「つぐみんはさあ少し周りの事に気を使いすぎなんだよ……さつきも自分の身長で私に迷惑かけたと思ってるかも知れないけどさ、そんな事ないからね。」

語る遊羽の姿にはいつも自分勝手な姿は見えず、まるで姉が妹を見るような優しい眼差しだった。

「だからさ周りの事に頼って、もっと自分のわがまま言ったりさ。周りに甘えてみなよ。大丈夫！！つぐみん可愛いからみんな答えてくれるよ」

そう言いながら優しく抱きしめる遊羽、それにはいつも遊羽が抱きしめるような強引さは無くまるで母親に抱きしめられるような心地よさがそこにあった。

「あゝ、かーわーいーいー」

気が付くといつも遊羽に戻っており、いつも通りのノリでつぐみを抱きしめている。

「遊羽ちゃんくるしいよー……」

そのまま遊羽の悪ふざけは観覧車を降りるまで続いた。

遊羽達が観覧車に乗った直後その次の場所に深紅達が乗り込む。

「ん〜ここからじゃ見にくいなあ。雨咲はん双眼鏡。」

「……どうぞ」

ノリノリな深紅に対し半ばあきれ気味な蒼夜、そしてつぐみを心配してやってきた明久の三人組。

「ところで吉井君は雨宮さんとはどんな関係なのですか？恋人……線はFクラスの状況からありえませんか？」

「あはは……僕とつぐみはだだの幼なじみだよ。僕から見たら雨咲君こそ遠月さんと恋人同士みたいだよ。」

明久がそういった直後、蒼夜は軽く笑うとそれを否定する。

「僕と遊羽ちゃんが………違いますよ。僕と遊羽ちゃんの関係もそつちと似たようなもんです。僕の好きだったのはもう一人の方ですし、まあ最初から勝ち目の無い戦い何で諦めましたけど………おつと話が逸れましたね、僕と遊羽ちゃんはいわば兄妹みたいな感じですよ。」

そんな二人の世間話を深紅が中断する。

「二人共似たような立場なんやな。ほんなら蒼夜から見たら雄二は恋敵みたいなもんやのかなんて言うかご愁傷様や」

「大丈夫ですよ。それに小学校の初恋ですし今は吹っ切れてますけど。只たまくに人の恋路を邪魔したにもかかわらずあんな態度をとる雄二を殺してやりたいとは思いますがね。あ、あと遊羽ちゃんに僕達の尾行バレてますよ雨宮さんは気づいていないみたいですが。」

「やっぱりそうなんか、どつりてワッチとちょいちょい目が合っわけや」

そんなやり取りをしているといつの間にか観覧車も周回し、もう直ぐ地上に戻るうとしている。

「ほな、ばれてる事やしわっち達も合流しようか。」

「全く最初から一緒に行動すれば簡単なんですが。」

「全く雨咲はユーモアが分かってないへんで」

（僕はつくづく人に振り回される人間のようです。）

深紅の態度に対し改めてそう思いながらため息をつき、まだ半日しかも今度は遊羽付きで付き合わされる事となった。

時間は夕方………いつの間にか5人組となった遊羽とつくみの一行

はそれぞれ園内のお店に居た。店の前のベンチで蒼夜が「長い1日でした……………」と燃え尽きているがいつもの事だろう。

「遊羽ちゃん」

遊羽はなんとなしに店の中を眺めて居る所をつぐみに呼ばれる。

「なあにつぐみん」

「えっと……………今日はありがとう。お礼って訳じゃないけどこれ受け取って」

渡されたのは三毛猫の小さなキーホルダー。

「ありがとう、つぐみん。でもいくら何でもただっつのは悪いよ」

「気にしないで、遊羽ちゃん」

「私の気が済まないの……………」

遊羽がそう答えたと同時に偶々目に写った物を見て閃く。

「そつだ！！！つぐみんちよつと待ってて」

そう言うと遊羽は何かを握りしめ、そのまま会計の方に向かう。そして会計を済ませるとそのままつぐみの所に戻る。

「つぐみん、はい」

笑顔でつぐみに渡したのは白い子兔のキーホルダーだ。

「遊羽ちゃんこれ何??」

つぐみは頭に疑問符を上げると遊羽は嬉しそうな顔で語る。

「今日の記念だよ、これが私とつぐみんの親友の証つてこと。駄目かな?」

遊羽の言葉に若干面を食らうが直ぐに笑顔になるつぐみ。親友という言葉が嬉しかったのだろう。

「二人共さつさと帰るで」

深紅の言葉に遊羽とつぐみはその場を後にする。

〈余談〉

帰りのバスの中の出来事である。

「そつちや、明日はいつもの面子で勉強会やから。遊羽、逃げでも無駄やで場所はあるさんの家やから安心して励もうや」

「勉強………嫌い………あいた！」

「遊羽ちゃん我が儘は駄目だよ。」

「雨宮さん、もっと言ってやって下さい」

気がつくにつぐみがピコハンを構えて遊羽を叩いていた。

「むー………つぐみんと蒼ちゃんがいじめるー暴力反対だよ」

気づくと遊羽の反応に周りは笑っていた、なんて言うか遊羽は私の

周りは今日も変わらずに
気まぐれ猫の周りは騒がしいものである

プロローグ

私の周りには面白い人がたくさんいる。

とある人が大好きな一途な人や、物凄い馬鹿だけど真っ直ぐな人や、美少女みたいな男の子とか、神童と言われてた人とか。

考えただけで毎日が楽しくなる、だから私はこの人達の通うこの学校が

そう

私立文月学園が

私は誰だって？

遠月 優羽

それが私の名前

さあ今日も楽しくなるといいな

新学期、この特殊な学園では成績を基準とした召還獣を扱う変わった学園

私は新しいクラスを楽しみにして学園へ向かった。

【試召戦争編】第一問 気まぐれ猫とFクラス（前書き）

問題

『調理に使う鍋を制作するとき質量の軽いマグネシウムを用意した、しかし調理を始めると問題が発生したその理由と他にどんな合金がよいか例をあげなさい』

姫路 瑞希の答え

問題点

マグネシウムが火を通すと酸素と反応して危険である点

合金の例

ジュラルミン

教師のコメント

正解です、合金なので鉄では駄目という引っ掛けが問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね

遠月 優羽の答え

問題点

調理するのが面倒だったから

合金の例

ガンダリウム合金

教師のコメント

問題を全否定しないでください。あとあっている問題をわざと消して間違えないでください

土屋 康太の答え

問題点

ガス代を払ってなかったと言ったこと

教師のコメント

そこは問題ではありません

吉井 明久の答え

合金の例 未来合金（すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても……

【試召戦争編】第一問 気まぐれ猫とFクラス

「ねえ霧ちゃん」

私は友達と一緒に学園に向かう途中だった。

「なに」

呼ばれて返事をしたのは私の幼なじみで親友の霧島きりしま翔子しやうこ

「クラス、霧ちゃんはAクラスだよねきつと」

私は笑顔で言う

「そういう優羽だって、真面目にテストやっていれば確実にAクラスだった」

翔子が淡々と言う

「だって突然絵が書きたくなっただもん」

この学園では2年になると振り分け試験と言う試験が行われる。

その成績によってAクラスからFクラスに分けられ、設備もかなり違う。

霧ちゃんは学年トップクラスの成績を誇っている。

私は……

まあ成績だけなら霧ちゃんよりいいのだがテスト中に外の景色をデッサンしていて、テストは白紙で終わり。最低クラスのFクラス入りが確定している。

そんな話をしていると校門についた

校門には西村先生、通称鉄人先生が立っていた

「西村先生おはよう」

私は親友に別れを言い西村先生に挨拶する。

「遠月か、わかっていると思うがお前のクラスはFクラスだ」

そう言われて私は少し苦笑する。

「全くお前ただだぞ、テスト中にデッサンなぞしていたのはまあ絵の出来は素晴らしかったが」

「いいじゃん、Fクラス、ガリ勉Aクラスより楽しそうだし」
笑いながら言う私に鉄人は溜め息を付いて言った

「全く真面目にやれば教師陣と同じぐらい点数が取れるだろうが」

そんなこと言われても、私みたいな不真面目な生徒がAクラスにいても空気が悪くなるだけだ。

普段授業なんか全部すっぱかして屋上で寝ている。

「そんなことだから気まぐれ猫なんて言われるんだ」

全く話を聞いていない私に鉄人が言った

「いいじゃないですか私案外気に入ってるんですよそれ、じゃあ先生私は教室に行きます」

そして私は自分の教室に向かった。

「うん予想通りの教室だ」

見ると床は畳、机は卓袱台、椅子については座布団だ。他にも色々探したらきりが無い。しかし彼女は

「クラスメイトの反応が楽しみね」

「おはよう」

教室に入りながら私は元気よく答えた。周りを見ると女子は一人しかいない

「優羽かお前もFクラスか、以外だな」

長身の男子生徒が話しかけてきた。

「あ、雄ちゃんだ」

彼の名前は坂本雄二さかもと ゆうじ私の親友の思い人で霧ちゃん曰わく結婚を前提で頑張っているらしい

「何でおまえがFクラスなんだ？」

私はこの学校のテストは一切真面目に受けていない、だから私が勉強出来る事は幼なじみで親友の霧ちゃんか先生達と雄二とあと少ししか知っている人はいない。

「試験中に絵が書きたくなつたの」

「全くお主らしいのう」

爺言葉で話しかけてきたきたのは木下秀吉、見た目は美少女って周りから言われている美少年だ。

「秀吉君は相変わらずカッコいいね」

「そう言ってくれるのはお主だけじゃ」

そんなたわいの無い話しをしていると、下からシャッター音が聞こえる

「ムツッ、私の写真売るなら3割還元でよろしくね」

「了解」

この超ローアングルから写真をとっているのは寡黙な性職者通称ムツリーニ（私はムツツンとっている）
本名は土屋康太

彼も相変わらずだなあとはい唯一のこのクラス的女子に話し掛けた。

「美波ちゃんおはよ」

「優羽もFクラスなの？あんなに勉強出来るのに」

この人は島田美波

数少ない私の女友達で、ドイツからの帰国子女だ。

「だって、ガリ勉Aクラスよりこっちのが楽しそうだしね」

笑いながら言う私を見て

「優羽は相変わらずだよね」

といった。

私は鞆を机に置いて立ち上がった。

「私じゃあちよつと散歩してくる」

それだけ言っつて私はもう直ぐ始業時間なのもお構いなしに教室を出た。

教室を出て廊下を歩いていると、知っている顔が見えた

「あつきーおはよー」

「遠月さん、おはよう」

彼は学年で一番馬鹿と言われている吉井明久よしいあきひさ

「遠月さんもFクラス？」

「そうだよ、これからサボる所なの屋上で絵でも描くところかなって思った所、じゃあね」

屋上について私はビニールシートを敷き自前のスケッチブックを開く、今日は何を書こかなと思いつたりと空を見上げる。

「あれ？メール？」

気がつくと携帯がメールを受信している

雄二からのメールで内容は

Aクラスに試召戦争を仕掛けるとの事だった。

私はメールを返信する。

「えーっと、屋上にいるから詳しい話は教室に向かうからそこですと」

雄ちゃんの事だ今頃クラスを煽っているんだろう、言い出しっぺは多分あつきーかな？

またしばらく楽しくなりそうだが、これだからこの学園はたまらない。

時は少しさかのぼる

「みんな今の設備に不満はないか」

雄二がFクラスの面々に向かって言う。

『おおありじゃあああ』

Fクラスの面々が叫ぶ、それもそのはず同じ学費を払っているのに、こっちは座布団と卓袱台。対するAクラスはシステムデスクとリクライニングシート。不満を抱くのも当然である。

「これは代表としての提案なんだが」

私がちょうど教室に入ると同時に、雄二の言葉が放たれる。

「Aクラスに試験召還戦争を仕掛けようと思う」

雄二の言葉に誰も賛同しなかった。

「これ以上設備を落とされるのは嫌だ」

「Aクラスに勝てる気がしない」

「姫路さんと遠月さんがいれば他何もいらぬい」

などなど

「確かに普通にやってもAクラスには勝てない、だが俺は勝算の無

い戦いを提案したわけではない、その証拠を見せよう」

雄二が私にアイコンタクトを贈る

「ムッツン、瑞希のスカートのぞいてたら駄目だよ。」

ムッツリーニがそれを首をブンブン振って否定する

「彼があのもッツリーニだ」

雄二の言葉に教室がざわつく

ムッツリーニ、男子生徒からは畏怖と畏敬、女子からは軽蔑を受けているのである。

雄二が続ける

「姫路の実力は皆知っているだろう」

「わ、私ですか？」

突然話題に上げられ姫路さんが驚く

「ああ、主戦力だ」

Fクラスの教室が徐々にざわつく。雄二は続ける

「それに木下秀吉もいる」

学力では有名ではないが、演劇部のホープって言われているのと、双子の姉がいると言うことで有名だ。

「それに俺も全力を尽くす」

「たしか坂本って昔神童と言われていたんじゃないのか」

「だったら実質Aクラス学力の人間は二人もいるのか」

「違う、3人だ。紹介しよう、遠月優羽だ知っての通り気まぐれ猫の呼び名だ」

雄二の発言に場がどんどん盛り上がっている。

「気まぐれ猫ってたしか授業を3回しか受けてないのに進級できたって言う」

まあ正確には二回なのだが。

「この面子ならいけるんじゃないか？」

どんどん場が盛り上がる

私は雄ちゃんこういうの本当に得意だなあと座って見ていた

「それに吉井明久もいる」

その言葉に一気に場が静まる

「ちょっと雄二！なんでここで僕の名前を呼ぶんだ、全く必要ないよね」

「そうか。知らないようなら教えてやるコイツの肩書きは『観察処分者』だ」

誰かが咳く

「それって馬鹿の代名詞じゃなかったのか？」

そのセリフにあっきーがへこんでいた。

「俺達の力の証明としてまずはDクラスを征服しようと思う」

「みんなこんな境遇に不満があるだろう」

雄ちゃんがみんなをうまく盛り上げる、まあ私は別に不満は無いんだけどね。

「ならば筆を取れ！！！！出陣の準備だ、俺達に必要なのは卓袱台ではない！！！！Aクラスのシステムデスクだ」

『おおおーーーーー』

「まずは明久、Dクラスに死者となり宣戦布告してくるんだ。」

雄ちゃんがあつきーに指示を送る

「下位勢力の宣戦布告って絶対酷い目にあつよね？それに字違わない？」

「まあ騙されたと思って言っただけ」

雄二がそう言ってもまだ渋っているあつきー

私はあつきーの耳元でこっそり囁く

「ここで男らしくビシッと宣戦布告してきたら、姫路さんとかにモテモテかもよ」

するとあつきーはコロッと態度を変えて

「よし雄二任せて、行ってくる」

あつきーが元気よく飛び出した。

「優羽よお主は一体何をふきこんだのじゃ?」

秀吉が不思議そうに言う

「えっと、男らしく逝ったら姫路さんにモテモテだよって一言」

えへへーと悪戯っぽく笑う私

「お主は鬼か！！！！！！」

秀吉の言葉が教室に響いた。

数分後ポロポロになった明久を見て私はものすごい笑わせて貰った。

場所は屋上雄二達は作戦会議をしていた。ただ一人その様子をのんびりスケッチしながら、サンドイッチを食べている優羽を除いて。

「明久宣戦布告は何時にしたんだ。」

「一応今日の午後から開戦するように告げたよ」

「ならば先にお昼じゃな」

「明久も今日ぐらいはまともな物食べておけよ」

「そう言うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「え、吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いたように言う、雄二がそれに対して補足する。

「違う明久は趣味に食事代間で回しているだけだ、主食は水と塩だけだ」

それを聞いて姫路さんが決心したように言った。

「・・・あの吉井君、良かったら私がお弁当作ってあげましょうか？」

「え、本当にいいの？迷惑じゃない？」

うれしそうに笑う明久

「ふーん瑞希って優しいのね、吉井にだけ作って来るなんて」

「あ、いえ、その皆さんの分も・・・」

「俺達にもいいのか？」

「はい嫌じゃ無かったら」

「じゃあ私もみんなの分作ってきてあげるよ」

そう声をあげたのはスケッチブック片手に絵を描いている優羽

「優羽、どついう風の吹き回しだ？お前がそんな事言うなんて」

「別に〜只の気まぐれだよ」

「てゆうか優羽あんた何描いているの?」

そうきく美波

「見る?」

そういつて雄二達にスケッチブックを見せる「ほう、うまいじゃないかていうか優羽、絵描けたんだな」

「最近書き始めたんだよ、このまえ青空の絵を見たら描きたくなっ
たんだ」

描かれている絵は風景画、しばらくページをめくっていくと

「これはわしらの絵か」

秀吉、雄二、翔子、明久、美波やらたくさんの似顔絵があった

「凄くない優羽、そっくりだわ」

美波が驚く。

「話を戻すぞ、作戦はこうだ優羽、姫路のテストの時間を稼いで姫路達に代表を倒してもらおう、姫路達の試験が終わるまで耐えれば俺達の勝ちだ二人共期待している」

「わかりました」

「やだ」

姫路は了承する、しかし優羽は拒否する。

「優羽何が目的だ」

優羽の言葉に雄二が言う

「じゃあ、この前言った絵のモデルになってよ」

別に危ない絵なんかじゃない、私の幼なじみの二人のツーショットの絵が描きたいだけだ。

「断る」

雄二が即答する

さすが雄二、一筋縄にはいかないなら最終手段に出る。

携帯を取り出し

「もしもし霧ちゃん」

即座に携帯が奪われる

「わかった引き受けよう」

雄二ため息をつきながら答える

「てゆうか雄二、なんでDクラスからなの？」
明久が雄二に聞く

「簡単な話だ、Eクラスは戦うまでもないからだ、Cクラスは俺達の実力じゃあ姫路達の試験の時間稼ぎはできないだろうし。そうかんがえるとDクラスが一番妥当なんだ、Dクラスにはやって貰いたいことがあるからな」

「雄ちゃん案外考えてるんだね」

「俺はお前達に期待している頼んだぞ、目指すはAクラスだ」

『お——!!——!!——!!』

みんなの声が屋上に響いた

【試召戦争編】第一問 気まぐれ猫とFクラス（後書き）

とりあえず女の主人公って少ないなって思って作ってみたけど、だ
れと引っ付けよう……

まあ考えます

第二問 試召戦争と気まぐれ猫（前書き）

問題

以下の意味の四字熟語を答えなさい。

自然のままです飾り気がなく、ありのままの真情が言動に現れること

姫路 瑞希の答え

天真爛漫

教師のコメント

さすがに簡単すぎましたか、また類義語として純粹無垢と言つものもありません。覚えておきましょう

坂本 雄二の答え

遠月優羽

教師のコメント

一瞬丸にしそうでしたが四字熟語ではないのでダメです。

吉井明久の答え

遠月優羽

教師のコメント

こんな所にも

木下 秀吉の答え

遠月優羽

教師のコメント

3人も同じことを描いてる人がいるとは思いませんでした

第二問 試召戦争と気まぐれ猫

試験召喚戦争まで少し前、場所はAクラス前。

「きりりちやくん、今から試験受けるからいつもの貸して」

突然元気な声を出してやってきた優羽、ちなみにAクラスの人達は授業中である。

「はい、優羽が試験なんて意外」

変わらない口調で翔子が言った

「なんか代表の雄ちゃんがAクラス倒すとか面白い事やるからね」

優羽は渡された鉛筆と消しゴムを受け取りながら言う。

優羽は倒すべき敵に対してとんでもない事を言う。

「そう、じゃあ雄二に伝えて。待ってるって、じゃあ優羽頑張るって」

「うん、じゃあね。あ、今日も一緒に帰ろうね。」

それだけいうと元気よく扉を閉めて去って言った。まるで台風のように、Aクラスのメンバーと教師すら呆然としていた

「翔子、あれが翔子の親友？」

ボーイッシュな雰囲気をした少女、工藤愛子が話しかける。

「そう」

「な、なんて言うか相変わらずだね」

秀吉とそっくりな顔をした少女、木下優子がいう。

翔子がほんの少し誇らしげにいう

「優羽は元気で真っ直ぐなとってもいい子、少し気まぐれな所あるけど」

「それにしても、Fクラスは面白そうだね」

工藤愛子が暢気な事を言った。

私は今試験を受けている。正直試験なんてつまらないからいやなんだが、雄二との約束があるから真面目にやっている。

私の成績は鉄人しか教師陣は知らない、だから試験の監督の先生は驚いている。

まああつきー達はDクラスと戦っているんだろうなあと考えていた。

試験召喚戦争とはクラス同士自分の点数に応じた召喚獣を操り戦って、先にクラスの代表を倒した方が勝ちである。ちなみに召喚獣は攻撃を受けると点数が減り、0点になると戦死者となり鉄人（西村先生）補習になる。

場所はかわり廊下、Dクラス戦線の最前線である。

「これで終わりよ

美波の召喚獣がDクラスの生徒の召喚獣を倒す。

すると突然鉄人がやってきた

「0点になった戦死者は補習だ」

「嫌だ鬼の補習は勘弁だ」

「安心しろ、補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という模範的な生徒にしてやろう」

Dクラスの生徒が引きずられつれていかれる。

現在状況はあまりよくはない、食い止めてはいるが正直ギリギリである。

「秀吉なんとか持ちこたえて、優羽と姫路さんが戻ればこっちの
もんよ」

美波が自らの召喚獣を操りDクラスを抑えながら言う。

しかし正直姫路さんは確かに期待できるが、
あの気まぐれな優羽の事だ不安でしかたがない。

実力のしらないFクラスの面々ならなおさらだ。

「美波、ここは一体撤退しよう」

明久が提案する。しかし雄二からの伝令がくる、紙を渡され内容は

【逃げたら殺す】

「全軍突撃」

明久達が奮戦する

場所は優羽と姫路さんのいる教室。

（やっぱりテストってつまらないなあ約束なかったら、速攻絵描くのに）

優羽はそんなことを考えながら問題を解く。

すると放送が流れてきた

『連絡致します。船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館で待っています。生徒と教師の垣根を超えた男と女の大事な話があるそうです』

「あははははははは」

私は声を上げて爆笑した、発案者は多分雄ちゃんだろう。目的は飽きっぽい私のやる気を復活させるのと、戦線を広げないためだろう。それにしてもお腹痛い

あらかた点数もとれたしこれなら問題ないだろう

「先生、私テストここまででOKです。姫路さん私先行くね」

それだけ言って教室を飛び出す。さあ早くしないとおいしい所見逃しちゃう。

戦況はかなり不利、明久と美波とその他数人いるだけでかなりまずい

「アキかなり不味いわ」

このままでは全滅してしまっ。

「みんなーおっまたせ、Fクラス遠月優羽、召喚」

優羽は可愛いらしく「えい」と声を上げて召喚された。

出てきたのは猫耳と猫の尻尾を付けた小さなデフォルメ化された優羽

数学Fクラス 遠月優羽 689点

『なにいいいい』

Dクラスの生徒が驚く、まあ確かに全く授業に出ないと言われる生徒が学内トップクラスの点数なのは驚くのも無理も無い。

「いつくよ〜」

Dクラスの人数は約8人ほどそれがあつという間に倒された。

前線にいたDクラスのメンバーが鉄人に補習室に連行されている。

「なんだもう終わり？」

優羽はつまらなそうに言う。

「凄いよ、遠月さんあつという間にやつつけるなんて」

明久が言う

まあ小さな猫優羽が相手の召喚獣を引つ掻いただけなのだが。

(ここにもうDクラスはいないし姫路さんがDクラス代表に攻撃を

仕掛けて終わる頃だよね。ならちよつと・・・（

優羽は小悪魔みたいな笑顔で

「そついえばあっきーの召喚獣よくみたいからちよつと見せて」

「え、別にいいけど」

そついうと明久の召喚獣がトコトコ優羽の前に来る。

「えい!!」

優羽の召喚獣が明久の召喚獣に猫パンチを繰り出す。

689点の召喚獣の攻撃が明久の召喚獣に当たる

「ギヤアアア顔がめり込むううう」

明久が顔を抑えながらのたうち回る。

当然そんな攻撃を受けた明久の点数は0点になり。

背後には鉄人の姿。

「吉井よ、さあ楽しい楽しい補習の時間だ」

鉄人が笑顔でいう

「なに心配はいらん先ほど姫路が代表を倒したそうだが、安心して勉学に励むんだ」

「理不尽だああ」

明久の悲痛な叫びとともにDクラス戦はFクラスの勝利に終了した。

その光景を見て優羽はひとまず満足した。

それを見ていた秀吉と美波は

「やっぱり猫みたいだ（じゃ）」

と呟いていた。

場所は屋上、少し大きめのクッションの上に小さく丸まりながら優羽が眠っていた。

「優羽、起きて」

親友の翔子と呼ぶ、しかし起きる気配が無い。

寝ている様子はまるで猫そっくりだった。

こうなった優羽を起こす方法は一つ

翔子は優羽の鞆からねこじやらしを取り出し

「優羽帰ろ」

優羽の前で動かし始める、直後優羽がねこじやらしを掴み取り

「うん、あ、霧ちゃんおはよう」

「優羽帰ろ」

「うん、あっ帰り霧ちゃんうちにこれる？」

「問題ないけどなんで？」

「雄ちゃんとの約束でね、二人のツーショットの絵が描きたいからモデルになって貰いたいの」

「行く！描いたら私にも」
「ペーでいいから一枚頂戴。」

「うん」

相変わらず霧ちゃんは雄ちゃん一筋なんだなあと思い。恋ってのは素敵だなあと思う。

「そういえば、霧ちゃんなんでここに居るのわかったの？」

霧ちゃんはそのセリフに当たり前のように見える。

「優羽と雄二の事なら何でもわかる」

それってなんか怖いよ。

帰り道、雄ちゃんが浮気現場（実際は道を聞かされただけ）を目撃した霧ちゃんに襲撃されて、連行された。

その日、私の今一番描きたい絵が完成した。

ちなみに余談ではあるが、Dクラスへの設備交換は行われず。Bクラス戦の作戦のための布石を立てたらしい。

ネタがわかると面白く無いから私は詳しい事は知らないんだけどね。

とにかく、これで霧ちゃん率いるAクラスに一步前進した。

まあたまには真面目にテストを受けるのも悪くないと思い、次のBクラス戦ぐらいは協力してあげようかな？

第二問 試召戦争と気まぐれ猫（後書き）

早くもネタ切れの気配

第三問 Fクラスとお弁当（殺戮兵器）（前書き）

問題

『厚かましくて恥知らずな様子という意味の四字熟語を答えなさい。』

姫路 瑞希の答え

『厚顔無恥』

教師のコメント

正解です。簡単過ぎましたか？

遠月 優羽の答え

『厚顔無恥』

教師のコメント

いつもそのようにやってくれれば嬉しいのですが……

吉井 明久の答え

『坂本雄二』

坂本雄二の答え

『吉井明久』

教師のコメント

『君達の仲が大変良いと言ったことがわかりました』

第三問 Fクラスとお弁当（殺戮兵器）

朝、私・・・遠月優羽はいつもより早く起きた。いつも一緒に寝てくれる愛犬ドーベルマンのケロベロスことケロちゃんと共に起きる。

早起きの理由は先日の雄ちゃん達にお弁当を作ってあげると言っているからだ。姫路さんも作ってきてくれるそうだがまあ量が多いに越した事がない。

「ねえ、ケロちゃんお弁当何がいいかな？」

「ワン！...！」

私の質問にしっかりと返事をする。ケロちゃん、それを聞いてケロちゃんの頭を撫でる。

「よし、いつも通りサンドイッチにしよう」

こうして私はエプロンを着てお弁当作りを始める。

「あ、雄ちゃんおはよう」

校門で雄二と出会う優羽、それを見た雄二が不思議そうに聞く。

「今日は翔子のやつは一緒じゃないのか？」

普段優羽は翔子と共に学校に向かう。雄二は何故か逃げるように先に登校して行ってしまう。

「そうなんだよねえ、全員分のお弁当作ってたら時間かかったちゃって。先に行ってもらったんだ」

昨日のDクラスとの試召戦争はFのクラスの勝利となった。しかしFクラス代表こと雄二の提案で、教室の変更は無しになった。雄二がDクラスに挑んだ理由は次のBクラスとの戦いで、やってもらうことがあったからだ。

「雄ちゃん、じゃあ今日はBクラスと戦うの？」

「ああ、だが昨日の戦いでみんな結構点数を消費してるからな、と

りあえず午前中は点数補給になるな。」

話を聞く限り宣戦布告は午後になるだろう

テストが終わって昼休み、姫路と優羽の弁当を屋上で食べる事になった。

皆が英気を養い、Bクラス戦に備える筈だった。しかし優羽達の見
た光景はそれとは程遠い物だった。

ムツツリーニが姫路の弁当を一口食べると、謎の震えを見せて倒れた。

それを見た明久と秀吉は小さな声で話し合う。

「秀吉、どうする？」

「どうするといわれてものう、誰かがあれを食べなければならん
じゃろう。」

「女の子の優羽にあれを食べさせる訳には行かないし、僕達であれ
をなんとかしないと……。」

二人が相談する、雄二は今飲み物を買ってきているため此処にはいない。3人の誰かが生贄にならないといけないのだ。

「皆さん、どうしたんですか？」

誰も姫路の弁当を食べないのを見て姫路が言う

ムツツリー二がああ弁当を食べて倒れたのだ、自分から死のうなにて勇者はいないだろう。

優羽はそんな二人の様子見て楽しんでいた。あんなに見た目は良いの見た目を裏切る弁当だ、放っておけば何も知らない人だつて騙されるだろう。

「ムツツン、生きてる？」

優羽は指でムツツリー二の頬をつつきながら言う。

ムツツリー二は力無く親指を突き出してそのまま倒れ込んだ

そんな会話をしていると、飲み物を買に行った雄二が戻ってきた。

「おい飲み物買ってきたぞ、お、なかなかうまそうじゃないか。どれどれ……」

そういつて雄二が姫路謹製の弁当を一口食べる。

「雄二、僕は君の事は忘れないよ」

「雄ちゃん流石クラスの代表だね」

二人が雄二の行動に賞賛の言葉を送る。

「二人共なにを言ってるんだ……ゴバアア」

謎の叫び声が響いた、そして雄二も同じように倒れ込んだ。

「あの、坂本君どうさたんですか？」

姫路が疑問符を頭に浮かべ聞いて来る。姫路から見たら雄二が突然倒れたようにしか見えないだろう。

「雄ちゃんきつと急いで屋上に戻ったから足がつったんだよ」

姫路を傷つけないように真実を隠蔽して笑顔で答える優羽。しかし雄二がそれを否定しようと……

「何を言ってるんだ、べ」雄ちゃん霧ちゃんとデートしたいの？
いやそうなんだ足がつつたんだ……」

優羽の迅速な言葉でそれは回避された。雄二はそのまま意識をシャットアウトする。

残るのは明久と秀吉の二人のみ、対する弁当はまだ殆ど残っている。

「優羽よ、主あれをなんとかする方法はないかのう？」

秀吉が優羽にアドバイスを求める。しかし優羽は

「秀吉君、何を言ってるの？お弁当なら普通に食べればいいじゃない。」

この面白い状況を終わらせるのが勿体ないと考える優羽は笑顔で秀吉達に死刑判決を言う。

「優羽ちゃんも食べないんですか？」

姫路の凶器が優羽にも突きつけられる。しかし優羽には回避する術があった。

「瑞希、ごめんね。私最近ちょっとあれで・・・ダイエット中なんだ。だからアッキーと秀吉君達で仲良く食べてよ。」

女性の食べたくない時のリーサルウエポン「ダイエット中なんだ」により相手を傷つけずに断った。

「遠月さん、お願いだよバカな僕達にお辞儀を・・・」

「明久、お辞儀をしてどうするんじゃ。それをいうならお慈悲をしろろっ。」

明久が優羽に縋るように助けを求める。二人はまだ死にたくないらしい。

十分楽しんで満足したのか優羽が言葉を放つ。

「瑞希、ごめん私教室にスケッチブック忘れてきた。悪いけどもってきてくれない」

明久達にとって女神の救いの言葉が来る。姫路はそれを聞いてわかりましたと答え教室に向かった。

姫路がいなくなったその隙に優羽が明久達に言う。

「姫路さんがいないうちにこの弁当を処分しちゃえば解決だよ。何か言われたら私がフォローするから口裏あわせてね。」

優羽が笑顔で作戦を伝える。そして明久が弁当をひっくり返す、少し罪悪感が出るが仕方がないと明久は思った。しばらくし姫路が優羽のスケッチブックを持って戻ってきた。

「優羽ちゃん、どうぞ。」

姫路が優羽にスケッチブックを渡し、ひっくり返ったお弁当を見る。「ごめんねあれアッキーが姫路の弁当に喜び過ぎて興奮しちゃってひっくり返しちゃったんだ」

優羽の言葉に明久が続ける。

「そ、そうなんだ姫路さん。ごめんねお弁当台無しにしちゃって嬉しくてつい……」

二人の言葉を優しい姫路は疑うことなく信じる。

「いいんですよ。駄目になってしまったのは残念ですけど……喜んで貰って嬉しいです。また作って来ますね」

何か不吉なセリフが聞こえたが聞き流す二人

昼休み二人の尊い犠牲者を出して昼休みが幕を下ろした。ちなみに余談だが優羽の弁当は明久達で食べ、結構な評判であった。そして明久はFFF団に処刑され、Bクラスへの宣戦布告は多数の主力が倒れた事により明日へ持ち越しとなった。

所変わって遠月宅

優羽はAクラス代表であり、親友の翔子と共自室にいた。

家は家族はそれぞれ海外で色々している。よって家には愛犬ケロベ

ロスと優羽の一匹と一人暮らしなのだ。

「それでさ、霧ちゃんは雄ちゃんと何処までいったの？」

二人は女の子同時恋の話に花を咲かせていた。

「まだまだたまに遊びに行くぐらい、雄二は恥ずかしがり屋だからなかなか素直にならない。」

基本二人の会話は優羽が話を振り、翔子が答えるで行った状態だ。

優羽はケロベロスに抱きつきながらふぐんといった状態だった。

「優羽の方はどう？気になる人や好きな人出来た？」

翔子が優羽に聞いた、言われっぱなしっていうのも恥ずかしいのだから。

「私はねえ、気になる人とかはいないけど好きな人はいるよ。」

優羽の言葉に翔子が少し驚いた様子だった。

「誰？」

気になるのか翔子が少し声を大きくする。

「私の好きな人は。霧ちゃんでしょ、雄ちゃん、ムツツン、秀吉君、アッキー他にもいっぱいいるよ」

優羽がケロベロスに抱きいたまま言う。

「あ、もちろんケロちゃんの事も大好きだよ」

ケロベロスの頭を撫でながら優羽が答えた。それを聞いた翔子は安心した。

彼女にはまだ恋という物が具体的にわかって無いのだろう

「優羽、それはラブじゃなくてライク」

ケロベロスと戯れている優羽を見て小さく呟く。誰にも聞こえないような小さな言葉だった。

「霧ちゃん、なにか言った？」

「何でもない」

翔子は優羽が恋をするのはまだまだ先な事だなど考えていた。

第三問 Fクラスとお弁当（殺戮兵器）（後書き）

ようやく更新……

こんな駄文小説で呼んでいる方はいないと思いますが

待っていた方どうもすいませんでした

第四問 Fクラスの最終兵器（前書き）

問題

豆電球など多くの発明をし後に発明王と呼ばれた科学者の名前を述べよ、またその人の残した言葉とは何か？

姫路瑞希の答え

『？エジソン』

『？天才とは1%の閃きと99%の努力である』

教師のコメント

正解です、彼は幼少時、教師に頭が腐っていると言われ馬鹿にされると言った話が有名ですね。

遠月優羽の答え

『？1%の閃きがあれば99%の無駄な努力をしなくてよい』

教師のコメント

これはエジソンが言った本来の言葉とされていますね。しかし記者の誤解により彼の名言が生まれたといわれていますが、通説ではないので残念ながら不正解です。

吉井明久の答え

『?エンジン』

教師のコメント

絶対一人はこう書くと思いました。

第四問 Fクラスの最終兵器

試験召喚戦争

〓 Bクラス V S Fクラス 〓

「凄い、凄い」

優羽は廊下の戦いを呑気に観戦していた。BクラスとFクラスの力の差は歴然、点数だけ考えればBクラスが圧勝すると思われる。しかしFクラスは押されながらも召喚獣をつまく動かししっかりと対応していた。

Bクラスは呑気に観戦している優羽を相手にせずFクラスの人間を相手にしていた。

Aクラス主席と同じレベルの人間を相手にするなどという危険行為はしなかった。

「ちょっと優羽、ちゃんと戦ってよ。」

美波が優羽に向かい文句を言う。しかし優羽は全くやる気を見せない。

飽きっぽい優羽の悪い癖が出てきてしまったのだ、これはFクラスにはかなり痛い。逆にBクラスにとってはこの上なく有利だった。

Fクラス前戦部隊は点数が少なくなりどんどん撤退していきFクラスはみるみるうちに不利になる。

「美波、秀吉ここは一旦退こう。」

明久の言葉に頷き残ったFクラス前線部隊が撤退する。Bクラスも追い討ちを掛けようとしたとき姫路が肩で息をしながらやってきた。

「遅れてすみませんでしたサメン召喚」

Bクラス牧野 徹 数学289点VS Fクラス姫路 瑞希 数学452点

姫路の召喚獣が追撃する先頭の召喚獣を大剣で攻撃をしかける。切られた生徒はあっけなくやられ戦死状態になった。

「姫路さんだわ、みんな一時撤退するよ」

Bクラスの生徒の一人が言うとBクラスも撤退をしていった。

Fクラス教室内、クラスの代表である雄二は連絡を耳にして頭を抱えていた。

理由は言うまでもなく優羽である、学園屈指の学力があるのにも学園一勉強が嫌いな奴。最強の駒なのだが気まぐれという爆弾付きだ。しかし雄二も伊達に幼なじみをしていない、優羽が飽きる事は少なからず予想していた。

「優羽の奴もう飽きたのか、さて一体どうしたものか……………」

雄二が思案していると教室に連絡役がやってきた。

「これは……………酷いのう」

教室に撤退した明久達が見たものはかなり荒らされている教室、シヤールペンなどの筆記具等は使い物にもならないようだった。

教室にいた雄二が言う。

「悪いな協定の申し出があつてな、そつちの方で教室を一時空にしていた。」

雄二が荒らされた教室を見渡しながら言う。

「これでは点数の補給が出来ないね、まあ私はする気ないから関係ないけど」

優羽の発言にみんなが疲れているような顔をしていた。

「雄二それで協定ってどういう事？」

明久が雄二に内容を聞く。

「ああ、4時までには決着がつかなかったら戦況はこのままで明日に持ち越す。ただしその間試召戦争に関する事はしない。」

内容を聞く限り持久戦に持ち込みたい雄二達には破格の内容だった。そして雄二はそれを受け入れ戻ってきたら教室はこの状況だった。

「Bクラス代表はあのカンニングのねもっちだからね。」

雄二が優羽の発言を聞いて納得する。

根本………現Bクラス代表はカンニング常習犯、球技大会で相手に一服盛ったなどなど卑怯者の代名詞といった奴だった。

「ところで優羽よ、何故お主がそれを知ってるのじゃ？」

「乙女の秘密だよ」

秀吉の質問に指を口元で立てて微笑みながら言う優羽。

理由はまあ優羽が根本のカンニング現場を見ていたからだ。

「ともかくBクラス代表があいつである以上慎重に行く予定ではない。
」

雄二の言葉に各々が頷く、そして雄二が優羽に向かい少しきつめの声で話す。

「優羽Fクラス最大戦力のお前が戦わないってのはどういう事だ。
こちらは約束を守ったのにそれは無いだろ。」

雄二は優羽に絵のモデルになることを条件に協力していた。雄二は既に約束を果たしているから「お前も戦え」と言うことなのだろう。

「その約束は確かDクラス戦で守ったじゃん。」

優羽の言い分はあれはDクラス戦のみの事でそれ以降はやる義務はないとの事。流石の雄二もこうなった優羽を止められない、諦めて姫路を主体とした作戦を考えなければ。

そこで雄二がある違和感に気付いた。

「そついえば姫路の奴どこにいったんだ？」

雄二の言葉に初めて姫路がいない事に気付く。

「雄二、僕が探しに行くよ」

「ああ頼む、俺たちは教室をなんとかする事にしよう。」

明久がそついいながら教室を出て行った。

優羽も仕方がなく自分の鞆を開けて中身を確認した、そしてやっぱり筆記具がボロボロになっていた。

しかし優羽は自分の鞆にあるものがないことに気付く。

そしてもう一つ手紙を見つける。それに目を通した優羽の表情が変わる、持っていた紙を握りつぶし鞆の中に入れる。

そして雄二も優羽の様子がおかしいのに気付く、いつもの天真爛漫な様子とは違いその表情はとても黒く妖艶で悪い魔女のような顔だった。

「……………ねえ雄ちゃん……………」

いつもの明るい声のトーンとは違って変わり暗く黒い声……………。

「なんだ？」

「明日の試召戦争って何時から？」

雄二は優羽がどんな状況なのか理解した、昔自分があるものを勝手に見た時と同じ状況。

「時間なら9時からだ」

「なら……………1時間……………1時間だけ前線に立つよ、私一人でもいいから。あとのみんなは教室で籠城してて構わないから……………」。

雄二は思った。

ああなつた優羽は俺じゃあ止められない、優羽の前線孤立策を許可する。

しかし雄二も保険を掛けて他の攻め手を計画していた。

内心こんなものはいらないとかんじBクラス代表がどんな墓穴を掘ったのかと笑いながら考えていた。

Bクラス代表根本は人通りの少ない階段で一人嫌な笑い声を上げる。

根本は自身の策がうまくいった事に内心喜ぶ、協定を理由にFクラス
の教室荒らし。それによる点数補給の阻止、そして予定外ではあ
ったが2つの掘り出し物を手に入れた。

一つは姫路の持ち物である、とある手紙……………誰に出すのか不明
のラブレター。

もう一つはFクラスの最大要注意人物の遠月優羽から出て来たビニ
ール袋とホルダーで嚴重に保護されたノート。明らかに他の物とは
扱いが違った。

中身は何なのか知らない根本は確信した。この2つがあれば二人を
無力化出来ると……………。既に姫路については少し脅迫したら何も出
来なくなった。

「これがあるなら協定など結ぶ意味などは無かった。」

根本は卑しい笑みを浮かべ一人佇んでいた。

その様子を全て明久に見られていたとも知らずに……………

明久は心底腹を立てていた、理由は根本の姫路に対する脅迫だった。

確かに姫路を無力化するのはいくら馬鹿な明久と言えど理由は分かる、だからといって許せる訳もなかった。

人の大切な気持ちを踏みにじる行為をした根本を許せる筈が無かった……………

明久は手を強く握り締め改めてBクラスに勝って見せると誓った。

翌日の9時頃、再びBクラスとの戦いが懸念されるなかFクラス付近の廊下には殆どの人がいなかった、というか一人しかない。

そこにいるのは唯一人優羽がいるのみ、他のFクラスの生徒は誰一人としていない。

前線にいるBクラスの面々は不思議がっていた。

「なんで？」という生徒もいれば「畏かな？」と警戒する生徒もいる。

攻めいりたくても攻められない状況が続く。しかし……

「8人ちよつとかな？……やっぱりBクラスはたかがFクラスに臆病風に吹かれているみたいだね。」

昨日雄二がみた妖艶な笑みで悪戯っぽくクスクス笑う優羽が言った一言、Bクラスを焚き付けるには十分だった。

8人いる生徒の召喚獣が優羽の召喚獣に襲いかかる。優羽の召喚獣はあっさりやられ消えた。

Bクラス生徒8名VS遠月優羽

日本史

合計1235点VS762点

「えっ……………」

Bクラスの生徒が声を上げる。

優羽の召喚獣が消えたにも関わらず点数は0点になっていない。

Bクラスの生徒達が戸惑う、直後何かが一人の生徒の召喚獣が襲われ0点となる。

「な……………何がおきたんだ？」

なにが起きたのか分からない。一人、二人……………そして三人ついに4人だけとなった。

「Bクラスっていうからそこそこの実力かと思ったけど……………つまんない」

飽きたように言う優羽、みると優羽の前には普段より一回り小さいの優羽の召喚獣が4体いた。

Bクラス前線4名VS遠月優羽

570点 VS 680点

4人がかりでも勝てない点数に勝てるわけもなくあっさり全滅した。

Fクラス教室その場に多数のFクラス生徒がまったりしていた。

「のう雄二よ、わしらはこんなまったりしていいのじゃろうか？」

秀吉が心配した様子で聞いている、Bクラス戦の最中なのにもかかわらず雄二は寝転がってだらけながら答える。

「ああ、問題ないだろ。それにあいつの邪魔なんかしたら逆にこっちが巻き込まれる心配がある。それに保険は掛けてあるしな、万が一優羽が戦死してもこちらの勝利は決まったようなもんだ。」

そう、Fクラスにとって優羽は明久と同じく核ミサイルのような物、使い方次第では最強になる存在だった。

雄二は自分の出番は戦いが終わったあとにあるようなものだと考えていた。

Bクラス教室

「大変だ前線部隊が全滅した！！しかも相手は遠月優羽たった一人に……………」

一人のBクラスの生徒が報告する。その言葉に生徒達が驚く。たった一人に8人の前線部隊がやられたのだ、相手のほうが消耗が激し

いFクラスを押すには十分な人数だ。

教室には15人程の生徒がいる、Bクラスの代表の根本は声をあげた。

「大丈夫だたとえやって来ても相手は一人、この人数相手に勝て」

ガラ

根本が話している最中に優羽が只一人教室の扉を開きやってくる。

「君は馬鹿なのか？この人数相手に一人なんて。」

根本のセリフと共にBクラスの全ての召喚獣が優羽の召喚獣に襲いかかる。

しかし優羽の召喚獣もそれに対応し撃退し、4名の生徒を倒す

Bクラス11名VS遠月優羽

現代文

Bクラス平均211点VS665点

点数をみた根本が驚きながら言う。

「消耗したはずなのに相変わらずデタラメか点数だな、だがいくら点数が高くてもこの人数相手じゃどうしようもないだろ」

根本は余裕の表情を見せていたが、次の瞬間表情が激変する。

「ねもつち多勢に無勢って考えって負ける発想なんだよ。」

にっこり笑いながら言う優羽しかし目は笑ってなく怒っているように見える。

そして優羽の召喚獣の腕輪が光る、その瞬間召喚獣が一回り小さくなり5体に増えている。

「ねもつち……私久しぶりに怒っているからBクラス全滅しちゃうかもしれないよ？」

優羽の脅しに近い言葉にBクラスの生徒はどうせ負けるなら補習を受けられないようにしたほうがよいと、完全見学体勢に入っている。完全に負けを認めている、確かに人数が勝っていても一対多数で互角なのだから、5体に増えたら優羽の召喚獣には勝てないと悟るだろう、諦めてないのは根本只一人だった。

「まだまだ……そうだあれがどうなってもいいのか？大切な物なん
だろ？」

根本が最後の切り札を見せるしかし

「そういう脅しは……しっかりと管理してやるべき……」

気がついたらムツツリー二が教室にあらわれ、根本が優羽の鞆から
奪って隠したあるものを持っている。

「ムツツン協力ありがとう」

ムツツリー二は本来の雄二の作戦では試召戦争で根本に止めさす重
要な役割を担っていた。

しかし優羽が積極的に試召戦争参加したことにより、その必要がな
くなってしまった。

だからこそ隠密行動が得意なムツツリー二に優羽が頼んだ事であっ
た。

そして優羽が試召戦争を全て引き受ける、まあ最後は自分の物に手
を出した根本を直接倒したかったのだが……

「ねもつち、乙女の鞆を漁る人は容赦しないよ。」

Bクラス代表に対し笑顔で答える優羽

Bクラス根本恭二VS Fクラス遠月優羽

総合科目

2269点 VS 6445点

圧倒的戦略差に根本はあっさり敗れBクラスとの決着がついた。

第四問 Fクラスの最終兵器（後書き）

更新遅れました、テスト勉強など色々忙しく執筆に苦戦しました。

これからも更新していきますので宜しくお願いします

主人公の設定その2（前書き）

本当は今回の内容は第四問の後書きで書く予定だったものです。

主人公の設定その2

ストーリー内で言われなかった優羽の召喚獣設定

見た目は話の中で言ったので割愛っと言いたいですが、流石にそれは酷いので書きます

見た目

猫耳に尻尾をつけたデフォルメされた優羽、青いハツピを着けて下はポニーテールではなくロングになっており黄色の鉢巻をつけている。いわゆるマンガとかに出る元気な女の子のお祭りスタイルな服装。

今回は召喚獣のステータスと腕輪の能力等を……

まずは召喚獣

タイプはパワー型というよりスピード型、基本武器は猫と同じく爪戦法はスピードで相手を翻弄しながら戦う、しかしかなりの速さなので召喚獣の操作になれない人には反応すら難しい。

次は腕輪の能力を……

その前に腕輪って何？という人の為に簡単に説明。腕輪とは400

点以上の召喚獣につけられる特典のようなもの、腕輪のある召喚獣には特有の能力等が付加されるというもの。では紹介……………

…。
本来は本編内で紹介したかったが文才がなく出来ませんでした……………

簡単に能力を言ってしまうえば分裂、分裂した召喚獣は本体とは違い倒されても0点にはならない。

しかし点数が減らない訳ではなく一体倒されると50点の点数消費が起きる、また本体と分身はある程度の距離(約20メートル)を離れると分身は消滅する(この際にも点数消費のペナルティは起きる)。

分身は一度でも攻撃を受けると消滅する、因みに召喚終了時に残る分身も消滅という扱いとなる。以上のようにかなりチートに見えるが、多数の召喚獣を操ることになりかなりの集中力を使うので、精密な動きが難しくなる。

なので優羽はスピードに任せ適当に操作をするため、仲間を巻き込む危険がある。

よって仲間がいる状態では味方を巻き込む為、試召戦争にはあまり向かない。

主人公の設定その2（後書き）

こんな所です。

矛盾、おかしい所等あれば報告してください。

随時修正させていただきます。

第五問 気まぐれ猫ともう一人の幼なじみ（前書き）

問題 以下の問いに答えなさい

『女性は何（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体つきとなる』

姫路 瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です

土屋 康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見ることが多いため、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12才。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

吉井 明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

遠月 優羽の答え

『変身』

教師のコメント

どう発想したらそうなるのか先生は非常に気になります。

第五問 気まぐれ猫ともう一人の幼なじみ

Bクラスとの戦いに勝利したFクラス、雄二がBクラスとの取引をしている。

「教室の交換は無しだと？」

雄二の言葉にBクラスの代表根本恭二が驚きの声をあげる。

「黙れ負け犬、お前に言ってるんじゃない、俺はBクラスの奴らに言ってるんだ。」

「くっ」

一言で根本を一蹴する雄二、構わず話を続ける。

Bクラスの生徒が雄二の言葉の理由を聞く、雄二が口を開いた。

「設備交換免除には条件がある、その条件をのめばの話だ。」

それを聞いたBクラスの生徒が答える。

「設備交換が免除されるならどんな条件でものもう」

よほどFクラスの設備交換がいやなのかBクラスの面々が即答した。

「条件とはお前達の代表がAクラスに試召戦争を仕掛ける意志があると伝えてくれ、あくまでも意志を伝えるだけだ。」

雄二の言葉にキョトンとするBクラスの面々、あまりに内容が簡単な事だったからだ。

「そんな事でいいのか？」

Bクラスの面々が疑問を抱く、たったそんな事で設備交換が免除されるとは思わなかったんだろう。

「ああ……だがあの屑にはそれだけでは済まさないけどな……明久、優羽」

雄二が歪んだ笑みを浮かべて二人を呼んだ。

「ねもつちにはこれを着てAクラスに行ってもらおうよ」

優羽がジャーンっと明久の持っている服を指した、明久の持ってい

る物それは女子生徒の制服だった。

「安心してサイズは完璧だから」

最高の笑顔で笑う優羽。

「待て、だれがそんな服を着るか……………」

しかし根本が拒否しようとした所をBクラスの生徒達が

「任せて、どんな手を使っても遂行するから」

と言いはなった、元々人望の無い根本を庇う人はいない。

抵抗する根本はBクラスの生徒に気絶させられ女子生徒達に着替えさせられる。

明久がそんな光景を見て女子生徒に

「可愛くしてあげてね……！」
と言った。

まあ土台が腐っているから不可能なのだが。
優羽はそんな光景を見て満足したのか、ムッソリーニから取り返したノートを受け取り教室を出て行った。

受け取る際ムッソリーニに「写真を撮るのを忘れずにね」と教えたのは言うまでもない。

明久も明久で根本の制服のポケットからあるものを取り戻し、優羽を見ながら雄二に質問する。

「ねえ雄二」

「なんだ？明久」

「優羽のあのノートって一体なんなの？」

大きさにスケッチブックだろうが、あそこまで大事に扱っている理由が解らなかった。

雄二は

「ま、馬鹿なお前にはわからないだろうな。そんな事よりそれ届け

に行ったらどうだ？」

雄二の言葉に従い、明久は取り戻した物を持ち主に渡しに行くのであった。

く屋上く

風の音が響き渡る屋上で優羽は一人座っていた。

抱えている物を確認する。多少ノートを保護する袋が痛んではいるが、開けられた形跡は無い。
それを改めて再認識すると小さな声で「良かった」と呟いた。

しばらくすると屋上に一人やって来た。

「よお」

軽く手を上げて雄二が優羽に声をかけた。

「悪かったな、俺の不注意だった。それ、あいつとの約束だろ。」

雄二が謝りながら言う。

「うん、蒼ちゃんとの大事な大事な約束。」

相変わらずの笑顔で答える優羽、優羽は雄二、翔子に次ぐもう一人の親友の顔を思い浮かべる。

親友との別れの約束

「次に会うときは、そのノートに沢山の絵を描いて僕に一番に見せてね。」

そういつて遠くに引越した友達がいた。

場が少し静かになる。

「なんかしんみりしちゃったな。俺は先に帰ってるわ」

いつものように気だるそうな声で雄二は屋上を離れ、優羽だけが夕暮れの屋上に残っていた。

文月学園学長室

学長室には三人の人間がいた。

一人は椅子に座っている学園長、もう一人は雄二達に鉄人と呼ばれる西村教諭。そしてもう一人は他校の制服を来た生徒であった。

「まさかこんな時期に転校生だとはね」

やれやれといった様子学園長、西村教諭は学園長に生徒を紹介す

る。

「彼の名前は雨咲蒼夜^{あめさきそうや}先日親の都合で転校生してきた生徒です。振り分け試験の結果はAクラスということになりました。」

西村教諭の紹介を受けて生徒が口を開いた。

「初めまして、学園長。先程紹介された雨咲蒼夜と言います」

生徒は少し緊張しながらも自己紹介をした。

「ちなみに彼はAクラスの霧島、Fクラスの坂本、遠月の幼なじみだそうです。」

西村教諭の言葉を聞くと学園長は内心で問題が増える事がないようにと祈っていた。

正式な登校は引っ越しの都合上で明後日からとなった。

彼の転校はこの学園に新たな騒動を巻き起こす事になることに……

「翌日」

「Cクラス対策をする」

雄二が教壇の前でFクラスの皆に向かって言っていた。

Bクラス戦において根本がCクラスと組んでこちらを袋叩きにしよ
うと画策していた、しかし優羽の逆鱗に触れた事で余りにも早い決
着となったためその意味が消えた。だからと言ってこのまま放って
置けば宣戦布告される可能性もある。

Bクラスに勝った今Cクラスと戦うメリットは無い、だから雄二は
そのための対策をするのだらう。

「雄二それで具体的に何をするのか？」

明久が質問する。

「秀吉と優羽に協力して貰う。」

雄二が具体的な作戦を言う。

内容は秀吉が双子の姉であるAクラスの優子になりすまし、優羽は
翔子になりすましFクラスの敵意をAクラスに向けて貰おうという
物だった。

概ねの理由を説明すると秀吉が口を開いた。

「雄二よわしが行くというのはわかるが優羽もというのはどういう事なのじゃ？」

「簡単な理由だおい優羽……………って何をしてんだお前……………」

優羽を呼ぼうと声をかけるが優羽は珍しく自分の席に付いて何かをしていた。まともに授業を受けない優羽にしては珍しい光景だ。

声の掛けられた事気づいた優羽が元気に答える。

「ムツツンと共同出版【Bクラス代表（元）根本恭二の新しい私を見て】の編集作業中だよ」

よく見ると優羽の傍らにはムツツリーニがいて共に編集していた。

「二度とあんな真似しないようにしてあげないとね、あっ完成したら雄ちゃんも一冊欲しい？」

その様子を見た雄二があきれ果てていた。

「はあ、とりあえず優羽あれを見せてやれ」

雄二の指示に軽い様子で快諾し鞆から何かを取り出し教室を出た。

（5分後）

再び教室に入ってきた優羽、しかし髪を下ろしその容姿はAクラスの代表霧島翔子そっくりだった。

「優羽ちゃんの七つ道具その2変装セット」

いえ〜といった様子見た目は翔子雰囲気は優羽といった変わった感じを醸し出していた。

「てゆうか雄二はなんで知ってるの？」

明久の質問に雄二はどこか遠くを見つめるような目で

「昔……あれで酷い目に合わされた……………」

と呟く。

よほどトラウマなのだろうと思ひ明久は何も言わなかった。

「実際優羽がその気になれば声真似も出来るから、完全に面識の無い奴はおるか知っている奴も下手すると騙されるぞ」

自信満々に言う雄二恐らく昔騙されたのだろう。

優羽と秀吉が教室から出て行き作戦実行を始めた。

廊下にて二人の人物が話をしている。Cクラスに向かう秀吉と優羽であった。

「それにしても」

「ん？」

秀吉の声に優羽が反応する。

「お主にこのような特技があるとうとう、いっそ演劇部に入ってはどうかの？」

女子生徒の制服を着て廊下を歩いている秀吉、余りに似合っていて知らない人が見れば女子と勘違いするだろう。

「あはは、遠慮しとくよ。確かに魅力的だけど私は絵を描いてる方が好きだし、それに私台本通りにやらないよ？私のやりたいようにやるだけだし。」

確かに自分勝手な気ままな優羽が台本通りの演劇なんてやるはずも無いだろう、秀吉も納得したのかそれ以上は何も言わなかった。

そんな他愛の無い会話をしているうちにCクラスの教室前に到着する。

「秀吉君いくよ……」

教室に入っているCクラスの連中に見つからないように声をかける、秀吉も頷き作戦が実行された。

「静かにしなさい、この薄汚い豚共。」

優子に扮した秀吉がCクラスの教室に乱入する。

「な、なによあんた」

「話し掛けないで、豚臭いわ。」

見事優子（秀吉）は挑発に成功し、Cクラスの代表の小山が怒る。

余談だが彼女はBクラス（元）代表根本の彼女でもある。

「あんた、Aクラスの木下ね。ちょっと点数がいいからって、いい気になってるんじゃないわよ！何の用よ」

ヒステリックになっているCクラス代表が激しく怒鳴りながら言う。

「私はね、こんな醜くて臭い教室が同じ校内にあるなんて我慢出来
ならないの。ましてや豚臭い貴女達なんか、豚小屋で十分だわ」

秀吉が挑発している、後一押しといった所だろう。すると廊下から
翔子（優羽）が入ってくる。

「優子、こんな場所にいると馬鹿がうつって碌な事にならない。」

完全に優羽は翔子の淡々とした話し方、声を真似ていた。雄二が騙
されたのも無理もないだろう。

「Aクラス代表の霧島翔子！優等生達が一体何のようよ」

「貴女達みたいな中途半端な馬鹿は目障り。」

優羽の演技に秀吉も応じる。

「代表の言うとおりよ、丁度試召戦争の準備をしているようだし、
嫌で嫌でしょうがないけど私達が直々に叩きのめして、薄汚い豚共
をお似合いの教室に案内してあげるわ。」

言いたい放題言うつと優羽と秀吉は教室を出て行った。
留めの一言にCクラスの代表は激昂し

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備をする
わよ」

と叫んでた。

（廊下）

優羽が腹を抱えて爆笑していた、秀吉はそれを見ていて微妙な顔をしている。

「あゝ面白かった、秀吉君の演技最高。お腹痛い……………」

漸く落ち着いた優羽が言葉を放つ。

「呑気じゃのう、わしはいつばれてしまつかひやひやしたわい。」

「早速、さっきの音声をネットにアップして……………」

「止めてくれ、そんな事したら姉上にはれて殺されてしまう。」

有り得ない程の動揺を見せて秀吉は優羽から音声の入ったテープレコーダーを取り上げる。

Fクラスの教室に戻ると、雄二達が作戦会議をしていた。後から来

た私達は終わった後に話を聞かされた。

決まった事は雄二が霧ちゃんを一騎打ちで、内容は小学校レベルの日本史の問題でいくと言うこと。確かにそれならあの大化の改新の問題ができれば間違えるだろう。

向こうは霧ちゃんだから大好きな雄二の教えを忘れるわけがないし絶対に間違えるだろう。

(でもそれでも今の雄ちゃんじゃあ満点は無理だろうな……)

雄二の作戦を聞いて優羽はそう思った。

1時間後、Aクラスに交渉の結果は一騎打ちなのは変わらないが、内容は5対5によるもので教科の選択権は一人目、三人目、五人目となった。

こうして明日天才対馬鹿の試召戦争が始まる事となった。

この時、これが波乱の幕開けになるとは思ってもよらなかっただろう。

第五問 気まぐれ猫ともう一人の幼なじみ（後書き）

新キャラ登場プラグ

クラスはAクラスとなりました、詳しいプロフィールは登場時にて。

原作と多少違う展開にさせました。次話では対Aクラス戦終結まで書ければ良いかな？と予定しています。

このような駄文に付き合っ頂きありがとうございます。

第六問 AクラスとFクラスと試召戦争（前書き）

問題

戦国時代に天下統一を成し遂げた人物を答えよ。またその人物が行った事柄についても述べよ

姫路 瑞樹の答え

人物 豊臣秀吉

事柄 太閤検地、刀狩り、朝鮮出兵

教師のコメント

正解です、流石は姫路さんでしょう

遠月 優羽の答え

人物…木下秀吉

事柄…女装

教師のコメント

絶対にこうくると思っていました。

雨咲 蒼夜の答え

事柄：秀吉が行った太閤検地は農民の収穫高を見極め、税込の増加を図った。その際農民の不満が爆発し一揆が起きないように武器などを取り上げる為に刀狩りを行った。

そして海外に対抗する力を付けるために朝鮮出兵を行ったしかし…

……

教師のコメント

正解ですが何も他の解答欄を埋めてまで書くことではないでしょう

……

吉井明久の答え

事柄：太閤出兵

教師のコメント

ごちゃ混ぜになってますしっかり復習して覚えて下さい。

土屋康太の答え

初潮年齢が10才未満の場合を早期月経という。また、15才になっても初潮が無い場合を遅発月経、さらに18才になっても無い場

合を原発性無月経といい……………

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終了しました

第六問 AクラスとFクラスと試召戦争

朝……遠月宅の時計が鳴り響く、しかし時計は誰にも止められず、ぐっすり眠っている優羽と愛犬ケロベロス。

時計の針は8時35分を指していた。

~~~~~

優羽は懐かしい夢を見ていた。

自宅で笑う翔子と完全に巻き込まれまいと現実逃避している雄二、  
そうしてもう一人……男の子が必死に暴走する優羽を止める、な  
んて事のない夢だった。

ただ優羽には何故か懐かしく、幸せな気持ちになる不思議な夢だ  
った。

やがて耳障りな音が耳に届き意識が覚醒しはじめた。

~~~~~

目障りな目覚まし時計の音を優羽が寝ぼけてるのか無意識に消す。
すると先に目を覚ましたケロベロスが優羽の顔を舐める。

「ん〜」

優羽は顔を舐められ半ば寝ぼけながら目を覚ました。

「ケロちゃんおはよう………ってもうこんな時間!！」

見ると時計の針は9時を指していた。

優羽は寝間着から急いで制服に着替える、すると

ぐううう

「お腹空いたな〜Aクラス戦は10時だし………少しぐらい遅れても問題ないよね」

十分問題がある気がするが……欲望に素直な優羽は構わず朝食の準備をし始める。

「ワン!！」

「ケロちゃんもお腹空いてるよね、ちょっと待ってて」

優羽はそういつて台所の引き出しからドッグフードを取り出し、ケロボロスの専用の皿に入れてケロボロスに差し出す。

そうして自分も朝食の準備に取りかかった。

ちなみにベッドには優羽の携帯が鳴っていたが、本人は気づいていない。

気まぐれ猫の呑気なモーニングタイムだった。

所変わってFクラス教室

時間は9時半雄二達は対Aクラス戦の会議をしていた。

「今回戦って貰うのは秀吉、ムツソリーニ、姫路、優羽、そして代表である俺でいこうと思う。そして明久には優羽が来なかった際の補欠として貰おう。」

「あやつは一体なにをしておるのじゃ……こんな肝心な時に。」

「あいつの事だ、どうせ……あつやばい9時だ〜でもお腹空いたから多少遅刻してもいいや。って感じだろもう期待するのモアホらしい……」

雄二は既に優羽に対しては気にしてはいなかった。来たら戦力、来なかったらそれだけ。優羽を使いこなす事は自分には無理だとわかっているのだろう。

「そういう訳でムツツリーニ、姫路勝負はお前らにかかっていると
いっても過言ではないだろう。」

「はい」

「了解……」

姫路とムツツリーニが答える。

時間は9時45分雄二達は決戦場所のAクラスの教室に向かった。

時間は少し戻って9時、Aクラスの教室ではFクラスと同じく作戦
会議をしていた。

「問題は遠月さん、姫路さん、土屋君よね。あの子達を攻略がAク
ラスの勝利の鍵だね。」

そう意見を言っているのは秀吉の双子の姉の優子である。Fクラス
の関門姫路さん、ムツツリーニの保健、そして何より優羽あの三人
からどこかで一勝しなければならぬのだ。

「姫路さんは久保君、土屋君は愛子と当てればいいんだけど問題遠
月さんね。」

すると一人が声を上げる。

「木下さん、なら僕が引き受けますよ。」

答えたのは転校生の雨咲蒼夜。

「雨咲君、悪いけどまだ召喚獣を使った事のない君に任せるわけには……」

「大丈夫……」

優子は異論を唱える、しかし言い終わる前にAクラスの代表である翔子が言葉を放つ。

「てゆうか蒼夜君より適任な人物なんていないでしょ、代表と坂本君と遠月さんとは幼なじみなんだし。それに蒼夜君勝算があるから言っただと僕は思うし」

工藤愛子が元気よく言う。

こうしてAクラスの面子は霧島翔子、工藤愛子、木下優子、久保君そして雨咲蒼夜となった。

「蒼夜」

「何？霧ちゃん。」

翔子が蒼夜に話し掛ける。

「今回の勝負負けた方が一つだけ言うことを聞く雄二との約束があるから、絶対に勝ちたい。」

それを聞いた蒼夜は苦笑しながら

「相変わらず翔子ちゃんは変わってないね。あとの二人もきつと同

じなんだろっな」

少年の純粹な笑みを浮かべていた。

同時に扉が開かれ、雄二達率いるFクラスがやってきた。しかし

「優羽ちゃん来てないですね」

Fクラスの面子には優羽の姿がなかった。すると翔子の携帯が鳴って

『にははは〜遅刻しちゃた。みんなにいっといてね〜。b y 優羽』
とメールに書かれていた。

同じく雄二の携帯にも届き、頭をかかえていた

それを見た蒼夜は

「みんな変わってないな〜」と笑っていた。

一方優羽はというと……

「よし、送信っ」と

文月学園へと向かっていた。

相変わらず急ぐ動作すらみせずに歩いている、遅刻していると言っ
のに。

Aクラス教室

「それではAクラス対Fクラスの試召戦争を始めます。」

教科の選択権はFクラス、なんとしても勝ちたい初戦。
相手は秀吉の姉優子

「姉上があいてならわしが適任であろう、いつてくる。」

秀吉が前にでる、戦いが始まろうとしていた。しかし……

「秀吉……始める前に少し良いかしら？」

優子が笑顔で秀吉を廊下に引っ張っていく、顔は笑っているが目は笑っていない

「なんじゃ姉上、なぜ引っ張っていくのじゃ……」

秀吉が廊下に連れていかれた。

「Cクラスで一体何をしてくれたのかしら？どうして私がCクラスの人達を豚呼ばわりしてる事になっているのかしら？」

廊下の話声が教室にも届いていた。

「それは、姉上の本性をわしなりに推測して……あ、姉上！ちがつその関節はそっち方向に曲がらなっ……………」

なにやら不穏な音が廊下に響き、ガラガラとドアの開く音がして優子だけが帰ってきた。

「秀吉は急用が出来たがら帰るってさ、だから悪いけど変わりの人お願いね。」

何かをやり遂げたような顔の優子。

雄二はその言葉を聞いた不敵笑みを浮かべた。

「しょうがない、明久お前が行くんだ。そろそろ見せてやれお前の本当の実力を。」

雄二の発言に明久が答える。

「雄二がそこまで言うなら、見せてあげるよ」「自信満々な明久、その様子に周囲がざわめく。

『なんだあいつ……………まさか。』

『今までは馬鹿な振りをしていたのか？』

優子も明久の自信に少しうろたえる。

「吉井君、あなた……まさか……」

「実は僕……」

両者の召喚獣が召喚される。

「左利きなんだ……」

Aクラス対Fクラス数学

木下優子 vs 吉井明久

337点 vs 69点

優子の召喚獣に瞬殺される。

「ギヤアア体ガアアアア」

召喚獣のフィードバックにのた打ち回る明久。どうやら雄二のはったりだったようだ。

「勝者Aクラス」

Aクラスの担任の高橋先生が淡々と宣言する。これで1対0。

周りからはやっぱり馬鹿だったかと言われている。

「明久、ちょうど良い茶番だった。なかなか楽しめたぞ」

雄二がクックックと笑いながら言う。

明久は恨めしげに見るも痛みで動けない。

「それでは2回戦を始めます。両者前に…」

高橋先生の言葉に雄二が顔を洪くする。

「坂本君どうしたのですか？」

姫路が様子に気づき聞いてくる。

「実は2回戦で優羽を出すために1回戦をなるべく長引かせたかったんだが……まずいな」

雄二としての理想は姫路かムツソリーニのどちらかが一勝して優羽には確実に勝ってもらい大将戦まで持つて行くつもりだったのだ。そのため優羽には相手の指定教科の状況で勝つて貰う必要がある。しかし現在優羽はまだ来ていない。

「なら、私が行きます。優羽ちゃんには私の時に出してください。」

「わかった、姫路まかせた。」

雄二が姫路の提案を受け入れ姫路が前にでる。

相手は学年次席の久保君

「科目は」

「総合科目でお願いします。」

Aクラスの久保が答える。

「了解しました、それでは始め。」

「「サモン召喚」」

二人の召喚獣が姿を表し点数が表示される。

Aクラス対Fクラス

総合科目

久保利光 vs 姫路瑞希

3985点 vs 4409点

「ま、まじか」

「この点数霧島翔子に匹敵するぞ。」

周りが驚きの声をあげている。それもそのはず、学年次席の久保利光を400差を付けているのだから。

「姫路さん、行つの間になんな実力を……」

久保が驚く。

「私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命なFクラスが。」

「Fクラスが好き？」

「はい、だから頑張れるんです。」

そう答えると姫路の召喚獣が久保の召喚獣を一閃、久保の召喚獣

は消え去る。

「勝者Fクラス」

これで1対1対等である。次はムッツリーニ、教科が保健である以上彼が負ける率は低い。

「次は三人目のかたどうぞ」

「……………（スック）」

「それじゃあ僕がいこうかな？一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。」

ムッツリーニの相手は工藤愛子、ボーイッシュな女の子だ。

「次はムッツリーニか」

「教科が教科なだけに安心だね。」

雄二と明久がノンビリみている、ここで一勝すれば優羽が勝つだけで3勝、つまり雄二が戦う必要がなくなるという事だ。

「両者前に、教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意何だっつてね、でも僕だっつてかなり得意何だよ。……………君と違って実技だね」

工藤愛子の発言にFクラスの面々が湧き上がる。流石はFクラスだ。

「その君、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし保健体育でよかったら教えてあげようか？もちろん実技でね。」

それを聞いた吉井は

「じゃあ是非お願いします。」

しかし島田と姫路さんが

「アキにはそんな機会永遠にないからそんな勉強必要ないのよ！

「そうです、永遠にありません」

「おい島田、姫路今の発言で吉井が死ぬほど悲しい顔しているぞ。」

見ると明久は教室の片隅で座っていじけていた。

「それでは二人共始めて下さい。」

「……サモン」

「いくよ、サモン」

工藤愛子の召喚獣はセーラー服に巨大な斧、そして腕輪を付けていた。

「理論派と実戦派どちらが強いかみせてあげるよ。」

愛子の召喚獣が腕輪を光らせ、斧に雷をまといムツツリー二の召喚獣に襲いかかる。

「それじゃあバイバイムツツリー二君」

「……加速」

ムツツリー二の言葉に突如召喚獣が愛子の召喚獣を突き抜ける。同時に愛子の召喚獣が倒れた。

「え……」

「……加速終了」

Aクラス対Fクラス

保健体育

工藤愛子 vs 土屋康太

430点 vs 549点

「そ……そんな……この僕が……」

よほど自信があったのか工藤愛子が落ち込んでいた。

「これで2対1ですねそれで……」

「おっはよー」

高橋先生が言いかけたその時、優羽が元気よく入ってきた。

「雄ちゃん、今どんな感じって、え……」

優羽が雄二に話しかけるしかし偶々視線にはいった人物に言葉が詰まる。

「久しぶりだね、優羽ちゃん。」

「蒼……ちゃん……？」

声を出したのは雨咲蒼夜である。

「雄ちゃん、なんで蒼ちゃんがいるの？」

あまりの事に優羽が混乱している。

「俺も今さっき知った所だ、ムツツリー二の情報が確かなら最近転校してきたそうだ。」

「なにをしてるのですか？4人目のかたまえへ」

教師の言葉に優羽と蒼夜が前にでる。

「教科はなににしますか？」

「先ほどと同じく保健体育で。」

「了解しました。」

その様子を明久達が見ていた。明久が蒼夜を見て雄二に聞いた。

「雄二、あの人ってどんな人なの？」

「俺の覚えてる限りでは優羽と仲が良かった只の普通の生徒だ。成績、運動、全てにおいてな。まあ優羽の勝ち揺るがないだろ、勝負はもう決まったようなもんだ。」

雄二の様子をみる限りどうやら対した事が無いらしい、しかし相手はまるで勝利を確信しているような雰囲気を出している。

明久は只の杞憂だと思いを振り払う。

番狂わせが起きるとも知らずに……

「それでは始めて下さい」

高橋先生の指示のもと蒼夜が召喚獣を繰り出す。

Aクラス 雨咲蒼夜 保健体育 248点

召喚獣は日本刀に西洋鎧といった釣り合わない格好だった。点数も

Aクラス内では対した事が無い、むしろ低いほうだ、しかし。

「遠月さんどうしたのですか？早く召喚を。」

高橋先生が言うが優羽は頬を掻きながら

「実は……サモン」優羽は召喚をしようとするが召喚獣は姿を出さない。

点数が標示される。

Fクラス 遠月優羽 保健体育 0点

「……えっ？」「」「」

一同が騒然とする。

「あはは〜ばれちゃった、隠してたんだけど。」

優羽が笑いながら独り言を言う。

4人目の戦いはAクラスが戦わずして勝利した。

あまりの大番狂わせ場が静寂を包んだ。

ちなみに蒼夜は狙って保健体育を選んだのは言うまでもないことだ。

優羽がFクラスの面子の元に戻ると、雄二が優羽に呆れたように言う。

「優羽、点数上限無しのテストでどうやったら0点がとれるんだ。明久ですら一桁はとるぞ。」

「ごめん、ごめん。でも蒼ちゃんなんで知ってるんだろっ?」

確かについ最近までは明久と同じく馬鹿のレッテルを張られていた優羽が、実は霧島翔子を超える成績保持者という事実は雄二と翔子を除き誰も知らなかったはずだ。

だからこそ転校したての蒼夜が優羽の苦手教科を知っていたのは謎だった。

「簡単な話だよ雄二。」

話を聞いてた蒼夜が答える

「優羽ちゃんは昔から保健体育がダメだって知っていたからさ。霧ちゃんだって知っていた筈だけど。」

優羽が翔子の所を見ると翔子は頷いた。気づかれてないのと思っていたのは優羽だけだった、そして知らなかった雄二。

現在2対2大番狂わせはあったが、決着は代表同士の一騎打ちとなった。

第六問 AクラスとFクラスと試召戦争（後書き）

オリキャラ出現しました。

優羽の点数の下りに関しては上限無しでも0点とるほど優羽はダメダメと言うことです。

0点の状態の召喚に関しては完全に自己解釈で書いております。

不満が余りにも多かつたら書き直すのでご理解を……

次回の内容は試召戦争編を最後までもっていただけたらなあと思っています。

その後の展開は間に少し閑話を挟み、文化祭編に繋げようかなという感じです。

まあ予定なので随時変更するかもしれません。

それとオリキャラの説明がどこかで入ります。

第七問 終わりは楽しく？ 試召戦争完結（前書き）

問題

文法において『海がよんでいる』や『我が輩は猫である』のような表現技法をなんと呼ぶか答えよ。また例文を一つ作りなさい

姫路 瑞希の答え

『擬人法』

『風が走り回るように駆け抜ける』

教師のコメント

擬人法とは本来人でないものを人のように表現をして表す技法です。主に小説等に出される事が多いですね

島田美波の答え

『疑人法』

教師のコメント

日本には慣れましたか？惜しくも間違いですが後少しです。しっかりと復習して次回の結果を期待しています。

坂本雄二の答え

『かごの中の鳥』

教師のコメント

正解ですが、なぜでしょう。凄く切実な思いが伝わって来ます。

遠月 優羽の答え

『勝手気ままに暴れまわる台風』

教師のコメント

名前をみる前にあなただと確信しました。

第七問 終わりは楽しく？ 試召戦争完結

AクラスとFクラスの5対5の変則型の一騎打ちはついに最終戦となっていた。

一戦目は明久が瞬殺されAクラスの勝利、二戦目は姫路さんの出陣で勝利、三戦目も同じく保健体育の教科でムッソリーニが圧勝。

2対1となりAクラスが追い込まれるさらに、四戦目は実質学年最強の成績を誇る優羽の戦い誰もが優羽の勝利を確信している中転校生の雨咲蒼夜という伏兵が現れ、まさかの大番狂わせ。

よって結果は最終戦である代表同士の戦いとなる。

「まさか優羽が負けるとはな……」

まさかの展開に雄二は同様が隠せない、しかしこの2対2の状況は雄二が望んだベストの状態。

つまりは作戦通りの結果となったわけだ。

「だが元々の予定通りの展開となった。」

雄二はFクラスの面々に語りかける。

「正直此処までうまく行くと俺は思わなかった。だからこそ俺は改めて言おう、このクラスは最強だと。」

雄二の言葉にFクラスの皆が黙って聞いている

（やっぱり雄ちゃんのあれはカリスマだね〜）

優羽はその様子を見て素直にそう感じた。

（ま、だからといって勝ったと言うわけじゃないんだけど。勉強してない雄ちゃんが満点なんて無理だと思っし〜。）

優羽自身は教室の設備なんて些細な事だ。要は自分が面白いか面白くないかそれだけ、設備が欲しいなら迷わず振り分け試験でAクラス入りすれば良いのだから。

優羽にとって重要なのは結果ではなく過程……その過程が楽しければ結果はあまり意味をなさない（自分にとって不利、嫌いな事は除くが。）

本来優羽にとっての試召戦争は設備交換が目的ではなく面白いからという理由のみ。たとえ勝ったとしても面白くないなら駄目、逆に面白いなら負けても良いと言うことだ。

自分の気の向くままに猫のように生きて後悔だけはしたくない、まあ良くも悪くもそれが優羽なのである。

「それでは両代表前へ、坂本君教科の選択を」

「教科は日本史、ただし内容は小学生レベルで100点満点の上限ありだ！」

雄二の選択教科を聞いた高橋女史は一瞬きょとんとした顔をしたが、直ぐに元に戻り

「それではテストを作らなければなりませんね、皆さんはここで待っていてください。」

高橋女史がそう言うとノートパソコンを持って部屋から出て行った、どうやらテストの作成にいくのだろう。

雄二の賭けどおりあの問題ができれば相手は必ず間違える。

Aクラスの面々に動揺が走る。

「小学生レベルの問題だつて？それに上限付きだなんて満点確実にやないか。」

「注意力と集中力の戦いになるぞ。」

各々の代表が自らのクラスの元に戻る。

Fクラスの代表に始めに話しかけたのは明久

「雄二、正直ここまでこれるとは思わなかったよ。ラストはまかせたよ。」

「ああ、任せておけ。」

そして今度は雄二がムッツリーニに声をかける。

「ムッツリーニ、お前には様々な局面で助けられた。感謝している。」

「……………（グツ）」

ムッツリーニは黙って親指を突き出す。

「みんな、ここまで大変な戦いだったと思う。だからこそこの戦争、俺が勝利に導こう。」

雄二の言葉にかつて無い程にFクラスは盛り上がりを見せている、確かに最低クラスが此処まで勝ち上がるのは大変だった。だからこそその盛り上がりだろう。

「雄ちゃん」

優羽が最後に笑顔で話しかける、雄二もそれに答え耳を傾ける。

「そのセリフ……………」
「ん？」

優羽が中途半端に言葉を途切らせる。雄二は首を傾げる。

優羽は元気良く答えた。

「それ、死亡フラグだよ」

Fクラスの面々が盛大にずっこける、優羽はそれだけ言うとAクラス
の集団に向かっていった。

「あはは、なんだか優羽ちゃんらしいです。」

姫路が可愛らしく笑いながら答えた。

「それにしても敵クラスの元に堂々といくなんて、相変わらずよね。
ウチには絶対に無理だわまあ優羽らしいけど」

美波は半ば呆れつつ答えた。

所変わってAクラスの元へ

「まさかFクラスにここまで追い詰められるなんてね。」

優子が言う、Fクラスにここまでやられるとは正直思わなかったのだらう。

実際蒼夜がいなければ負けていた可能性もあったのだから。

「大丈夫ですよ木下さん、こちらの勝ちが決まったようなものですから。」

ニコニコしながら笑う蒼夜が優子に答える。

「なんで？」

優子が聞くと黙ってAクラス代表の霧島翔子を指差す。

それをみると今までにないやる気を見せている代表の姿だった、優子はそれをみると黙って納得してしまった。

「でもさあ向こうだって何かがあるからあんな事いったんじゃないのかなあ？」

工藤愛子が答える。確かにFクラスは馬鹿ばかりの集団ではない。

姫路さんのような人、一芸に秀でた物、頭は良いが勉強が嫌いな物、そっという集団なのだ。

「仮に雄二が策を立てたとしても大丈夫でしょう、こちらが常に満点ならば少なくとも負けはありませんからね。昔はともかく今の成績ならばあちらの方が危ないでしょう。」

学年主席の実力の翔子、対して相手はかつて神童と呼ばれた雄二。真面目に勉学に励めば翔子と同じレベルだったであろう、しかし今の實力は蒼夜にすら劣るだろう。

「とまあこれが幼なじみから見た試合の見解です」

「そうだね」

「なんで遠月さんがここにいるの……」

気が付けば何故かAクラスに混じっている優羽、戦争中なのに堂々とやってくるあたり優羽らしいといえるだろう。そんな優羽を見た優子はため息を付いていた。

「蒼ちゃん」

「何？」

優羽が蒼夜に話しかける、どうやら優羽の目当ては転校生の幼なじみらしい。

「いつ戻ってきたの？なんで戻ってこれたの？どうやってこの学園に入れたの？」

次々と繰り出されるマシンガントークに一同騒然とする。しかし蒼夜は変わらない表情で返事をした。

「戻ってきたのは3日前ですかね、両親が急な転勤が決まりどうせならいつそのこと一人暮らしでもしないかと父さんに勧められ今はこっちで生活している訳です。転校出来た理由は恐らく優羽ちゃん達のおかげかと……………」

蒼夜が詳しく説明を始めた。なにやら学園にやってきた生徒が手に付けられない問題児で、何を起こすか解らず困るとのこと。そこで偶々転校手続きをしにやってきた生徒がその子の幼なじみとのわかり、その転校生に問題が起きないように監視させようとしたのが始まりらしい。

ちなみに問題とは雄二、優羽、明久などの事である。

「しかし驚いたよ転校早々にこんな騒ぎを起こしてさ。まあ次に驚いたのは未だに霧ちゃんが雄二と付き合っていない事かな。」

流石優羽達の幼なじみである。他から見れば関わりたくない状況でも平然と会話をしていた。

しばらく他愛の無い話をしていると蒼夜が翔子を指差し言った。

「優羽ちゃん二人の勝負どちらが勝つと思う?」

この話にはAクラス一同が耳を傾けた、何せずと一緒にいた幼な

じみの優羽が言うのだ。的中率はほぼ100%と言えるだろう気にならない訳がない。

「ちょっと分かんないかな。雄ちゃんには作戦があるんだけど、実際うまく行くかわからないしけどうまく行く可能性もない。雄ちゃんも4割、霧ちゃんが6割って所かな……だけど……」

Fクラスの優羽は雄二の策を知っている。しかし戦いはテストだたとえ翔子が雄二の狙い通りになり99点になっても雄二が98点以下なら意味がない。

だから6:4と答えたのだろう

「私的にはFクラスが負けた方がいいかな。そっちのが楽しそうだし。」

なんとも優羽らしい一言である、面白ければ自分のクラスは負けても構わないようだ。

そんなこんなで話をしていると……

「準備が整いました、二人共こちらに来てください」
学年主任の高橋先生の指示に従い二人が試験会場に向かう、そして二人が席に付く

ちなみにテストの様子はAクラスに設置されている巨大ディスプレイに表示される。

「それでは最後の勝負日本史のテストを始めます。制限時間は50分、100点満点といたします。尚不正行為などは即失格とみなします。」

最後の説明が終わり試験が始まった。

両クラスに緊張が走る。

Aクラスの面々は坂本雄二が何を企んでいるのか考えながら見つめる。

Fクラスの面々は雄二の言ったとある問題（大化の改新の年号）を探し始める。

以下の（ ）の年号を正しい年号に当てはめよ

（ ）年平安京遷都

（ ）年平城京遷都

・
・

（ ）年鎌倉幕府設立

（ ）年大化の改新

「あつた……あつたぞ」

雄二の読み通り問題が出てくる。

そしてFクラスが歓喜に包まれる、Fクラスは勝利を確信したのだ。

「うち等の卓袱台が……」

「やったこれで……最下層クラスな僕達の……歴史的勝利だ」

Fクラスが歓喜の雄叫びを挙げる

「「「うおおおお！！！！！！」」」

因みにこの時Aクラスと優羽達は……

「なる程……そういう事ですか。」

雄二の作戦を理解した蒼夜がクスクス笑っていた。

「蒼ちゃん知ってるの？」

「はい、僕も昔雄二に間違った答えを教われました。お陰で中学時代大恥をかきました」

優羽と蒼夜だけは気づき、優子と愛子は訳がわからぬまま疑問符を浮かべていた。それもそうだろう。

優子達から見れば

突然クスクス笑う蒼夜、いきなり雄叫びを挙げるFクラス。知らない物が見れば異常な光景だ。

「さて帰る準備でもしましょう。このあとの雄二の展開が面し……
もとい心配なんで……」

そういつてクスクス笑いながら自身の鞆を取りに姿を消していった。

そして優羽は……

「そろそろ向こうが面白くなりそうだから私は戻るよ……じゃあね
きーちゃん、くーちゃん」

そついいながらFクラスの集団の下に戻っていった。

因みにもうお分かりだと思いがテストの結果は……

Aクラス 霧島翔子 98点

Fクラス 坂本雄二 54点

と言った感じである。

Fクラスは期待を裏切った坂本雄二に対する怒りで騒がしくなっている。

「3対2でAクラスの勝利です」

「よし、みんな期待を裏切った馬鹿に制裁を下すんだ。」

「オオオオ!!!!!!」

雄二を処刑しようとFクラスの面々が雄二の下に押しかける。

「雄二、私の勝ち」

「殺せ……」

「いい度胸だ、殺してやる。歯を食いしばれ。」

明久が雄二に向かい襲いかかる、しかし美波よって阻まれる。

「大体54点ってなんだよ、0点なら名前の書き忘れとか考えられ

るのにこの点数じゃ……………」

「いかにもこれが俺の全力だ」

雄二は悪びれるようすもなく答える。

「美波、離して僕はこの馬鹿を処刑する義務があるんだ。」

「アキ、待ちなさい。優羽が言うならともかく、あんただったら3
0点も取れないでしょ」

「それについては否定しない。」
明久があっさりと答える。

姫路も同じように明久を引き留める。

「それなら坂本君を責めちゃ駄目です。」姫路と美波に止められて
渋々明久が諦める。
そんな中優羽が口を開いた。

「雄ちゃん、負けたんだから霧ちゃんとの約束忘れないでね……………」

それを聞いた明久が優羽に質問する。

「優羽約束って一体なんのこと？あとその袋にはいった大量の小銭
はなに？」

「これ？これは雄ちゃんと霧ちゃんの戦いの賭け金だよ。Fクラスのほぼみんなが雄二に賭けたから私の一人勝ちだよ」

優羽が袋に大量に入った小銭を持ち上げて答える、その様子を見て姫路は苦笑いして、美波は呆れていた。

実は始まる直前に優羽が勝負の結果を賭けようと言い出し、優羽一人翔子の勝ちに賭けていた。

ちゃっかり小遣い稼ぎまでやってるあたり優羽らしいと言える。

「そんでもって約束ってというのは負けた方勝った方の言うことを聞くことだよ」

優羽の気まぐれや、試召戦争のおかげでぐだぐだな空気に紛れてうやむやになってしまった約束だが約束は約束、翔子が一呼吸置いてついに口を開いた。

「雄二、私と付き合って」

「「「……………え？」「」」

翔子の言葉に優羽と雄二を覗くFクラス全員が驚いた。それもその

はず、Aクラス代表霧島翔子は近づく男たちを片っ端から振っている。

それにより翔子は 百合疑惑 や、いつも仲の良い優羽と一緒にいる事で 遠月優羽と付き合っている などと言われている。

しかしそれは翔子が一途に雄二のこのみを思っているからこそ生まれた誤解だ。

「お前……まだ諦めていなかったのか。」

雄二はため息をつきながら答えた。

「それは何度も断っただろう……他の男と付き合えばいいだろう。」

「だめ、私には雄二しかない。雄二以外の相手は考えられない。」

翔子が答えると雄二の背後に謎の集団が現れた。その覆面を付けて自称文月の風紀を守る集団……その名もFFF団である。

「坂本雄二、汝はFFF団の鉄の掟を破り我らを裏切った。皆、彼をどうするべきか」

「裏切り者に処罰を」

「正義の鉄槌を」

FFF団の面々が雄二を取り囲む、もはや逃げ場はない。

「理不尽だあああ」

雄二の悲痛な叫びが学園中に響いた。

ちなみに余談だが、Fクラスの設備はちやぶ台からみかん箱となっ
てしまった。

第七問 終わりは楽しく？ 試召戦争完結（後書き）

どうもりザクです

先ずは新話の投稿がかなり遅れてしまい誠に申し訳ありませんでした………（土下座）

実は話事態は完成してたのですが、学園祭の準備やら就職の準備、さらには高校最後の大会に備えやらバイト等に時間をとられこんなに遅れてしまいました。

まだまだ忙しく投稿も遅れてしまつかもしれませんがこれからよろしく願います。

つきましては今後の予定ですが……

この後の展開としては学園祭編をお送りしたいと予定しております。

祭り好き（騒ぎ好き）の優羽とそれに振り回される面々、そして明久達の活躍に期待して下さい。

ではまた次回でお会いしましょう

今後更新が遅れる場合があります。

よって作者が更新をしなくなった場合は遅れてるだけだとして判断をお願いします。

その他の場合は小説トップのあらすじ画面にてご報告いたします。

今後この駄文小説に付き合っただけで頂けましたら幸いです

第8問 学祭編 プロローグ（前書き）

学園祭の出し物を決めるためにアンケートにご協力下さい。

『あなたが今一番欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

学園祭は学園の最大のイベントといっても過言じゃないですからね。
よい学園祭になることを目指しましょう

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味はあったのでしょうか……

吉井明久

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機を感じます。

雨咲蒼夜の答え

『現状維持』

教師のコメント

何かを求めるのではなく今が一番ということでしょうか……あなたらしい意見ですね。

遠月 優羽の答え

『今より広い交友関係』

教師のコメント

ふざけた回答を期待した先生を許して下さい。

第8問 学祭編 プロローグ

騒がしく、波乱を起こした試召戦争が終り。季節は夏

文月学園では夏のイベント清涼祭の準備で学校はすっかりお祭りムードとなっている。

そして先日Aクラスに敗北したFクラスの面々はというと……

「それじゃあ学園祭の打ち合わせをしたいが…実行委員を作りそいつに一任したいと思う。」

雄二がやる気のなさそうに話を進める。

しかもまとめ役を他人に押し付け丸投げしようとしていた。

興味の無い物には全くやる気を見せない雄二、そして他のクラスメイトも話をしていたり、寝ていたりと殆ど参加していなかった。

「じゃあ、実行委員は島田と言う事で任せる」

「ちょっと待ってよ坂本。ウチは瑞希とペアで召喚大会にできるから流石に無理よ」

召喚大会というのはこの文月学園に存在する試験召喚システムを利用しての召喚獣を使つての大会である。

要は学園側が召喚システムを宣伝したいだけなのだが……

「えっじゃあ姫路さんも出るの？」

明久が吃驚したように言い出す。確かに恥ずかしがり屋で引つ込み思案な彼女がこんな大掛かりなイベントに参加するのは以外だったのだろう。

明久が言つと姫路が多少怒るような声で答える。「うちのお父さんつたら私のクラスをFクラスつてだけで馬鹿にしたんです。許せません！……！」

「そっか、それじゃあFクラスの代表として頑張つてね姫路さん。」

「はい……！」

明久が姫路にメールを送ると姫路も勢い込んで答える。

「それはそうと結局実行委員はだれがやるのじゃ？」

秀吉が話を戻し実行委員の事を引つ張つてくる。

「それじゃあ島田、補助として誰かを任命すれば問題ないか？」

「ん、相手によるけどそれならOKよ」

「それじゃあ明久お前が島田の補助を頼む」

雄二が適当に決めるように言うと明久が反論する。

「僕もそういう面倒なのは遠慮したいんだけど……………」

明久が嫌がると雄二が明久の肩を叩き言う。

「明久、考えてみる……………この馬鹿の代名詞のクラス（主に明久）で唯一まとめられ出し物を成功に導く人間は一人しかいないと。俺が選んだ理由がそれだ。（本当はめんどくさいからお前に押し付けたい）木下もムツツリーニもそう思うだろ。」

「同感……………」

「当たり前じゃ」

雄二の言葉に二人は心にも無い事を言う。どうやら二人もやりたくないようだ。

そんな雄二の口車にあっさりと乗った馬鹿（明久）は自信満々に答える。

「そこまで期待されたら僕がやるしかないよね。美波、一緒に頑張ろう」

「……（馬鹿で）助かった」

雄二と秀吉とムツツリー二が揃って眩くがどうやら最初の部分は聞こえてないようだ。

実行委員が決まると同時に教室の扉が開き鉄人こと西村先生が入ってくる。

「あれ？西村先生、どうしたんですか？」

姫路が丁寧な口調で質問すると溜め息を付きながら答える。

「じつは遠月がAクラス雨咲と霧島を連れて消えたんでな。探しているんだが知らないか？」

鉄人の言葉にFクラスの面々はまたあいつかと苦笑すると、その中の一人の坂本が答える。

「鉄人、優羽なら多分屋上だと思っぞ。」

タメ口でそう言うと

「坂本……少しは敬語を使ったらどうだ……まあいい。すまん邪魔をして、学園祭の出し物が決まったら私に連絡を入れてくれ。まだ決まってもいないのはお前らぐらいだからな」

鉄人はそう言うと疲れた様子で教室を出て行った。

「西村教諭疲れ気味のようじゃのう。」

秀吉が鉄人を見て気付いたように呟くと明久も同じように相槌を打つ。

「あはは、最近の鉄人は遠月さんに振り回されてるからね。時に最近遠月さんテンション高いし。まあそのおかげで補習が少ないから嬉しいんだけど。」

「あいつはこういうイベント大好きだからな、この時期一番学園で浮かれているからな」

とまあ学園で一番やる気の無い男が言うのもおかしい話だが。

「そして当の本人は何をしているのじゃ？」

秀吉が疑問を投げかけるとFクラス全員が「さあ？」と疑問の声をあげた。

「私達でさ……模擬店やろつよ。本格的にさ」

所変わって屋上、優羽は屋上で蒼夜と翔子を連れて目をキラキラした顔で嬉々として語る。

翔子は相変わらずの親友のテンションにいつも通りの態度で対応する。

対する蒼夜は溜め息をつく。

「優羽ちゃん、一応聞くけど案はあるのですか？流石に準備もなしに今からはつらいんですが、一応こちらでもクラスの仕事が………」

「えっかないよ！！！！だって準備なんてすぐ終わるし」

確かに学園祭レベルの模擬店なら少人数で効率よく動けば直ぐに終わるだろう。

「校門前でさ屋台みたいに物をバーンって売るのが……面白くない？」

嬉々として語る優羽、片方では呆れている蒼夜。そしてそのやりとりを黙って見ている翔子。

こんな計画のない会話をしているのが学年主席のAクラスと天才、全く持って頭の痛くなる話である。

「てゆうか、そんな事するならFクラスの集団まとめて模擬店でもやればいいのでは？」

「えーっ、なんで？面倒じゃん。私は自由に自分のやりたい事をやりたいだけだし。」

なんて自分勝手に傍若無人。模擬店はやりたいが、人をまとめたりするのは面倒だと言っている……なんて贅沢な我が儘だろう。

「分かった……」

翔子が二人のやり取りを見て楽しそうに言う。
表情は変わらなかったが長い付き合いの優羽には直ぐにそれが分かった。

「だけどお願いがある……」

翔子のこの一言が再び波乱の種となるのだった。

所変わって学園長室学園の長である学園長が一人溜め息をつく。

「どつしよつかねえ、なんとかならない事が。」

何やら悩み事があるようだ、まあ学園長の悩み事＝雄二達の厄介事である。

「しょうがない、物凄く気は進まないがあの馬鹿共の力を借りようかね。」

再び波乱の影が雄二達に降りかかるうとしていた。

第8問 学祭編 プロローグ（後書き）

今回は始まりだけあって短かったです。

さて今後の展開をどうしましょうか………

個人的にやりたい放題の優羽なら学園祭はクラスに参加せず、まずは自分が思い切り楽しめる状況を作ると思っていました。

蒼夜については普段は割と常識人なので普通にクラスの事をやるが、優羽達の企みも参加するって感じじゃないかなと思いましたが結果にしました。

今後の絡みも考え次話をお待ちください

第9問 学園祭編 一話 猫と出し物とAクラス（前書き）

清涼祭アンケート

学園祭をより良い物とするためにアンケートにご協力下さい

『喫茶店を経営する場合、制服はどういった物が良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

「実に学園祭らしいですね、コストもかかりませんし良いアイデアです。」

土屋 康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ、色は白を基調とした薄い青が望ましい、トレイは輝く銀で照り返しが得られる位の物を用意し、裏にはロゴ

を入れる。靴は5センチ位のヒールを……」

教師のコメント

「そんな裏面までびっしり埋めなくても……」

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

「ブレザーの間違いだと信じます。」

遠月優羽の答え

『喫茶店という場を考え、奇抜に行くか堅実に行くかで進路は変わる。』

・後者のアイデアの一つはノーマルに学校の制服との相性の良い調理実習に使うようなエプロンなどにするのも良い。

・前者の意見を優先するなら、奇抜性を考え、コスプレ、着ぐるみなどなど詳しくは後述

・3つ目はオーソドックスに普通のウエイトレスに近い服装等も良い、またウエイトレスの服に関して詳しくは後述………』

以下大学ノート一冊をフルに使い解説と考察

教師のコメント

「そのベクトルを学業に1ミリでも向けてください。」

第9問 学園祭編 一話 猫と出し物とAクラス

side 蒼夜

今、目のまえの光景が信じられなかった。

自分の知る知り合いで最もプライドが高く、頭を下げるなんて有り得ない雄二が綺麗な正座の体制から頭を下げていた。

所謂土下座と言われる姿勢であった。

「今、なんて言いましたか？」

あまりにも有り得ない光景に話を思いつきスルーしてしまった。

「頼む！！！！俺と一緒に召喚大会に参加してくれ！！！！！！！！」

雄二のプライドをかなぐり捨てた頼み事だった。

雄二が真剣な顔で口を開いた。

（雄二説明中）

「つまり試召大会の商品の副賞を翔子ちゃんに取られたくないと……」

話を要約すると……
とある生徒の転校の危機を回避するために劣悪な教室の回収を頼み、その交換条件に試召大会の優勝商品をかっさらってこいと……しかし副賞とあるテーマパークのプレミアムチケットで、翔子ちゃんがもし入手したなら一緒に行くと言っもの。約束を破ったら結婚する、更にそのプレミアムチケットは企業が使用したカップルを故意に結婚まで導いて行くと言っことだ。

つまり翔子ちゃんが入手した時点で雄二は翔子ちゃんと結婚という

流れという訳だ。

土下座する雄二を見て蒼夜は携帯でその光景を撮影する、さすが雄二の旧友だけあり存外性格が悪い。

「全く、頭はキレる割にドジなんですな……」

「返す言葉もねえ。」

「まあ、旧知の仲なんですから僕で良かったら力を貸しますよ。一緒に大会にはできませんが、翔子ちゃんの手ケット阻止はぐらいは協力します。その代わり僕のお願ひも聞いてくれますか？」

蒼夜が言つと雄二が土下座を止めてお願ひを聞く。蒼夜が改めて口を開いた。

「お願ひというのは簡単な事で、もし成功したら副賞の手ケットを僕に譲つて下さい。それと今から一週間の学食を奢つて下さい。」

雄二は一瞬拍子抜けな顔をした、条件が余りにも甘いからだ。だから雄二はこの程度ならと快諾した。

(なんだか楽しくなりそうだな。Aクラス最低得点者とFクラス最高得点者でタッグなんて。)

雄二がいなくなった後学園祭というイベントを改めて楽しみだとの底から感じていた。

(とりあえず学園長に会いに行こう優羽の提案に対して許可をとらないといけない訳だし、雄二との取引にな違和感がするし)

思い立ったが吉日、そう思い蒼夜は学園長のいる学園長室へ向かう為に廊下を歩いて行った。

s i d e o u t

学園祭が近くなりクラスは何やら準備をしていたが、私はお構い無しにHRを抜け出し屋上で自分のやりたい事のアイデアを決めていた。

理由は蒼君の説教じみた話のせいである。

無計画、しっかり案をたてる、その場の勢いで行動するなe t c . . .

内容は覚えてはいないが、こんな感じの説教だった。

そして最終的に最低限案が決まらなければ手伝わないとすら言われる始末。

よって非常に面倒だが、ノートに案をまとめている訳である。

「あーあ、こんな面倒なのは雄ちゃんのお仕事なのにー」

別に優羽自身考える事事態は嫌いではない、むしろ頭なら雄二よりキれるだろう。

「あー、もつめんどくさい！！暑いしこんなところにいたら死んじゃうよ〜。どこか涼しい所いこつと」

そうつぶやきくとまだまだ暑い夏の日差しから逃げるように、優羽は屋上から出て行った。

「それで、学園一の問題児がどうしてここにいるさね。」

学園長室で学園長はため息を尽きながら優羽にいう。涼しい場所を探して居るうちに学園長室にやって来た優羽、確かに学園の最高権利者の部屋ならばエアコンも完備されている。

「理由？そんなの暑いからだよ？」

正に当たり前と言わんばかりの発言に学園長すら頭を抱えている。しかもこんなのが現在の最高得点保持者なのだ、頭を抱えるのも仕方がないだろう。

「なんでこんなのがAクラス代表より点数が高いんかね……………全く今日は失礼なガキの客が多いのかなね……………」

そんな風に頭を抱えると、再び扉からノックの音が響く。どうやら来客のようだ。

「失礼します。学園長、学祭についてのお話があるので伺いに来ました。」

そう言いながら入ってきたのはAクラスの蒼夜である。

「全く、今日は本当に客の多い日だよ。それでAクラスの間人間が何のようだい」

「学祭の出し物に関して一つ提案書を持って来ましたので、許可を頂ぎに来ました……………っていつかなんで優羽ちゃんがここに？」

疑問の声と共に学園長に向かって優羽に指差す仕草を見せる、学園長はため息をもらしながら

「こっちが聞きたいさね」と答える。

そして持ってきた企画書を学園長に渡すと、真面目な表情で紙面に目を通した。

「AクラスとFクラスが合同で模擬店を行うと言っことかい。」

「はい、内容については未定ですが……場所についてもグラウンドの開いてる場所で野外でやるので問題ありません。そしてAクラスとFクラスとか交流を深め、相互の親睦が目的です。」

実際の所、優羽の思いつきの提案の建て前なのだがそれっぽい理由を付けてやるあたりが計画的である。

「悪いけどその企画は却下だよ。一つのクラスに一つの出し物って決まりだからね。」

しかし学園長は首を縦に降らずに企画を棄却した。

だが蒼夜も反論の言葉を言う。

「しかし学園長、確かに規則は大切なのはわかりますが生徒の自主

性というのも大切なのでは？」

「今まであんたらの学年はやりたい放題やってきただろ？我が儘言わずに我慢するんだね。餓鬼が要求ばかり言うんじゃないよ。」

「それじゃあそちらの要求を了承すれば許可すると言つことですね。分かりました。」

間髪入れずに出てきた蒼夜の言葉に学園長が一瞬ポカンとした表情をした。

「じゃあ学園長、私たちが試召大会の広報を模擬店を開きながらやるからさあ。それでいいでしょ？大会の目的は試験召喚獣の宣伝って蒼ちゃんが言っていたし。」

優羽の言葉に学園長は言葉が詰まる、確かに生徒達自ら試召大会の宣伝があればかなりの効果が見られる。正に魅力的な提案と言える。

学園長もそれを理解している事もあり、少し間を開けて溜め息をす。多少渋った顔をしながら渋々許可を出した。

「はあ……もう勝手にすればいいさ、正しくれぐれも学園の評判を下げる事はしないでくれよ。さあ用が済んだら帰りな、それとそこ

の小娘もさっさとでていくんだね。ここは遊び場じゃないんだよ」

そう言うと珍しく言うことを聞いて出て行った優羽。

そして去り際にクスリと笑い

「商品の腕輪面白そうだね」

そう言って去って行った優羽。

それを見た蒼夜が

「学園長、なんか気付いてますよ。そしてあれは何か企んでいる顔です。」

幼なじみの感なのだろうか学園長に同情するような目で呟いた。

学園長は溜め息をつく、その様子を見て。改めて蒼夜は学園長に同情し、心の中で合掌するのであった。

「そこで本題、今回みんなを集めたのは他でもない。自称恋のキューピットである私がみんなの為にFFF団所属の男子諸君に出会いの場を提供してあげよう」

その言葉と共にFクラス男子達は口々に優羽を褒め称えている。その様子を見ていた明久達は思わず苦笑した。

「まるで振興宗教じゃな」と秀吉

「皆さん凄いやる気です」と姫路

「まあ優羽だからな」と雄二

「ていうか優羽は何がしたいの雄二？」と明久

蚊帳の外な人々はその様子と話の内容を聞いていた。

「これが私の企画だああ！！！」

優羽が黒板に書いた文字を読むところ書いてあった。

くAクラス&Fクラス合同での模擬店く

それにしてもこの優羽、かなりノリノリである。

「さあみんな模擬店でかつこよく働いてAクラスの女子と親密になろう。参加者は有志、Fクラスでクラスの為に尽くすもよし、Aクラスと親密になってもよし。一緒に最高の学園祭を作ろう！！！！」

優羽の元気な声が高らかにポロポロの教室に響き渡った。

「ていうか、あまり人数を持っていかれても困るんだが……………」

雄二の困惑した一人言を呟いていた

時は同じくしてAクラス、Aクラスでは優子が壇上に上がって合同模擬店の説明をしていた。

「……………であるからして、私たちAクラス一同はFクラスの申し出を受けようと思うの。」

流石優等生と言われるだけあり、彼女は難なく仕事をこなしている。

本来ならばこれは蒼夜の仕事なのだが、日も浅く成績もAクラスでは下の部類に入る彼からの言葉と優等生のレッテルを張られている優子とではクラスの信頼が違いすぎる為、仕方なく彼女に頼んだと言っわけだ。

Aクラスはメイド喫茶をやることは既に決まっております役割も決まっております準備のみとなっているため、Fクラスのように告知してはいOKと言っわけにはいかない。

優子の説明を聞いているクラスメートも心なしか食いつきが悪い。

蒼夜はどうやって説得しようか悩んでいると、突然久保が立ち上がり、声を上げた。

「みんな聞いて欲しい、学年のトップのクラスであるAクラスがFクラスのお願いを無碍にしているのだろうか？僕達はAクラスらしい彼らの要請を引き受けるべきだと僕は思う」久保の言葉にクラス全体がどよめく、そして否定的だった意見が次第にいなくなる。

そして結局有志での参加という形で、Aクラスも参加する事となった。

第9問 学園祭編 一話 猫と出し物とAクラス(後書き)

久々の更新です

第10問 学園祭編2話 準備と企画と試召大会（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？【？可愛らしさ？統率力？行動力？その他】（ ）』
また、その時のリーダーの候補も挙げて下さい。』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希&島田美波&遠月優羽』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希（訂正）木下秀吉（訂正）
島田美波』

教師のコメント

用事についている血痕が気になると思います。

坂本雄二の答え

『【?その他(結婚相手)】 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

遠月優羽の答え

『【?行動力】 候補……鉄人』

教師のコメント

このままこれを西村先生の所に持って行くことにします。

第10問 学園祭編2話 準備と企画と試召大会

文月学園のグラウンドにて何やらかなりの大きさのテントが張られていた。

言わずもがなAクラスとFクラスの親睦を目的とした企画、企画名『底辺と高さ』（優羽命名）である。

優羽の意見、蒼夜の確認、そして翔子によるアレンジによってやるのは屋台感覚で入り易くし、友人同士や恋人同士を客層を狙った喫茶店といった形に落ち着いた。

そしてFクラスの教室では雄二が指揮をして、グラウンドでは空いている蒼夜や優羽などをメインにFクラス面子とAクラスの面子が準備に取りかかっていた。

「Fクラスの人は各自6人ぐらいで2組に分かれてテントの設置をする班と飾り付け作成班に分かれて下さい。Aクラス………っても今は4人しかいませんし、好きな班の手伝いをお願いします。」

「きーちゃん、これってこんな感じでいい？」

きーちゃんと呼ばれた彼女………秀吉の姉の優子は返事をする。

優羽は店の正面に飾る看板を優子と共に作成していた。

「遠月さん凄いね、こんな絵を一时间足らずで描いちゃうし。」

「優羽でいいよ、きーちゃん霧ちゃんと友達でしょなら私共友達みたいなものでしょう。」

にっこりと微笑みながら言う優羽に対して優子も笑顔で「ありがとう」と答える。

「そりじゃあ私は一旦自分のクラスの様子を見てくるね。きーちゃんあとよろしく……！」

そう言って優子の返事を待たずに優羽は走り去っていった。そして優子の傍らにいつの間にか蒼夜がおり。

「それじゃあ後は木下さん頑張ってください。」

蒼夜が笑顔でそう言うが、優子はあからさまに嫌な顔をする。それもそうだろう、優羽と優子で共同作成した看板はそこその大きさがあり、一人で取り付けるにはかなりきつい物なのだから。

明らかな無理難題に優子は内心ふざけるなと思っ
ているが、外には出さないでいた。外での「木下優子」はあくまで優等生なのだから。

「雨咲君も手伝ってくれるよね……………つてあれ？」

気が付いたらまとめ役の蒼夜がその場にいないことに気付いた。

そしてその場には

『面白い話を聞いたので学園長の所へ行つてきます。あとは簡単な作業だけなので、優子さん宜しく!!!!』

というメモが残されていた。発案者が二人勝手に消えた事により危機感を覚えた優子はため息を付き、空を仰ぎながら

「こんなんで大丈夫かしら……………」

と、この行き当たりばつたりの合同のイベントに対して危機感を感
じた。

しかしその直後、実際は優羽と蒼夜達のしつかりした計画が順調に
進んでいる事に優子も気付き、実際はそんな心配は不要であると知
ったのはすぐ後の事である。

「やっほー、みんなお祭り堪能してる？祭は準備から楽しむものだよー。」

グラウンドにて作業を入れた優羽は自身のクラスの様子を見に行っていた。

しかし、一部の人間をもって行かれたFクラスは少しだけ作業に遅れが出ている様子だった。まあその遅れも学園祭までには間に合う程度の遅れなので、問題ないだろう。

「ああ、優羽か。多少の作業の遅れはあるが、対した事はないだろう。そっちはどうだ？」

「大丈夫V、Aクラスの人も多少は手伝ってくれてるし何より蒼君

もいるしね。」

雄二の質問に親指を立てて答える優羽すると突然ムツリーニが背後に現れ、優羽に小皿に入ったゴマ団子を差し出す。

どうやら試食のようだ。優羽はムツリーニに一言ありがとっと伝えると遠慮なく一つ口に含む

「なんか変わった味がす」……………（ボタン）「

団子を口含んだ途端優羽が倒れる。

「あの……………優羽ちゃんどうかしたんですか？」

「おそらく向こうの仕事が疲れたんだよ。休ませてあげよう姫路さん。」

「そうじゃ、それが一番じゃのう」

姫路の作った団子を食べて倒れた優羽に対して、明久達がフォローを入れる。

何故か意識が持って行かれる中、一つだけ分かった事があった。

二度とこのクラスで油断してはいけないのだと……そして姫路の料理はヤバい物だと。

(うん……次から気をつけよう)

新たなる決意と自分を嵌めたムツツリー二にいつか仕返しをしよう
と心に誓った優羽であった。

何はともあれFクラスの準備は多少の遅れはあるが、滞りなく作業
は進んでいた。

時同じくしてAクラス。Aクラスはほぼ準備は完了している状態で、あとは簡単な作業のみとなっていた。

そんな光景を蒼夜は流石は翔子ちゃんだと感心していると、突然声をかけられる。

「蒼夜……どう?」

声の主はAクラス代表の霧島翔子、翔子がクラス展のメイド喫茶の衣装に身を包んでいた。

「よく似合ってるね翔子ちゃん。」

確かに翔子にメイド服姿はクールで無口な万能メイドといった雰囲気兼ね備えている。

「これで、雄二も私にメロメロ?」

首を傾げて聞く仕草をしながら質問する翔子。

「メロメロだね。もう完璧に」

と蒼夜もそれに対して悪乗りをしている。

「ところで雨咲君はどうしてここにいるのかな？確かあつちのまじめ役だった気がするけど。」

工藤の言葉に笑顔で疲れたから逃げて来ましたと言うと、工藤は笑い出す。

「あはは、後で優子に怒られても知らないよ。ところで何しに来たの？こつちの様子見かな。」

「翔子ちゃんに用があつてきたんだよ、翔子ちゃん試召大会に出るんでしょ？」

蒼夜の言葉にこくりと頷く翔子。

「僕も出るつもり何だけど、良かったら一緒に出ない？優羽はなんか張り切って模擬店やるうとしていている所を見ると声掛けにくいし。良かったらお願いしたいんだけど……」

「ごめん……もう先約がある。愛子と出るつもりだから。」

翔子が申しなさそうに言うと、気にしないと答えそのままAクラスの教室を出て行き。本来の目的である学園長の下に向かった。

学園長室の扉に立つと、何やら中で話をしているようだった。声から察するに教頭先生だろう。

「失礼します。」

ノックを入れて、礼儀正しく入る蒼夜。そして偶々目があった教頭先生に声を掛ける。

「教頭先生、学園祭も近いですし大変そうですね。頑張ってください。この学校は問題児が多いですし。」

悪意のない笑顔で言うと教頭先生も「Aクラスも合同模擬店も楽しみにしてるよ」と答え学園長室を出て行った。

「へえ、あのクソ餓鬼どもの連れの割には礼儀正しくじゃないか。それで何しに来たんだい？」

「試召大会についての事です。僕にも協力させて下さい」

至極真面目な顔答えると学園長は何を言ってるのかよく分からないとシラを切る。まあ突然こんな話が来てもはいそうですかと言うわけがない。

「とぼけないで下さい。坂本君達に頼むと言うことは裏があると言っているようなものですから。」

それを言うと少し間を開けると、小さく溜め息を付き重い口を開いた。

「はあ、分かったよ。それでどこまで知ってるんだい。」

「はつきり言うと僕自身は何もわかってません。ていうか今の発言も鎌掛けただけですし。」

それを言うと学園長はしまったと顔に手を当てる。蒼夜が構わず言葉が続ける。

「なんか優羽ちゃんが企んでいるみたいだからそれを止めたいだけです。あの顔をするときはいくらでも暇な事になりませんし」
蒼夜は優羽が先日見せたあの笑みが気になって仕方がない様子だ。頭の回る彼女なら何かに気づいて、行動を起こす可能性がある。基本的に気まぐれで思い付きで行動する優羽は何かと危険だ。それは分かっている、だからこそ平和で普通の学園生活を送りたい蒼夜には優羽の悪ふざけを止めたかった。

「っていうかぶっちゃけ不味いんじゃないですか？優羽ちゃんの成

績なら普通に相方が駄目でも優勝する可能性がありますよ？」

「はあ……分かったよ。それで、こっちはどうすればいいのだい。」

「とりあえず全体の事情の説明だけ、事情が分からなくては僕らは何を要求していいのか分かりませんし。」
それを言うと、学園長も諦めたのか溜め息混じりに口を開く。

「はあ、私の無能っぷりをさらけ出す事実だから出来れば避けたかったんだけどね……、私の目的は試召大会である馬鹿共に優勝賞品を手に入れて欲しいんだよ。」

観念した学園長がそれを言うと、合点がいったのか蒼夜は「ああ」といった反応を見せていた。

「理解したようだね、そう、賞品の白銀の腕輪には欠陥があるのさ。」

時は同じ時保健室、姫路の料理を食らった優羽が青い顔をしながら休んでいた。連れ添いの秀吉と共に……

「うー、学園祭で浮かれすぎて油断してた……」

「まあ確かに姫路の料理は凶悪じゃならぬ。まあ普段の素行の悪いし、因果応報という奴なのじゃ」

秀吉にそう言われるとむーっと頬を膨らまして怒るような仕草を見せる。

「秀吉君のいじわる……」

「それはそうと、お主は何しにFクラスに戻って来たのじゃ？合同模擬店の準備だってあるじゃろっし。」

秀吉がそういって、優羽はそうだったと思い出したように言った。

「そうそう、秀吉君私と一緒に試召大会に出てくれない？」

子供のように眩しい笑顔で言うと、秀吉は少し考える。

「お主、Aクラスとの模擬店のほうはどうするのじゃ？まあ参加すること自体はやぶさかではないのじゃが……っというかお主の場合ムツリーニと組んだ方がよいのではないのかのう？」

秀吉がそういうと優羽は首を傾げている。

「お主の苦手な保健体育はムツリーニの最も得意な教科じゃろう、お主と組めば恐らく敵はいないんじゃないかのう？」

それを言うところかあと暢気な声で相槌を打っていた。

「そっかあ、秀吉君ナイスアイデア秀吉君大好き。」

そついうと保健室のベットから飛び上がり、風のように走って保健室を飛び出して行った。

「相変わらずじゃのう。」

一人取り残された秀吉はそうポツリと呟いた

場所は戻って学園長室では粗方の事情を聞いていた蒼夜が学園長と共にいた。

「話は大体わかりました。雄ちゃん達を影から優勝させればいいんですね、それか学園長のいう条件に当てはまるペアがいればいいんですよね。」

「まあ、低得点者で優勝出来るのはあのバカ共だけさね」

学園長の条件とは優勝者はかなりの低得点者ではなければいけない。欠陥品の腕輪はある程度の得点者が使用すると暴走してしまう、大勢の人が集まる学園祭でそうなったら世論に弱いこの文月学園は直ぐに廃校になる可能性すらある。

だから優勝者は暴走の危険の無いFクラスの人間のような低得点者ではならなくてはならないようだ。

試召大会はトーナメント式、だから理想としては雄二達と決勝戦で相対して負ける事がベストだ。しかし問題は山積みである。

一つは学園長を蹴落とそうとする教頭による妨害行為。

これは雄二達と協力すればなんとかなるだろう。

2つ目……これが最大の問題である。

それは何をしでかすかわからない優羽の存在である。下手に事情を説明しても一人暴走し結局世間に学園の悪評を広める可能性もある、逆に事情を説明しなければしないで、試召大会で彼女を倒さなければならぬ。

保健体育という弱点を除けば、確実に学園最強の召喚獣を持つ優羽。

(まあ優羽ちゃんは相方が土屋君でないかぎりは大丈夫でしょう)

そう考えると要件がすんだのか失礼しますと学園長室を出て行き、相方探しを始めた。

「問題はどうかやって僕が参加するかなんだよね、翔子ちゃんと一緒になら安心だったんだけど……」

勝ち進むならばAクラスの間ではならなくてはならないだろう。まだまだ日も浅い蒼夜には知り合いが少ない。となるともう数人し

かないだろう。

「とりあえず、あの人を誘いましょうか。」

第10問 学園祭編2話 準備と企画と試召大会（後書き）

最近感想が増えてモチベーションアップしています。

告知この度

クロさんの小説バカとテストと召喚獣と文月学園のカラスとコラボすることが決まりました。

現在執筆しておりますが、話をややこしくしないために学園祭編が終わり次第投稿とさせて頂く予定です。

皆さんご理解の程宜しくお願いします。

第11問 学園祭編3話 僕と知り合いと相棒選び（前書き）

学園祭に向けてのアンケートにご協力下さい。

学園祭においての雰囲気において似合っている出し物が何なのか意見を述べよ。

姫路 瑞希の答え

『活気にあふれ生徒が生き生きと働く出店等』

教師のコメント

生徒が元気よく接客や売り子をしている様子はとても学園祭らしいと思います。

土屋 康太の答え

『女子生徒が売りをしている様子』

教師のコメント

あなたがいうと犯罪臭く感じるのは何故でしょうか？

遠月 優羽の答え

『コスプレ!!!可愛くて際どいコスプレ誰がなんと云おうがコスプレ』

教師のコメント

そうですね

第11問 学園祭編3話 僕と知り合いと相棒選び

古来より人間にはマナーという物が存在する。

約束を守ること然り、人の嫌がることしない事然り、ルールを守ることなど様々なマナーが存在する。

マナーを守らない物には罰が下るのが基本だろう。

「それでどうして突然行方不明になるし、あげくまとめ役を押し付けられまるで作業を終了したのを見計らって戻ってきたかのようなタイミングで……………」

両腕を組んで立ちはだかるように話を続ける優子、彼女の怒りもつともである。

「反省してます」

気づけばグラウンドにて正座をして頭を下げている蒼夜。

そのあまりにもシニールな光景を見つめた優子は溜め息をついた

「それで、そこまでしてまで抜けていた用事って何だったの？」

優子が蒼夜に厳しい口調で言う、どうやらすっかり説明しないと納得がいかない様子だった。彼女は普段は模範的な優等生に見えるが、天真爛漫な優羽を見てきた蒼夜には何故か違和感を感じるものがあった。

多分現在の怒っている様子が素の彼女に近いのだろうという自然体らしさを感じられた。

恐らく彼女は納得がいくまで聞き続けるだろう。

「召喚大会に出ようとしていて学園長に頼みにいったんですよ。」

「召喚大会って代表が出るって意気込んでた学園祭でやるあのイベントよね？」

「そうです、あれに出て出し物の宣伝でもすれば売上にも大分変わりますし、それに一つ優羽が面白い提案をしましたからね。」

蒼夜が言うと、優子はどろいっことか分からずその場で分からないという顔をしていた？

「ああ、まだ優羽の話を言ってませんでしたね。簡単に言うのと試召戦争と同じですよ、売上が多かった方の勝ち……つまり勝った方の言うことを一つだけ聞くという物です。」

つまりは今回の学園祭を雄二率いるFクラスと翔子が率いるAクラスと蒼夜、優羽が纏める合同クラスに別れての売上勝負という事だ。

罰ゲームは基本的に前回の試召戦争と同じである。

「正直僕自身は負けようが関係ないんですけど、優羽ちゃんがやる気満々だしそれを邪魔するわけにもいきませんしね。」

と建て前をたててはいるが、蒼夜自身雄二との約束がある今これは大きな障害なのである。

他にも自身が試召大会にでて、売上を上げればそこそこの額が集まるだろう。どうせやるなら盛大な方がいいに決まっている、まあ他にも大会出場の言い訳という意味合いもあるが……

売上勝負で勝つ為には2つのデメリットを改善しなければならない。一つは野外という訳で、飲食店をやるにおいての食品の管理である。

夏場には食品痛みやすく、安全面で客足に影響がでないかと言うこと。
室内ならば、冷蔵庫等の家電品を用いればよいが場所が場所なためそれは出来ない。
よって食材を扱う方法も考えなければならぬと言うことである。

2つ目の課題は屋外と言うことだ、現在は結構な大きさのテントを使用するという状態である。

確かにグラウンドは校門から一番近い場所ではあるが、日当たり良好過ぎる灼熱の環境では客は減る可能性も考えられる。「どうせ校舎内に入るのなら校舎内にある涼しい場所に向かおう」といった流れになってしまえばかなり厳しい事になる。

だからこそ学園主催の目玉イベントに出てそこから客を持って来なければならぬ。

「まあそんな訳で相方を探しているのですが、いかんせんまだ日が浅いもので知り合いは増えても相方になる人はことごとく断られ、取りあえず参加だけは出来るように学園長に頼みにいった訳です」

最後に蒼夜がまあ誰も相手はいませんですけどね、と苦笑した。

そんな蒼夜を見て、優子もつられて笑う普段飄々として落ち着いた秀囲気の蒼夜からはめったに見られない様子がおかしかったのだらう。

「雨咲君でもそういう顔するんだ、ちょっと意外だったわ。」

「僕だって人間ですよ。面白ければ笑いますし、苦しい事があれば溜め息だってつきますよ機械じゃないんですから。」

蒼夜が心外だと言わんばかりに子供が拗ねたみたいにムスツとする
と、優子は再び笑う。

「全くどこぞの事ある毎に知人に暴行を加える人間ならともかく、
僕は普通です。あれと一緒にしないで下さい」

ザワ……………

蒼夜の言葉と同時に突如場の空気が殺伐とする。

「雨咲君…………それはどういう意味かしら？」

しかしそれにきづかない蒼夜は相変わらずいつもの調子でいる。

「どついう意味ってほらよくいるじゃないんですか漫画や小説なんかでそう個性的なつて何故腕をしっかりとホルドしてるんですか？」

気が付くと笑顔で殺気を放ち蒼夜の腕をしっかりと掴んで……

「ええ、よくわかったわ。普段私はそういう目で見られてたようね、よくわかったわ。」

「あの…木下さん？人間の腕はその方向にまがらん」

関節技を食らい、学園に蒼夜の断末魔が響いた。優子の完全な勘違いでとんだとばっちりを受けた蒼夜であった。

「これは私が一緒に召喚大会にでて、私がどんな人間か考えを改める必要があるわね。」

優子がそう言うと、半ば強制的にペアを組まれた蒼夜であった。

余談だが、蒼夜はあの間接技は世界を狙えるレベルだったとか……

「ムツツン、私と召喚大会に出て見ない？」

同時刻、とある校舎裏にて2人の人物が会話……もとい交渉が行われていた。

一人はムツツリーニの異名を持つ土屋康太、そしてもう一人は気まぐれ猫と呼ばれ学園中知らない者はいないとまでされた優羽がいた。

「私と一緒に無敵だよ、保健体育ならムツツン、その他の教科なら私……ほら完璧でしょ。あっその写真欲しいな」

会話をしながらムツツリーニの品物であ写真を物色している優羽、ムツツリーニもまるで店屋の店主のように会話をしている

「了解……料金はモデル料から引いておく」

「で……ムツツン一緒に出てくれる？」

優羽はいつもの調子でムツツリーニに頼み込む。

「学園祭の準備で忙しい……」

やはり面倒くさいのか断られる優羽、しかし一年近く商売仲間をやっている優羽には予想通りの展開である。こんな時は対ムッツリー二用の魔法の言葉である。

「ムッツン、雄ちゃん秘密の……」

「任せておけ！……！」

必殺の雄ちゃんのエロ本で買収作戦、言い終わる前に返事をするあたりムッツリー二と言えよう。

こうしてムッツリー二×優羽の最弱Fクラスから文月最強タッグになるだろう。

「あっ」

最後に優羽は思い出したように答えた。

「ムツツン、これと同じデザインの服装を作って欲しいんだやっぱり客寄せならこれだよな。」

優羽は手にもっていた紙をムツツリーニ手渡すと

「報酬は私の撮影写真、期間は学園祭当日……あっサイズは紙に詳しく明記してるから」

それだけ言うと人数分の衣装とそのサイズが明記してあり紙を渡してそのまま去っていった。

第11問 学園祭編3話 僕と知り合いと相棒選び（後書き）

蒼夜の出番が多い気がするけど気のせいかな……

蒼夜のキャラがしっかりしてないのか最初の下りにやたら苦しかったわ……

感想があればお願いします。

第12問 学園祭編4話 清涼祭開幕!!! (前書き)

皆さん遅れましたが新年明けましておめでとうございます。

今年も気まぐれ猫を宜しくお願いします。

優羽「こちょちもよしく〜ZZZZZ」

おい誰だ優羽に酒飲ませたヤツは。

優子「か…可愛い!!!雨咲君、この子持ち帰っていいよね」

こうして寝ている様子は子猫のようだね、あ〜可愛い……

蒼夜「新年早々この先を考えると目眩が……ともあれそれでは皆さん新年一発目をどうぞ」

第12問 学園祭編4話 清涼祭開幕!!!

一週間の長い長い準備期間が終わり、学生達が待ちに待った学園祭が始まりこの文月学園では多数の人が押し寄せてきていた。試験校ならではの世論の注目は一般の人々にも同じことが言えるらしく、普通の学校の学園祭の倍を人数が来ていることだろう。

そして多数の人間のいる校門を少し過ぎたグラウンドに佇むとあるテントからはAクラスの木下優子と蒼夜率いる一部のAクラス、そしてFクラスの遠月優羽率いるFクラスの極少人数で店が開かれていた。

「私達AクラスとFクラスの合同喫茶店。是非いらしてください」

につこり顔で呼び込みをしているのはAクラスの優等生の名を称する木下秀吉の姉、木下優子である。

真面目で活発で文武両道の仮面を持つ優子は笑顔を周囲に振りまく、そんな効果と学園祭にて一番最初に目に入るこの喫茶店はかなりの忙しさを見せていた。

中では学生服にエプロンを来た生徒達が接客を行っている、その中に蒼夜が抜群の判断で指示を送っていた。

「AテーブルにはクレープをB、Dテーブルはお客様がお帰りになるので会計を……」

営業スマイルを忘れずに接客を行いながら指示を送っていた蒼夜、指示はぎこちなく慣れない物だが的確であった。

優子、蒼夜はそれぞれやる事をしっかりとこなしていたそして優羽は……

《調理室》

「遠月さん凄い……」

調理室で材料の仕込みをしているAクラスのが面々が優羽を見て羨望の眼差しで見つめていた。

優羽は慣れた手つきで次々と材料を切ったり物を焼いたりと一人で大量の仕事を引き受けていた。

調理室での仕事は主に携帯電話を通じ注文した物の情報に合わせ調理するというわけである。

簡単な物は軽く手を加えて蒼夜達の場所に送り、厄介な物は直接こちらで対応して直接渡すと言った物だった。

「配達組は私達がどんどん作っていくから頑張っ
て持って行ってね」

「あー疲れたー私も接客したいーせっかくムツンから取っ
て置きを頼んだのに」

とまあ文句を言いながらも作業に取り組む優羽であった。

所変わってFクラスはボロい教室を雄二の絶妙なアイデアと工夫でかなりの店造りとなっていた。

Fクラスの出し物は中華喫茶、簡単なデザート飲茶をを提供する模擬店だ。

こちらも優羽達ほどではないが、そこそこの客脚がきている。

「それにしても坂本の統率力は凄いわね、普段はただのばかなのに」

「そうだね普段はただのばかなのに、このテーブルなんかパット見
凄く綺麗だし。」

明久が感心したように机を示す。

「あっ、それ木下君が作ったんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきてこうテキパキと……」

姫路が秀吉を尊敬の眼差しで見つめている。さすがに演劇部だけあり、こういう作業もお手のものなのだろう。

「確かにみてくればまともじゃが、クロスを捲るとこのとおりじゃ」

そう言いながら秀吉はクロスを捲るといつものFクラスの見慣れた汚いみかん箱がでてきた。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「大丈夫だよきつと気づいてもその人の胸の内にはまっておいて貰えるよ」

確かにこんな箱を見られたら評判はあっさりと地に落ちるだろう、だがこんな事を言いふらすような営業妨害をするやからは学園祭にはいないだろう。

先日の味見で胡麻団子の味も完璧だったしこのままいけば成功間違いない。

「明久、そろそろ召還大会の時間だ」

雄二がそう言いながら明久を連れ出そうとする、しかし姫路と美波がそれを引き止める。

「吉井君と坂本君も出るのですか？」

「こつこつのはめんどくさいってあんた達行ってなかったっけ？」

問いただされて明久の挙動が一瞬不審になる、しかし雄二がすかさずフォローするように口を開く

「優羽達と売上勝負って事になってな俺たちも出場して店の宣伝を
していいこつこつて訳さ」

こつこつ場面の姫路達はなにかと鋭い、真実を混ぜ合わせて雄二は
うまくごまかす。

「そつこつ訳で秀吉、店の方あとは任せた」

そつこつって二人は教室を出て行く、同時にムツツリー二も気配を消
して誰にも気づかれず出ていった。

同時刻

「木下さんそろそろ時間です。僕たちも会場に向かいますよ、幸い客も少ないですし……………」

校門から来る客がなくなり、客が校内に入り屋外に店がある蒼夜達は大分客足が落ち着いた。いまなら抜けても大丈夫だろう。

「そうね、それじゃあみんなしばらくお願いするね」

そう言い二人も同じく会場に向かっていった。

「それでは一回戦を開始します」

優羽とムツツリー二のペアの一回戦が始まった。教科はいきなり優

羽の駄目科目でありムツツリー二の最も得意な科目である保健体育。

対する相手は男女のペアである見ない顔である限り3年だろうか。

「馨、それじゃあ頑張ろうか。」

「うん、洋君頑張ろう。」

「ムツツン、相手ラブラブだよ?」

「……一瞬で片付ける。」

対戦相手のラブラブオーラに若干ムツツリー二がやる気を見せる、FFF団の一員たるものムツツリー二もこのカップルがムカつくのだろうか?

「それでは、始め!!!」

保健体育

Cクラス 田中洋&広瀬馨 v s Fクラス 遠月優羽&土屋康太

Cクラス198点&188点 v s Fクラス1点&423点

両者の点数が表示される、それと同時に……

「……加速……」

ムツツンリーニの一言で加速した召還獣が一瞬で相手二人の召還獣を倒す。

無論優羽はその光景を見ているだけである。

しかしムツツリーニという保健体育最強の男は2対1の状況をまるで何でも無いといった勢いで相手を瞬殺した。

「勝者遠月、土屋ペア」

宣言と共にムツツリーニは気が付けば消えていた、Fクラスの厨房担当だけあり長居するわけにはいかないのだろう。

試合が終わるとムツツリーニはクラスの仕事に戻った。

次の試合は蒼夜達であるが、まとめ役である3人が長時間消えれば不味いそう考えた優羽は先に戻る事にした。

「不味い事になりました」

優子より一足先に来ていた蒼夜が、優羽達の試合の様子を眺める。ムツンリーニと組まなければ一回戦で負ける、そして二人が組むとは考えずに対戦表を作ったのは誤算だった。

こうなってしまった以上は真っ正面から挑む他はない、幸いこのまま進めば3回戦にて優羽達と当たる事となる、科目は暗記系科目である世界史である。計算系の科目などは苦手だが、暗記系……日本史や世界史などは覚えれば点数の取れる教科である。

点数はそれでも200近く離れているが優子もいる今、合計ではこちらが勝っている。

相方の土屋康太は保健体育以外はFクラスの成績、勝ち目が無いわけではない。

「さて、真っ正面から優羽ちゃんと闘って勝てるかどうか……」

まるでこの試合は勝ちが決まったものだというような口調で一人ぶつぶつともろの思いにふけていた。

「霧ちゃん遊びにきたよー」

所変わってAクラスのメイド喫茶では優羽が一回戦から戻る際寄り道をしていた。

いつもと変わらない呑気な声で、教室の外より姿の見えない翔子に声をかけた。

優羽の声を聞きつけたのか、早速と教室の入り口にメイド姿の霧島翔子が姿を表す。

「お帰りなさいませお嬢様」

親友の登場に普段は無表情な翔子も心なしか嬉しそうな様子で接客している、対する優羽はメイド姿の翔子を見て固まっていた。

「優……お嬢様、どうかいたしましたか？」

一瞬名前を呼びそうになりつつも、翔子なりの悪ふざけなのか珍しくからかうように質問した。

「……わ……い……」

消えるような小さな声が優羽の口から出てくる。それを見ていた周りは不審な目で見ているが、翔子には長い付き合いからかそれはなんなのか理解していた。

そう、これは……

優羽のスイッチが入る合図である。

可愛いもの、好きな物を見つけると子供のように飛びつき自分の物にしようとし暴走する、今の優羽はそうなる前の警報機のような物だ。

こうなった優羽に捕まったが最後元に戻るまで優羽に振り回される事となる、多くの人間がこれの被害にあっているしかし親友という関係は伊達ではない。

「優羽……少し落ち着いて……」

先に動いたのは翔子、優羽のスイッチが入る直前のいわばチャージの時間を狙って逆に優羽を優しく抱きしめ囁くように言った。

274

「ふにゃあ〜」

力の抜けた顔で子猫のように優羽は翔子にじゃれついている。

辺りには途端にほんわかした空気が満ち溢れる、普段好き放題に暴走する優羽とのギャップに周囲の優羽を知っている人達はみな和んでいた。

翔子はしばし癒やしの塊の優羽を抱きしめ、存分に堪能していた。

第13問 学園祭編5話 喫茶店と猫と常夏コンビ(前書き)

問題

以下の生き物の漢字読みを答えなさい

? 烏賊

? 海月

姫路瑞樹の答え

? いか

? くらげ

教師のコメント

正解です、しっかり勉学に励んでるようですね。

吉井明久の答え

? とりぞく

教師のコメント

非常によく似ていますがこれは鳥ではなく烏なので違います。微妙に違う文字なので気をつけてください。珍しく普通の間違いで安心しました。

島田美波の答え

?うみづき

教師のコメント

一見そう読めたりはしますが、特殊読みな漢字なので残念ながら不正解です。早く日本に慣れると良いですね。

遠月優羽の答え

?いかな者が

教師のコメント

誰がうまい事いえと……

第13問 学園祭編5話 喫茶店と猫と常夏コンビ

「ヤッホーFクラス諸君、調子はどう？」

元気いっぱい優羽に対しその声に気づいたFクラスの面々は少々困った顔をしていた。

「美波ちゃんどうしたの？困った顔して」

「実は……さつきからあそこの客に困っているのよ、坂本達は召還大会のほうでないしどうしようか悩んでいたのよ」

美波が客のいる場所を指差して答える、見るとうちの制服をきた見知らぬ顔の生徒がテーブルのクロスを剥がして何か騒いでいる。

優羽は内心で成程クレーマーかぁ、と呟くと美波に耳元で囁く。

「私かなんとかするよ、雄ちゃん達はまだ戻ってないんでしょ？」

「優羽、悪いわね」

美波がお礼を述べる、意地っ張りな彼女がお礼をする姿が珍しい優

羽はクスリと笑い、人差し指を口元で立てて「まあ私も一応Fクラスの一員だからね」と答え客のもとへ向かった。

「優羽ちゃんって本当に偶にですけど凄く大人っぽく見えますよね」

その様子を見た姫路は少し魅とれた様子でぼーっとしながら呟いた。そして美波と秀吉もそれに頷いていた。

「お客様。」

普段のおちゃらけた雰囲気は一切感じさせないその様子で見事な営業スマイルで問題の客のもと声をかけた。

客は二人組の男でみた感じ知らない顔だ下級生が上級生である2年の店に文句を言うわけがない。となるとこの二人は自分たちの上級生……つまり3年という訳である。

一人は中肉中背の男、そして少し特徴的な小さなモヒカンという姿。もう一人は175程の丸坊主である。

「申し訳ございません、わたくしどものご説明がいたらなかったばかりに勘違いを……」

丁寧な様子で対応をする優羽、しかし客である二人は畳みかけるように文句を言う。

「お前ふざけてるのか？ 仮にも食べ物扱う店でこんな小汚い箱を机代わりにするなどなめてやがんのか！……！」

かなり腹立たしい言い方であるが、あちらの文句も最もである。

しかし優羽は客に対し変わらず丁寧な口調で答える。

「お客様のご意見も一理御座います。しかしこれは当店の雰囲気を出すための物、衛生面は問題ございません。」

先ほどのこの二人のクレームに対して周りの客も気になっていたの

か優羽の言葉に耳を傾けた。

「当店のテーマは和みやすい喫茶店というコンセプトをモットーにしております。お客様が万が一豪華な装飾に入りづらくなりませんようあえてこのような見てくれとなっております。一見ダンボールにしか見えないかもしれませんが違います。あれをよく見て下さい」

そう指差しテーブルとして使っていないダンボールの上に優羽が何やら重たそうなカバンを乗せている。

「これを見て分かると思いますが、これはダンボールのように見せているだけで御座います。汚く見えるのは全てこちらのデザインですから」

優羽は二人の3年に一通り言うと、最後に笑顔で言葉を放った。

「ですが、わたくしどものおかげで少しでも気分を悪くした事は事実です。即刻机を取り替えましょう、お客様方お詫びと言うわけではありませんがここにいる全てお客様の代をただとさせていただきます。」

それだけ言うと優羽はクラスの厨房の中に消えていった。

「あー肩こった、全くああいう客は困ったもんだね」

厨房にて優羽が一人うんうんと頷いているとムツツリーニが労いの意味を込めてか胡麻団子を差し出した。

「……………助かった」

差し出した胡麻団子を口にする。気に入ったのか大層満足な顔だ。

「それで優羽よくあんな事いえたわね。」

「ああ、あれ？嘘だよ、あんなの」

関心する美波をよそに何食わぬ顔で優羽は言う、優羽はムツツリーニからもらった胡麻団子につつとりしながら言葉を続けた。

「例えば、普通の飲食店がダンボールなんかで机を作る？そんなのありえないじゃん。だけど他の誰かがこれはダンボールだって言えばあんな見た目をしていれば誰だって気付くでしょ？だから逆にこれはダンボールでは無いって証拠を見せればそんな事はないって思うかもしれない。実際ダンボールっぽく作られた机はあれだけだけ、あの状況ならばお客さんはみんな同じ机だと勘違いするでしょ？それに学園祭で飲食物を扱うには基本的に保健所に許可が必要ない事が多いの。集団心理って言葉があるでしょ？一人が信じれば周りも信じてしまう。これはまさにそれを利用したの」

まあ一歩間違えたら客は更に来なくなるのは間違いないだろう。しかし結果として優羽の目論見は上手くいった、結果オーライと言えるだろう。

「あとは秀吉君の部活から机を持って足りない分は雄ちゃんがなんとかしてくれるよ」

優羽はそれじゃあと行って教室より出て行った。

一方蒼夜達は難なく一回戦を突破し、自分達の持ち場である喫茶店に戻る。店の中には客が殆どいない、いくら出される物が良くても

この暑さで熱の籠もったテントでは仕方がない。蒼夜はこれを見て顔を变えずにとんでもない事を言い出した。

「さて、そろそろ片付けといきましょうか」

蒼夜の言葉に周りは反対の声が上がる。それも当たり前である、みんな協力して作成した物をこつこつもあつさり片付けるのは皆嫌なのだろう。

「皆さん落ち着いて、誰も店その物を片付け訳ではありません。明日すぐに使える状態にするだけです。その後は自分のクラスの出し物に参加してください。クラス全体の団結も学園祭の役割ですから、それに学園祭は明日もありますから」

と周りの人間に説明するような口調で説得する蒼夜。それを聞いて納得した生徒達は作業へ移っていくそれを確認してひとまず蒼夜は一呼吸ついて落ち着いた。

（まったくクラスの出し物にも一応は参加しろとは、学園長も無理を言ったものです）

そんなことを内心に思いながら外からの客を蒼夜はぼんやりとながめていた。するとあるものが目に入った。片付け作業の苦手な優羽が校門前でなにやら小さな女の子と話をしている様子だった、片付け作業をさせても物を壊す事になるだけの優羽はFクラスへと向かい戻った後、蒼夜の計らいで自由行動となっていた。

「困っている子には相変わらずですね」

つと蒼夜はその様子は遠くからそっと見つめるのであった。

「話は15分程前に遡る」

Fクラスの教室から戻って来た優羽は直ぐに蒼夜のもとに戻って来る。気まぐれな優羽にはしては珍しく指示通りのに戻って来た。

「ただいま、蒼ちゃん、きーちゃん戻って来たよ。」

授業が無くてやりたいように出来るこの状況が楽しいのか優羽は「機嫌だ、いつものハイテンションが滑車に掛けるようにテンションが高かった。」

「さてさてきーちゃん、私は何をすれば良いのですかな？優羽ちゃんに何でもお任せだよ。」

「優羽片付け作業は得意？」

すると首を横に振り

「全然」

少し思案すると優子にはっこりと良い笑顔で答える。

「邪魔しないように自由に遊んでて。」

あっさり戦力外通告された。

実際片付け作業なんて優羽にやらせたら何が起きるかわからないと察知しての発言だろう。

優羽も優子の意図を理解したのか、それとも片付け作業が面倒なだけなのかどっちなのかわからない。そして

「それじゃあきーちゃん、蒼ちゃんと二人きりでがんばってねー。」

からかうように言うと優子は顔を真っ赤にしながら否定の言葉を叫んだ。

そして次の試合までの合間をいくつかうろつこうとしている最中、たまたま見かけた少女鉄人こと西村先生と共に居る所が目に入り、現在に至る訳である。

少女は何だか困った様子だ気になり近づいて聞き耳を立てる、話を聞く限り鉄人は小さな子が一人で学園に居るので迷子なのかと勘違いしているようだ。

「てーっーじーんー、鉄人先生どうかしたのー？」

優羽の声に鉄人が振り向く、そして一呼吸ため息をついて口を開いた。

「遠月か、こんな所何を企んでる」

鉄人のいつもの台詞にやははっっといつも通りの反応を示す優羽。

「西村先生こそそんな小さな子にナンパして何してんですか？」

「バカな事を言うな、児童が一人でこんな所にいれば事情を聞くのが教師の役目だ。」

教育者らしき事を言う鉄人、流石にクソ真面目な鉄人だけある。

「あつ、絵描きのお姉ちゃんです!!!」

鉄人との会話を割り込んで少女の声がある。その場に割り込んで来る。その声の方向に視線を移すと、ツインテールの小さな少女の見覚えのある顔があった。

「あつ、はーちゃんだ。」

優羽ははーちゃんと呼んだ少女を抱きかかえ、久しぶりだね〜といつも通りに話掛ける。

「遠月、知り合いか？」

「うん、美波ちゃんの妹名前は葉月ちゃん、私の友人だよ。」

優羽がそういうと鉄人は納得したのか、軽く頷く。「なら後はお前に任せよう、私はあの馬鹿共の所に行かなければならないからな。」
そう言うと鉄人はまたあのバカ共は机を盗むなど……とブツブツ呟くと、校舎の中へと入って行った。

「それではーちゃんはなんでここに来たの？お姉ちゃんの様子見？」

優羽がニコニコ顔で葉月に話掛ける、それに対し葉月も純粹無垢な

顔で答える

「今日は違います。人を探してるんです」

葉月の目的はどうかやら姉に会いに着たのではなく、誰かを探しているようだ。しかしどうかやらその人どころか手がかりすら見つからずに困っている様子だった。

「ふっふっふ、はーちゃん困っている友人を見捨てるほどこの優羽ちゃんは冷たくないんだよ！ー！」

そういうと優羽は親指を突き立てて優羽ちゃんにお任せ！ー！と言っと、笑顔で葉月が答える。

「本当ですか絵描きのお姉ちゃん。」

目を輝かせて笑顔になる葉月、これを見ただけでそういったかいがあつたのだろう。

「それじゃあその人について何か情報は無い？名前とか、特徴とか……」

人を探すならまずは情報その人の名前が解らなければその人の特徴を。幸いこの学園は個性派の人間が大量に存在している。だからこそ顔の広い優羽なら特徴一つで人が探せるだろうと考えたのだろう。

「えーつと馬鹿なおにいちゃんです。」

その言葉を聴いたとたん笑顔のまま凍りつく。

（あれ？おかしいな？なんか該当する人がたくさん居るぞ？）

当然だろうといえばFクラスは馬鹿の集まりいわば馬鹿クラスそこに在籍してるのであればそんな人間は腐るほど関係がついていく。優羽にはこの特徴で解るのはFクラスの男という事だけだ
そんな事を考えていると、ちよつどそろそろ次の試合の時間になっている事に気がつく。

「ごめんねはーちゃん、ちよつと待っててくれる？ちよつと私用事があるから……ここで待っててすぐに戻ってくるから〜」

そういつて優羽は自分の出し物をやっていた場所に葉月を案内し、Aクラスの人にしばらく相手を任せ、次の試合会場に颯爽とかけ行った。

第13問 学園祭編5話 喫茶店と猫と常夏コンビ（後書き）

更新遅れてすいません……………

実は卒業課題や自動車教習に行くための手続きやバイトと多忙を極め、なかなか執筆の時間がとれませんでした……………

嘘ですごめんなさい

実はゴットフィールドというオンラインのゲームにうつつ抜かしてました……………

永らくお待たせいたしましたして非常に申し訳ございません……………

第14問 学園祭編6話 猫と人捜しとちびっ子少女(前書き)

問題

早起すると良いことがあるなどの意味の諺を答えよ

姫路瑞希、霧島翔子の答え

『早起きは三文の徳』

教師のコメント

『正解です。よく得と間違えるかたが多いので注意が必要です。正確にはどちらも似た意味ですが、正しくは徳です』

292

雨咲蒼夜の答え

『三文程度ならいらぬから睡眠に回したい』

教師のコメント

「非常に現実的なあなたらしい意見ですね」

島田美波の答え

『早起きは3憶の得』

教師のコメント

寝ている間に何が……

第14問 学園祭編6話 猫と人捜しとちびっ子少女

「ムツツン、お待たせ。」

試合の会場には既にムツツリーニが待機をしている状態であった。その事に軽い疑問を抱きつつも優羽は気にせずいつもの軽口を言う。

そんなやり取りをしていると相手方も会場にやって来る。

「両者揃いましたか、それでも皆さん試合開始です。」

試合の面子が揃い、試合の時間になると共に審判の教師は試合開始の合図を告げる。

相手はCクラスのふたり、二年と三年の男コンビである。恐らく部活の先輩後輩関係だろう。

「「試獣召喚」」

「「試獣召喚」」

教科数学

『2年Fクラス 遠月優羽&Fクラス 土屋康太

460点&15点』

『三年Bクラス 加藤亮&2年Cクラス 井上健一 230点&162点』

相手の点数は両者さほど高い訳ではない。まあ部活に力を入れていく訳なのだから、それを踏まえればこの点数は大した物なのだろう。対するこちらの点数はかなり高い。ムツツリー二は話にならないが、しかし優羽は相手の二人の点数を足してもそれを上回る。

いつもの点数より100以上少ないが、当たり前だそもそも戦争終了後授業を1時限すらも受けてない、それどころか回復試験すら受けていないのだから消耗しているのも当たり前だ。まあ正直戦争終了後回復試験を受けない事がおかしいのだが……

「いつくよ、分割操作4人組」
元気いっぱい優羽が言うと、優羽の召喚獣の腕輪が光、4分の1サイズとなり4つに分裂している。

優羽の召喚獣の恐ろしさは点数でもなく、この腕輪なのだ。優羽自身の成績が良く常に400オーバーしている事となり、常にこの力が付きまとう。本来一人に対し1体の召喚獣が基本な事とあいまって優羽との戦闘は基本常に複数との戦いとなる。周りから見ればこれほど恐ろしい事はないだろう、兵法の基本は相手より多くの戦力を集める事。試召戦争と言われる戦争はそういう面で遊羽の腕輪はその有利なのだ、しかも高点数な事もあり分裂した単体そのものは一撃で倒される程度の体力でもかなり強い。しかも召還獣のサイズも小さくなっているのだ、在る意味倒すのは難しいだろう

優羽の召喚獣が飛び跳ねるように相手を翻弄すると、速さに任せた動きで強引に攻撃を仕掛ける。

それにより操作になれない2年の男子生徒は呆気なく敗れる。3年の生徒は一年召還獣の扱いの先輩だけあり、なんとかそれを凌ぐ。流石といった所だ

「よし、4号ちゃん裁　マン作戦だよ。相手をヤム　ヤの如くやつちゃえー」

今度は分身の一部の一匹が、相手の召還獣の背中に張り付く。サイズも4分の1程でも400点代のパワーなのだ引き剥がせる訳もない。

「いつけええ!!!」

ノリノリな様子で合図を出すと張り付いた優羽の召還獣は相手の召還獣もろとも含め自爆し、道連れにしていった。

「えー、勝者遠月、土屋ペア」

版権的にもやり方的にもギリギリな勝利をした二人。

「イエーイ、ピース」

笑顔で指でピースを作って勝利を示す優羽

これで優羽は三回戦進出が決まる。しかし次の相手は蒼夜、木下のAクラスペアいくら優羽と言えど簡単にはいかないだろう。

「よしはーちゃん待っててね、今優羽ちゃんが助けに行くよ

」

優羽は葉月との約束に答える為に足早に屋外の喫茶店に向かっていった。

現在召還大会は姫路・美波ペア、坂本・吉井ペア、蒼夜・優子ペア、翔子・工藤ペア、そして常夏コンビ。現在優羽の暴走を止められるペアはこのペア位だろう、さらに言うならばそのペアの半数はFクラスの人間と言うことだ。さて優勝するのは誰だろうか。

「はーちゃん、ただいまー」

そう言いながら葉月に抱きつく優羽、無事召還大会を勝利に納め、葉月のもとに戻ってきたのだ

「絵描きのお姉ちゃん、おかえりなのです。」

対する葉月も優羽に体を預ける。恐らく優羽の周囲で優羽のこのテーションについてこれるのは葉月と翔子ぐらいだろう。

「よしそれじゃあ頑張って探しにいこー」

「はいです!」

そう言つて二人はまるで嵐のように去つていった。優羽はとりあえず手掛かりを集める為にAクラスの所に向かつていった、あそこなら蒼夜達が居るので何か良い情報が入手出来ると判断したのだろう。

「蒼ちゃん、霧ちゃん、きーちゃんちょっといい?」

Aクラスの教室につくと既に野外の片付けが済んだ蒼夜と優子も教室に戻つて来ていた。

「優羽じゃない、どうしたの? Fクラスのほうを手伝わなくていいの?」

優子が優羽の声にいち早く気づき、優羽に声をかける。

「あ……きーちゃん、ちょっとききたい………ことが………」
優羽は優子の姿を見た直後言葉を止めて固まる。

「蒼ちゃん、霧ちゃん、きーちゃん、くーちゃんちょっといい？」

Aクラスの教室につくと既に野外の片付けが済んだ蒼夜と優子も教室に戻って来ていた。

「優羽じゃない、どうしたの？Fクラスのほうを手伝わなくていいの？」

優子が優羽の声にいち早く気づき、優羽に声をかける。

「あ……きーちゃん、ちょっとききたい………ことが………」

優羽は優子の姿を見た直後言葉を止めて固まる。「かわ………」

「？」

ポツリとつぶやくように優羽は言う、何も知らない優子は首を傾げる。

その様子を接客しながらも遠目で見ていた翔子が合掌していた。ま

すます意味がわからない優子、原因は優子の姿にある。女子生徒であり、Aクラスそしてメイド喫茶の接客であるつまり現在の優子は

.....

メイド服姿なのである。

「キヤーきーちゃん何それ可愛い！！！！最高だよ。完璧だよ！！！！キヤーベリーびゅーていふおー」

「ちよっ、優羽！！抱きつかないでっはーなーしーてー」

抱きつかれ、人形のようにクルクルと振り回される優子。本人は目を回している。

「木下さん、ご愁傷様です」

その光景を見た蒼夜は軽く笑いながら言う。

「蒼夜、助けて上げて。優子が困ってる」

「翔子ちゃんが行けばいいじゃないですかってその格好じゃ翔子ちゃんも危ないですね。」

はあ、と溜め息をつくど仕方がないですねと言いながら優子を助けるべく嵐と化した優羽のもとへと向かう。

「遊羽、その辺にしておいて上げて下さい……木下さんが……」

ヒュッ（優子が持っていたケーキが飛ぶ音）

ベチャ（蒼夜の制服にぶつかる音）

ダッ（気づいた優羽が逃げる音）

バシ（優羽を捕まえる音）

「遊羽ちゃん？何か言うことは？」

「あはは、蒼ちゃん制服汚れてるよ。着替えたら？」

「な・に・か・い・う・こ・と・は？」

「あつ、私の制服貸してあげるよきつと蒼ちゃんに似合……ごめんなさい冗談です。やめて！！鉄人部屋連行は勘弁して」

笑顔の背後に般若が見える蒼夜。優羽の腕を引っ張り無理やり補習

室に連行しようとする。優羽は必死に教室の壁に掴まり抵抗する。

しかしとある声で突然優羽の顔が真面目になる。

「全く、さっきの教室と来たら最悪だったな。教室は汚いし出てくるもののは不味いし此処とは大違いだぜ。２Ｆにはいかねーほうがいいな。」

「蒼ちゃん」

「とりあえず説教は後ですね。」

「絵描きのお姉ちゃん、どうかしたんですか？」騒ぎが一時静かになると廊下で待機していた葉月は様子を見に教室に顔を覗きながら言う。

「はーちゃん、ちょっと待ってて優羽ちゃんは今から悪い奴らを懲らしめなきゃいけないの」

両手を合わせて謝罪の意を込める優羽。葉月もＦクラスを悪く言う奴に気がついたのか「はいです」と小さく言うと優羽の指示に従って廊下に行く。

「霧ちゃん、ごめんね。流石にあれは許せない」

顔はいつもの笑顔だが、目の奥にはBクラス戦の時の怒りが見える。

「翔子ちゃん、今からAクラスに迷惑かけます僕らと翔子ちゃん、雄二の戦いに水を差す輩は気に入りません」

二人の言葉に翔子は黙って頷くと優羽と蒼夜は互いにアイコンタクトをとる。そして

「優羽ちゃん話があるみたいだったようですがひとまず後にしましょ」

「うん」

「「まずはあのふざけた二人組を追い出そう（します）……！！！！！！」

第14問 学園祭編6話 猫と人捜しとちびっ子少女（後書き）

仕事の疲労で執筆が………

遊羽「リーちゃんファイト……！」

眠いZZZZ てなわけで遊羽後は頼んだ……

遊羽「はいはいー遊羽ちゃんにお任せ。」

遊羽「次回から他作品のキャラをよんで座談会を開くよー。まずは一発目はリーちゃんのもう一つの作品『バカとテストと極道娘』から金髪黒目が特徴の福井夏帆ことかほりんだよー。」

遊羽「それと次回から感想orメッセージにてキャラを募集するよ。正直来るとは思わないけどね」

第15問 学園祭編 6話 猫と女装とメイド服（前書き）

学園祭をより良い物にするためにアンケートにご協力お願いします。

召還大会について意見、または思った事を教えて下さい。

姫路瑞希の答え

召還大会を通してペアの友人との親交を深められたりと有意義な物だと思う。

またFクラスだからという偏見などを払拭する事もできたのは良かった。

教師のコメント

姫路さんらしい意見です。男ばかりのクラスでやりにくいとは思いますが、沢山友人を作れるといいですね。

坂本雄二の答え

正直な所学園側の思惑がわかりやすく、そう考えると気分が悪いが他のクラスの戦力を把握する事が出来た。

試召戦争が解禁した時の情報となるだろう。自身の人生の為に有効

にしていきたい

教師のコメント

代表として試召戦争の心構えは完璧ですね、しかし何故か鬼気迫るものが……………

雨咲 蒼夜の答え

セッティング、規模など無駄が多いものが数多く見直す部分が多い。教師陣だけでなく、実行委員等を作成し生徒に協力を求めるなどするとよい。

教師のコメント

確かに一理ありますね、次回に備え検討してみます。

遠月 優羽の答え

ぶっちゃけこの学校特有のシステムを見せつけたかっただけなき

優羽はえっ、といったようすだ。そうこの作戦には致命的な欠陥がある……そう、それは……

「優羽ちゃん、僕は男なんです……って翔子、ちゃん？」

蒼夜がそう言いかけるが言葉を遮る、翔子が何故か蒼夜の体を捕まえていた。

「大丈夫……蒼夜なら必ず似合う。」

「霧ちゃんグッジョブ!!! 任せて優羽ちゃんが本気になればこの学校に新しいアイドルの一人や二人作っちゃうんだから。」

そういつて制服の様々なポケットから取り出す小さな小道具セットそれを持って優羽は自信満々に言う。

「優羽ちゃん七つ道具その2変装セット出張版!!!!!! 任せて、秀吉君直伝メイク術で蒼ちゃんだってばれないような完璧な出来にしてあげるよ。」

優羽の表情を見た蒼夜はああ、これは無理だ……と言った諦めに満ちた思いで自身を捕まえている翔子を見て。

「翔子ちゃん恨みますよ」

とつぶやいていた

優等生の受難は一生なくなることも無いのだろう。

引きずられ控え室に連れられるなか蒼夜は……

(優羽ちゃん七つ道具ってあと6はなんなんでしょうか)

と窓越しに空を見上げ現実逃避をしていた。

「ちょっと愛子代表達よんできて貰える？いつまでも休まれたらこ
つちがたまないから」

少し前に奥の控え室に向かって5分程たつ、正直人数が足りない中
蒼夜や翔子といった使える人間が二人も遊んでるこの状況が嫌なの

だろう。

優子は愛子にそう指示する。

「了解、それじゃ様子見に行くよ」

そういつて奥へと消えて行った

「代表、雨咲君そろそろ戻ってきてくれると………ってあれ？」

そう愛子が控え室を覗くと知らぬ間にAクラスのメイド服を着ている優羽と翔子そして見知らぬ女の子がいた。

「あつ、くーちゃん。見てみて、この子超かわいいでしょ」

そういつて優羽は愛子に謎の少女を見せ付ける。少女はAクラスのメイド喫茶の服を纏い金髪の長髪の髪に青い目をした子だ正直かなりレベルが高い。

しかし愛子は感想よりも先に質問が出る。

「誰？」

Aクラスにはこんな金髪の美少女はいない、それどころかこんな美少女学園内ですら見たことがない。そしてAクラスのメイド喫茶のメイド服を着ているのだ。正直かなり謎だ。

女の子は黙って優羽を見ているというか軽く睨んでいるみたいだ、優羽の知り合いなのだろうか

「霧ちゃん……完璧だよ！！くーちゃんすら気づかない完成度……
……雨咲蒼子あめさき せうまき通称うーちゃんの誕生だよ。」

何か優羽が言っている愛子は何が何なのか把握出来ず軽く呆然としている。

「うん……これなら……誰も蒼夜だって気づかない」

「えっ？」

翔子の発言に愛子は耳を疑う

（蒼夜？……それじゃあ……もしかしてこの美少女………雨咲君！？）

「も、もしかして……雨……咲君？」

愛子はおそろおそろ優羽に質問すると優羽が大きく頷く。

「どうも……雨吹あまふです」

何か諦めたような眼差しで名乗る蒼夜、その空気だけで愛子は優羽に巻き込まれたのだと確信する。

「えーっと……ご愁傷様？」

愛子はそう言う姿はいつもの笑顔すら軽く曇っていた。

「いつそ笑って下さい。そしてジョークとして流して下さい」

いやこれは流石に笑えない……実際これは流石にはれない下手をすれば一番親交の深いクラスメイトすら気づかない程に、それ程の完成度の女装だった。

「ちょっと……！愛子あんたまで遊ばないでよって誰？」

呼び戻しにきた愛子が戻らないのに痺れを切らし文句を言いに来た優子。しかし見知らぬ女の子が目に入り言葉を遮る

しばらくお待ち下さい

「まさか雨咲君だったなんてね……流石に驚いたわ。」

「いつそ殺して下さい……」

「だ、大丈夫よ雨咲君、それなら絶対的にばれないから私が保証するわ」

「もうここまで来たら徹底的になりきって（がし 優羽の頭を掴む音）絶対にばれないよう（ギリギリギリ 写真を撮ろうとする優羽にアイアンクローをする音）誤魔化します」

余程精神的に参って居るのか普段より暴力的な蒼夜だった……

「それじゃあ優羽行きますよ……こんな原因を作った奴らを八つ裂きにしましょ。」

かなり言動が荒くなっている（それも笑顔で……。）。普段冷静な口調からは想像出来ない程に……

「あ、皆さん……。もしこの姿をばらしたり写真に残したりしたら……
……どうなるかわかりますよね？」

笑顔でにっこりと翔子達を見つめる蒼夜。

あまりの威圧感に優子、愛子、翔子の三人は黙って頷いた。

この時は誰も気づかなかっただろう。

優羽が本当に学園アイドルうーちゃんの誕生させてしまっていた事は……

知らぬ間に新たな伝説を作る優羽出会った。

第15問 学園祭編 6話 猫と女装とメイド服（後書き）

座談会を企画したのですが……携帯更新だと文字数的に辛いのですが……どうしようとりあえず意見を募集します

1 他作品として座談会の場所を作る

2 パソコンから強引に作成

3 携帯で少ない文字数で頑張る

1 ならやりたいように出来ますが読者が大変なので迷います……

2 はパソコンからの更新がめったに出来ないので、かなり更新が遅れませす

3 だと単純に文字数が足りなくて手抜きになります。投稿はいつも通り

4 新話投稿と同時に座談会枠を間に割り込む

個人的には3は手抜きになりがちです。つか3やるなら4でやればいって感じ

4でやると単純に本編が見づらくなるから……

皆さんの希望をお願いします

第16問 学園祭編7話 猫とチャイナと喫茶店

「ご主人様少し宜しいでしょうか？」

二人組の……優羽と青子（蒼夜）の二人の組み合わせで先ほどから居座る3年に声をかける。

「あ、なんかようか？」

3年の片割れが反応する。優羽は先ほど接触している為髪をいつものポニーテールをきれいに伸ばし、さらに変装セット（出張版）を用いている。

そのせいか相手もFクラスの人間だと気付かない。まあFクラスの人間がこんな所にメイド服を着て接客をしているわけがないという発想から気付かないだけかもしれないが……

「大変失礼致しますが、只今満席となつておるため他のご主人様の為にお食事を終えたご主人様は速やかに席を譲るきまりになっておりますので、誠に失礼ながら他のご主人様に席を譲って頂けないでしょうか。」

「……（ぺこり）」

喋ると男だとバレるので無言で蒼夜は頭を下げる。しかし相手はあからさまに嫌そうな顔をしている。これには笑顔で対応している優羽も内心怒りを覚える

「何だよ……こっちは客なんだぞ。ゆっくり休む事もさせないってのか」

ぶっつん……

優羽の中で何かが切れた

(うん、閉め出そう。)

既にFクラスを馬鹿にされておりかなり頭にきている時にこの発言は優羽を怒らせるに十分だった。

「なんだよ、まだなんかあん……」

(ガッ)

常夏コンビがそう言い切る前に優羽は黙って椅子を蹴り倒し二人が転げ落ちる。

「てめえ、なにしやがる……!!」

「見ての通りこちらは忙しい者で、あいにくご主人様のような馬鹿騒ぎして周りのご主人様を不快に思わせるご主人様は不愉快です。とっとと荷物まとめてお帰りやがって下さい。」

「はっ、こんな店こっちから願い下げだぜ。」

最後に常夏コンビが捨て台詞を吐き捨て店を出て行く。その様子を笑顔で見送る、すると蒼夜がある事に気づく

(これ僕女装損な気がするんですが………まあ多少計画は違いますが結果オーライと言うことにしましょう)

蒼夜がそう考えていると遠くで事態を収めたのを確認した優子がホールを中心に立つ

「ご主人様、お嬢様方大変見苦しい所を失礼いたしました。」

「お詫びにご主人様方にはお代を頂きませんのでごゆっくりどうぞ」

優羽がそういうと、優羽はそのまま自らの財布を優子にわたして

「きーちゃん、迷惑かけてごめんね。お詫びにさっきのお客のお代そこから出しておいて。わたしの学校での個人的な稼ぎだから心配

しないで。それじゃあわたしはFクラスに戻って人探ししなきゃ」

「雨咲君達に聞きたい事はいいの？」

「うんきーちゃんも霧ちゃんも蒼ちゃんも忙しそうだし自分で何とかするよ」

子供っぽく舌を出して謝罪すると優子に向かって一言伝えて最後に優子の質問に答えると元気よく「またねー」と言ってお月を連れて自分教室に戻っていった。

「結局何がしたかったんでしょうか？」

「さあまあいいんじゃない優羽らしいと思っわよ」

去って行く優羽を見送りながら優子にそう呟く蒼夜、優子はもう慣れたのかいつも通りに答える

「ははっ、言ってます」

そんな様子がおかしかったのか蒼夜は笑う

「それにしても、いつまでその格好しているの」

「聞かないで下さい……………今から着替えてきます……………」

「駄目よ、その方が見栄えいいんだからそれで次の召喚大会始まるまでそれで接客してもらおうわ。」

優子の発言に蒼夜はため息をつく。「こつなったらやけです……………」吐き捨てるような言葉が聞こえたのは気のせいじゃないだろう

「ただいまー、おっ、みんな繁盛してますなあ」

姫路がそんな優羽に気づき反応する。

「優羽ちゃん、ちょうど良かったです。って優羽ちゃん？」

姫路が優羽の視界に入った直後優羽が再び硬直する。本日3度目である。もはや言うまでもないだろう。

「チャイナ服だあー、瑞希ちゃんのチャイナ服。胸の部分が殺人的だよ。」

基本的にコスプレ事態が好きなの優羽に対して美少女がコスプレをする。それだけで十分スイッチが入る。

「きゃっ、優羽ちゃん。苦しいです。苦しいです」

先ほどの優子と同じく抱きしめられ、クルクルと回される姫路。本日二人目の犠牲者である

「あ、優羽戻ってきたんだ……………って優羽は死ぬ。」

「ありがと、あっきー」

明久が優羽に気づき姿を見た直後意味不明な事を言う明久。まあ何故かほめ言葉だと理解する優羽。すると背後から葉月がぱあと笑顔で叫ぶ。

「あっ、馬鹿なお兄ちゃんだ」

優羽の頭で先ほどの特徴を整理する。

ぼくぼくぼくぼくぼくぼく

（小学生にバカ呼ばわり　かなりバカ　バカ〓観察処分者　あつき
ー）

ちーん

「あ、そついう事か」

「優羽、今失礼な事考えたよね」

「うん
」

「優羽よそこは隠すべきじゃぞ」

優羽の言葉に秀吉はあきれ果てる。そんな事はお構いなしに優羽は葉月を抱っこして明久の前に連れて行く。

「あつきー、はーちゃんから聞いたよ。結婚の約束してるんだってね、いやあ霧ちゃん以外にも居るもんなんだねこういうの。よっあつきーのロリコン！！！！」

優羽の爆弾発言と同時に二人の人物が動いた。

「瑞希！！！！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ」

「いぶあつ！？」

突然二人に襲撃される明久。美波はいつも通りだが、姫路までもが参加しているのは間違いないFクラスの悪影響を受けて居るのだから。

「んー骨折に1000円」

「そっかじゃあ俺は明久の死亡に1000円だ」

明久の状況で賭けをしている優羽と雄二、なんとというか果てしなく友人に恵まれて無い。

「優羽よ、冗談はともかくこのままじゃと明久が本日に召喚大会に出れなくなるぞい」

秀吉の発言でようやく止めに入る優羽、二人のもとに近づいた。

「二人共あんまりやるとあっきーに暗殺者と勘違いされちゃうよ」

そう言いながら美波と姫路の耳元で何か囁くと、一瞬で明久が解放された。

「優羽ありがとう……」

「今度あっきーの手料理で良いよ。」

美波と姫路の二人に聞こえない声でお礼を言う明久。優羽も二人に聞こえないように言うが明久は嫌な顔をしたが優羽が姫路達に何かいおうとすると涙目になりながら了承し「今月の食費が……」と嘆いていた。

「ていうか、秀吉君や瑞希ちゃん和美波ちゃんだけずるいよチャイナ服、私もきたい」

優羽は席についてテーブルに張り付き客席に陣取りながらゴマ団子を注文しながら注文を取りに来た秀吉に文句を言う。
ちなみに今の優羽は客である

「お主ぐらいじゃぞ、自主的に着たがるのは……」

雄二も優羽はずっと蒼夜の所に居ると思いい優羽の分は用意してない様子だった。しかし

「……………（スツ）」
ムツリーニが無言で優羽にチャイナ服を渡す。さすがムツリーニ、頼まないにもかかわらずあらかじめ用意をしている。

「あー、チャイナ服だ。ムツンありがとうー」

「優羽よストップじゃ、そのままではムツンが死んでしまつのじやー……!」

羽は中身を確認するとその勢いでムツリーニに抱きつく。ムツリーニは美少女+メイド+抱きつくのトリプルイベントに信じられない量の鼻血を出している。

「我が人生に……一片の悔いなし……」

「ムツツリーニ、ムツツリーニよっかりするのじゃ……!」

「雄二、今すぐ輸血を………ムツツリーニが……!」

「ムツツリーニのカバンから輸血パックを見つけた。明久、今すぐ輸血措置だ」

学園祭でもいつもの面子でいつものやり取りであった。

「今日もFクラスは平和だね」

「こんな光景が普通だなんてやっぱりFクラスよね……」

笑う優羽に呆れる美波、優羽はそのまま着替える為その場を後にした。

「教頭先生、それで僕に何の用ですか？」

場所は変わって空き教室、蒼夜が教頭に呼び出されたのだ。

蒼夜自身あまり表向きは優等生だが実際はFクラスの雄二達と同じぐらい素行が悪くきつとそれがばれて軽く注意されるのだと思っていた。

（それにしても学園祭の真っ最中に説教とは暇な先生もいたものです）

まあ普段の表向きの顔がある蒼夜にはそこまで長い説教になるとは思っておらず軽く萎え気味だ

「教頭先生、すいません今学園祭の真っ最中ですので急な話でなければ後日お願いします。」

そう言って教室を出ようとするが、教頭が口を開くと一瞬足を止めた。

「君は学園長ではなく私につくつもりはないかい？」

「どついついことですか？」

いきなりの話に戸惑う蒼夜、教頭はお構いなしに話を続ける。

「西村先生から聞いたよ、君は天才を超えたいんだろ？ならばそつちよりこちらについた方が目的を達成出来るじゃないのかい？勿論ただとは言わない。しつかり報酬も用意する。どうだい悪い話じゃないと思うけど。」

まさかこんな話になるとは思わず一瞬戸惑いを見せる、しかしすぐにいつもの調子に戻る。

「分かりました。」

蒼夜は何事もなかったように快諾する。教頭もまさか即決するとは思わず驚いた顔をした。それを蒼夜が気付くと補足するように笑いながら口を開く。

「教頭先生がいったんじゃないですか、僕がここにきた目的は安い学費で学校に行けてかつ優秀な人間が多い。僕が努力と知恵で凡人が天才に勝てるって事を証明します。教頭先生がそれをサポートしていただけるなら喜んでお願いします。」

そのまま頭を下げてお願いをする。

「ただし、条件があります」

「条件？」

「一つ、僕らの勝負……クラス間での売上対決、それに手を出さない事。二つ目他の協力者……三年のAクラスの二人、この二人に何しても何も言わない事。この二つを守るのなら僕はどんな手を使っても天才達を潰します」

握りこぶしを作って告げると教頭は満足したのか空き教室から出て行った。

取り残された蒼夜は一人笑いながら呟く

「捨てる神いれば拾う神ありですね。まさか教頭が黒幕だったとは意外です、まあこれは面白い情報ですね。さて僕はどちらにつきましようか……」

学園祭はまだまだ続く、まだまだ波乱の展開が予想されるだろう。

作者「おまけの補足コーナー」

優羽「いえーい」

優羽「ここでは気まぐれ猫の小ネタの部分……いわば気まぐれ設定を募集したり解説する場所だよ」

作者「解説乙、さて前置きは尺の都合上省略早速本題」

優羽「今回はこれ」

『優子に渡した優羽の財布にはいくら入っていたのか?』

優羽「さぁリーちゃん回答を……どうぞ」

作者「大体10万程かな?ちなみに何故こんなに入っているかというところな理由が……」

1 ムツツリーニ商会の稼ぎ……7〜8万

2 お小遣い2万

作者「まあこんな感じ性格はアレだけど見た目は翔子クラスだからね。おっとそれじゃあそろそろ時間だぜ」

優羽「最後に優羽ちゃん7つ道具のネタを募集します。ちなみに現在」

1 どこでもお絵かきセット

2 優羽ちゃんの変装セット（出張版込み）

優羽「だよ、条件はただ一つあまり現実離れしたものはNGだよ。」

作者「あとあくまでネタ募集なんで確実に採用するわけではありません」

優羽「それじゃあ、しーゆあげーん」

第17問 学園祭編8話 猫と因縁と幼なじみ(前書き)

今回からオリジナル要素フラグが立ちます

オリ話を入れるのに必要なんで………

第17問 学園祭編8話 猫と因縁と幼なじみ

「～学園長室～」

「Aクラスの優等生って聞いたから頼んだのが仇になったさね」

学園長室にて蒼夜の報告を聞いて忌々しそうな顔で答える学園長。

「簡単じゃないですか、僕が教頭先生を潰して学園長が報酬を支払う。ついでに雄二達も優勝させれば万々歳です。」

「そうは言うけどねえ、理由も無しに教師共の使う腕輪をよこせなんて流石に無理さね。」

学園長は蒼夜の提案を拒否する、しかし蒼夜は諦めた様子を見せずに話を続ける。

「それは然るべき理由さえあれば了承すると言っわけですね。それならこんな理由はどうでしょう。」

そう言い蒼夜は自身のズボンのポケットからメモ帳を取り出し学園長に渡すと、そのまま召喚大会あるのに戻ると言い学園長室から出て行った。

学園長は蒼夜が去ると受け取ったメモ帳を開き目を通す。

「ふむ、ガキの癖になかなか考えるじゃないのさ」

メモ帳の最初のページにはこう書いてあった。

【召喚システムを利用しての風紀維持の考察、召喚獣を用いての風紀委員】

「場所は変わってFクラス」

Fクラスではチャイナ服に変身した優羽が楽しそうな笑みで笑っていた。どうやらかなりお気に召したようだ。

「じゃーん、見てみてーチャイナ服だよー似合う?」

「優羽ちゃんすごく色っぽいです」

「ここまで似合うとウチは流石に入こむわ……」

同じチャイナ服を来ていても三人の服装は若干違っている。足の露出を控え胸を強調させる姫路、美波の場合はスレンダーな体を生かしたチャイナ服。それぞれ独特のオリジナリティを加えるムツリ一ニの仕事ぶりは完璧だった。そして優羽の場合はムツリ二曰わく見えるか見えないレベルのちらリズムをコンセプトにしたらしい服装である。全体的にスタイルもよく、美少女と言われる顔立ちである優羽にはかなり似合っているだろう。

「んー、やっぱりチャイナ服だとこの長さのポニーテールは違和感があるなあ。このままロングにするのは霧ちゃん和被るし……かと言って私の髪の毛の量じゃお団子にすると大きくなっちゃうし……」

どうやら髪型について悩んでいる様子だ。すると優羽が自身の鞆から変装セットを取り出し簪を取り出す。

「ここを……こうして……こうやって上げれば……よし完成
！……」

テキパキと慣れた手つきで髪を纏めそれを簡単に縛り簪をさす。

「即席で髪を纏めてみたんだけど、どうかな？」

「……ウオオオ！！」「」「」

Fクラスの男子の多くが歓声をあげる。どうやら優羽の思いつきは

うまくいったようだ。

「ところで優羽お前なんで召喚大会なんて面倒事に参加してるんだ？」

「雄ちゃん、それは違うよ………祭と来たらイベント……！！！！これは必須項目なの。夏祭りに花火があるのと同じで、文月学園には召喚大会があるの。お祭りってのはイベントを楽しんでこそのお祭りなんだよ。」

目を輝かせば身振り手振りも含め主張する優羽。正直な所雄二達には傍迷惑な話である。

「それにFクラスの私が優勝すれば瑞希ちゃんも転校しなくて済むんでしょ？」

今度はみんなに聞こえないように小さな声で雄二に伝える。優羽は優羽なりに色々考えているようだ。

「とにかくそういうことだよ。私は私で勝手にやるからさ、蒼ちゃんと雄ちゃんはそっちで頑張ってねー」

そう言いながらムッツリー二を連れて次の試合に向かう優羽であった。

次の相手は蒼夜&優子ペア、優羽は先に向かったムッツリー二に続く形で教室を出て行く。その横顔は何故か嬉しげであった。優羽自身蒼夜との試合を楽しみにしているのだろう。

「優羽ちゃん達はまだ来てないようですね、まあ僕としては不戦勝の方が嬉しいんですけど」

「ダメよ、そんなの。どうせやるからにはしっかりと勝利していくべきだわ」

先に試合の準備に到着した蒼夜は優羽が来るまで何やら手帳を見ながら不戦勝にならないものかと呟く、一方の優子は負けず嫌いなのかそれに対して反論を上げる。

「見てください。それにしても、相変わらず反則地味な点数ですよ。これで試召戦争時に試験を受けて消耗状態なんですから」

「雨咲君、なんでこんな物持つてるのよ……」

蒼夜が優子に自身の書いた手帳を見せると内容を見て驚く。中身はクラスごとの主要人物の点数情報だ。

「Fクラスの戦争時に判明した情報です。屁理屈こねて高橋先生に教えて頂きました。正直情報が古くて使い道はありませんけど……」

戦争時の情報……つまり古い物だと2ヶ月以上前、2ヶ月あれば点数情報は変わり使いものにならない。せいぜい得意科目の把握くらいだ。しかし優羽の点数は回復していない状態、つまりこの情報よりは低い点数という事だ。

「こちらの作戦はまず数を減らす為に土屋君を倒し、その後優羽ちゃんのを召喚獣を上手くいなして長期戦で消耗させます。」
本来の戦力ならば此方がAクラスだとしても正直勝てる見込みは皆無なのだが、こちらは一人が得意科目、相手はほぼ一人で更に言えば消耗状態。これなら優羽相手でも互角に持つていける。まあそれでも勝率は五分五分なのだ。

「お待たせー。先生見てみて似合っ」

遅れて会場入りする優羽とムツツリー二人、審判の教師は優羽

の態度に苦笑すると試合の準備にさしかかる

「それでは二組共準備はいいですか？」

「優羽ちゃん、今日ばかりは勝たせて頂きます。」

「優羽には悪いけど負けるわけにはいかないわ」

「あははっ、二人共やる気だね。それじゃあ精一杯楽しもうよ」

「……………絶対に勝つ」

「それでは、試合開始」

「……………サモン試獣召喚!!!!!!!!!!!!」

Aクラス&AクラスVS Fクラス&Fクラス

雨咲蒼夜&木下優子VS 遠月優羽&土屋康太

342点&336点VS 465点&31点

両者の召喚獣が姿を表した。それと同時に蒼夜がいきなり獲物である刀をムツツリー二に投擲した。頭数を減らす為の先制攻撃である。いくらスピードタイプのムツツリー二もこの点数ではどうしようもなく、あっさりと攻撃が決まり撃破される。

「えっ!!」

勝つ為とはいえ、少し汚い気がしたが蒼夜は驚く優羽に対しすかさず次の指示を送る。

「木下さん!!!!今です!!!!優羽ちゃんに腕輪を使わせる暇を与えないで下さい。」

優子は指示通りランスで突進を仕掛ける。読み通り攻撃は直撃を防がれるもののヒットする。しかし……

「二人共凄いな、だけど……素早いのは……ムツツンだけじゃないよ!!!!」

優羽はそう言いながら即座に優子に反撃を仕掛ける。かなりの早さだが、優子に防がれるしかし

「きーちゃん、後ろがお留守だよ」

「えっ……」

優羽の召喚獣が背後に現れ優子の召喚獣を襲う、とつさに背後からの攻撃を防ごうとするが、本体がそれを妨げる。

しかし優羽の分身が繰り出す攻撃は当たる事がなかった

「僕の事も忘れないで下さい。」

優羽の分身は蒼夜の手によって撃破される。

「防具投げるなんてするくない蒼ちゃん。」

蒼夜は自身の召喚獣の防具を投げ、優羽の召喚獣の分身にヒットさせる。

「勝つためです。優羽の分身はどんなに小さな攻撃でも食らえば即死、なら手軽な小さな攻撃を当てて退場してもらいますこつずれば腕輪は潰れたも同然です」

自信満々で言う蒼夜の顔を見ると優羽は突然声を上げて笑い始める。それが蒼夜から見ればおかしな光景に見えたのだろう。

「蒼ちゃん、らしくないよ。まだまだ私は戦えるのにネタバレなん
て……………本当に……………らしくないよ」

そう言い切った直後蒼夜は何を感じたのか、突然自身の召喚獣を動かす。

優羽の言葉……………それと同時に蒼夜の背後にて何かはじける音がした。
ギリギリ回避に成功するがそれでもかなり点数は削られた。

雨咲蒼夜 & 木下優子

198点 & 290点

土屋康太 & 遠月優羽

0点 & 335点

蒼夜は自分の慢心を呪った。優羽は自分より遥かに格上だ、そんな相手に一本取った所で何油断しているのだろう。
本当に優羽の言つとおり【らしくない】

「さっきのネタバレのお礼だよ。私の腕輪は分身を作って戦う能力だけとさ、通常の召喚範囲ならどこだろうと出現するわけ。つまり【私の召喚範囲ならどこだろうと自爆可能って事】」

先ほどの爆破は優羽の召喚獣（分身）が自爆した物だった、確かに優羽は前の戦いでは自爆という行為があったがここまで露骨にやられるとは思わなかったのだろう。

戦いにおいて重要なのは戦略、戦力、主導権この3つが勝ちに導くのだ。よってその全て優羽に総取りされたのだ。

流れを掴んでいたと思っていたのはほんの一瞬で、蒼夜はそれに気付かない自分に舌打ちをする。

「全く、優羽ちゃんの言うとおりらしくないですね。とんだ道化ドコロです」

「雨咲君、嘆くなら戦いなさい。」

優子の声に反応して優羽の召喚獣に目を向ける、

（そうだ、どうせ勝ちが消えたのだ。たまにはがむしゃらに戦いましょうか）

どうせ負けるなら悔いのない方がいい、そう考えると何故かすつきりした蒼夜であった。勝てないにしてもせめて一矢報いたい、そう

思いを秘めて……

第17問 学園祭編8話 猫と因縁と幼なじみ（後書き）

バカテスって風紀委員や生徒会の話題が出ないからそれを組み込もうと思っただらこうなった

賛否両論になりそうだなあ

第18問 学園祭編9話 猫とワガママと誘拐騒動(前書き)

問題

人から聞いた事より自身が体験した事のほうが良いという意味の諺を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『百聞は一見に如かず』

教師のコメント

正解です。これは百回聞くよりは一回見た方が速いと言う意味でしたね。ちよつと簡単過ぎましたでしょうか。

347

吉井明久の答え

『百戦錬磨』

教師のコメント

どうしてこうなったのか先生には理解出来ません。

雨咲蒼夜の答え

『百聞は一見に如かず。しかし百見は一行に如かず』

教師のコメント

正解です。聞くよりは見た方が速いが、体験すればもっと速いと言
うことです。ちなみにこの言葉の由来は中国の少数民族【客家】か
ら来ています。

遠月遊羽の答え

『百分は長すぎて待てない』

教師のコメント

後で職員室に来てください。

第18問 学園祭編9話 猫とワガママと誘拐騒動

試召大会会場、勝負のついた会場に蒼夜は一人佇んでいた。

「全くやってくれましたよ。ここまで見事に勝たされたら決勝戦までいかないわけにはいきませぬね。」

勝負の結果は蒼夜ペアの勝利に終わったが、どうやら一波乱あったようだ。

少しばかり時を遡る事にしよう。

「蒼ちゃん、楽しい、楽しいよ。やっぱり試召戦争はこうでなくちゃ、負けるか勝つかのギリギリの戦いだね。」

次々姿を遊羽が非常に楽しそうな表情をしながら言う、蒼夜が攻めに転じた事で皮肉にも蒼夜が策を巡らせていた時よりも遊羽が追い詰められる展開となった。

（全く、楽しそうに戦って

此方はそんな余裕も無いですよ。

）
実際は蒼夜達が押しではいるが、現状遊羽の火力ではどちらも大きな攻撃を食らえば即点数は0となってしまう。

優子もかなり頑張ってはいるが獲物が槍という武器に、非常に小回りの効きやすい遊羽の召喚獣に遊ばれている状態であった。そうすると自身で遊羽にとどめをささなければならぬ。

遊羽も二人相手と言うこともあり積極的に攻められずにいた。

いわば膠着状態である。

「このままじゃ埒が飽きません。遊羽ちゃん、僕らの提案を聞いてくれますか？」

膠着状態の中一時召喚獣の動きを止めて遊羽に言った。

「蒼ちゃん、良いよ。聞いてあげる」

「遊羽ちゃん腕輪を使って最大人数召喚してください。出し惜しみ無しの全力勝負といきましょう」

「ちよ、ちよつと雨咲君！！！何言ってるの」

蒼夜のふざけた提案に優子が抗議の声をあげるが無視をする。

「正直な所、もう勝ち負けとかどうでも良いんですよ。ただ、どうせ勝つにしろ負けるにしろ遊羽ちゃんの全力に勝たなければ納得出来ません」

ここまできたら結果などおまけのような物だった、それほど蒼夜は今充実している。

遊羽「オツケー、それじゃあでいくよ」

掛け声と同時に現れる7体の召喚獣。

召喚を確認すると、蒼夜は再び攻撃を仕掛ける。避けられる事を予想していたが、思わぬ幸運が訪れる。

なんと遊羽の召喚獣は動きこそ見せたが、回避しきれずそのまま消滅していく。

「あー、流石に上手く動かないよー。」

単純な動きならまだしも、この量となると精密な動きが出来ない。
遊羽自身思わぬ落とし穴であった。

「チャンスね、操作に慣れる前に数を減らさせて貰うわ」

そういつて優子は真っ直ぐランスで突進を仕掛け一体減らす事になる。そして続けざまに二度目の突進を繰り出そうとしてくる

しかしそれは失策であった。

「上手く動かなくても道連れには出来るんだよ」

多人数操作を諦め遊羽は突進を仕掛ける優子の召喚獣に狙われた召喚獣に対して回避ではなく、あえて道連れを選んだ。

「じゅめんね、きーちゃん」

爆発をもろに直撃した優子の召喚獣はそれが決定打となり、0点となり消滅する。

「あとは蒼ちゃんだけだよ、私の召喚獣4体いつものアイデアで見事突破してみてよ」

「残念ながらそんな物は無いです。ですから、らしく無いですが真つ向勝負で行きます」

遊羽の陣形は分身を3体を前に置き、本体を後ろに構えている残り点数からして本体の点数は50点ほど、つまり何らかの攻撃が直撃すれば十分だ。

（中央突破です、下手に仕掛けて自爆されたら此方は持ちません。最小限の数だけ倒し本体突破します。）

蒼夜の召喚獣が中央の遊羽の召喚獣（分身）に向けて走る、武器の刀とその鞘を両手に構えてひたすら本体に向けて疾走する。

そして鞘をブーメランのように投げ、分身とその本体に向けて直線上には飛んでいく。

避けると本体に向けて飛んでいく、下手に避けて蒼夜に次の攻撃の流れを捕まれる事を恐れ、あえて攻撃を受ける。

そして残る分身2体を蒼夜を追いかける形で走らせる。蒼夜はそれにも構わず本体に向けて特攻体制を取る、前と後ろには遊羽の召喚獣が構えて挟み撃ちである。もはや追いかける分身に徐々に追い付かれて後ろからやられるか、特攻が失敗に終わりやられるか、自身の勝利かの三択であった。

召喚獣同士がぶつかる音が響き決着がつく。その場に居たのは

遊羽の召喚獣だった。

蒼夜の攻撃は紙一重　ギリギリのラインまで届きかけてはいたが、背後の遊羽の召喚獣に追い付かれ決着となった。その差あと数センチ。

「ふう

危なかったあ

蒼ちゃん、良い勝負だったよ」

「それは良かったですね、でも此方は全然よくないんですが。」

「雨咲君、情けないわよ。此方が負けたんだから、先生宣言を」

決着がつき、ふて腐れる蒼夜を優子が宥め教師にコールを求める。
しかし

「あ、先生。私始める前に言い忘れた事があつたんですけど。私【棄権】するよ」

「「「は?」「」」

優子、蒼夜、果てには教師までもが驚く。

それもその筈、召喚大会は明日から試合が一般公開されるつまり明日が本番というわけだ。それを突然放棄するのだ驚くのも無理はない。

「遠月さんいきなり言われても棄権は受理出来ません」

「私は別に構わないよそのままでも、だけど明日は例え呼び出されても試合には私出ないよ。明日は目一杯他クラスの出し物を楽しみたいもん」

「出なくても此方は困らない。むしろ困るのはそっち」

ムツツリーニの言葉に教師は困った顔を見ると、蒼夜は教師に助け船を出した。

「先生、遊羽ちゃんが出ないなら僕達が出ます。」

「しかしですね。」

なかなか折れない教師に蒼夜は答えた。

「でもこのままじゃ明日酷い事になりますよ？考えてみてください
西村先生ですら手を焼く遊羽ちゃんですよ？」

蒼夜の言葉に仕方がなく教師は諦め、遊羽の棄権宣言を受理して蒼
夜が明日の準決勝に駒を進める事となった。

と、言うわけであった。結局蒼夜は遊羽に振り回されただけだった
のだ。そう考えると何だかアホらしくなってしまっているので考えること
をやめる。

とりあえずは勝ち進む事は出来たのだ余計な事を考えると億劫なっ
てしまうのでやめた。

そんな中携帯が鳴っている事に気付いた。正直な所無視したい気分
だったが相手を確認すると出ない訳には行かなかった。

「もしもし、何ですか雄二。」

「おう、蒼夜か。緊急時だから手短に話すうちのクラスの女子達が

さらわれた。連れ去った連中を探してるんだ、手を貸してくれ」

クラスの女子ということとは遊羽も含まれているのだろう。
なら簡単だ。

「雄二、らしく無いですよ。遊羽ちゃんが巻き込まれたならあの子の出番じゃないですか。遊羽の鞆にあるあれを使って呼び出してください。とりあえず校門で落合ましよう」

「わかった」

それだけ言うと雄二は電話を切った。連れ去ったのは間違いなく教頭の企みだろう、気づいてなければ約束を破ってもいいとも思っているのだろうか。しかし

「わざわざ遊羽ちゃんまで巻き込んで
墓穴掘りにいく馬鹿
な黒幕もいるんですね」

そうかんがえると笑いが漏れてくる。

「とりあえず校門にいきましょうか、翔子ちゃんには やめ
ておきましょう。というかあの子は僕の事覚えているでしょうか？」

そういつて走り去っていった。

先ほどより15分程前の出来事である。

遊羽は知らない男の集団に囲まれていた。

「悪いな、少しばかり付き合ってもらうぜ」
「いやだよ　って言える状況じゃないよねこれ。ていうか私いつからこんなにモテモテなハーレムっ子になったのかな？」

集団に囲まれているにも関わらず全く危機感を感じていない様子だった。

そのまま遊羽は「いやん、私ってモテモテ？モテ期きたこれ」と暢気な声を上げて連れ去られていった。

彼女は自身の置かれている状態を全く理解していないのでは？と疑問を投げたくなるほどに

第18問 学園祭編9話 猫とワガママと誘拐騒動(後書き)

次回あの子が大活躍って訳ではありませんが出てきます。

そして遊羽の七つ道具が出現します

第19問 学園祭編10話 猫と姉妹と舎弟トリオ

「雄二、お待たせしました。」

息を切らせながら落合予定の校門へと到着する蒼夜、雄二の他にもムツリーニ、明久そして遊羽の愛犬のケロベロスの三人と一匹がその場に居合わせた。

ケロベロスが蒼夜を確認すると蒼夜に飛びかかり、しばらくすると顔を舐め始める。

「ケロベロス、僕の事覚えていたんですね。久しぶりです」

そう答えながら頭を撫でる。

「雨咲君、急がないと」

「ああ、そうでしたね。ケロベロス、お前の主人の居場所を教えてくださいませんか？」

蒼夜が尋ねると、そのまま校門を出て外に向かって走り去っていった。

「雄二、先には向かって下さい。僕じゃ雄二達に追い付けませんでしょうし、早く言って下さい。僕もあとから追いつきますから」

「わかった、それじゃあ明久、ムツリーニ急ぐぞ」

「了解」

「うん!!」

二人は返事をするにケロベロスを追って走る雄二に続いて走っていた。

「さて と、とりあえず此方も用事を済ませましょうか。教頭先生、生徒との約束を破った報いを受けて貰いますよ。とりあえず学園長に報告といきましょう。」

そう呟いて蒼夜は学園長室へ向かって言った。

――

「瑞希ちゃんに美波ちゃん、それにはーちゃんと木下君。なんで縛られてるの？ああ、そういう遊びなんだー」

「違うわよ(のじゃ)」

あまりにも鈍い遊羽の態度にあきれた態度でツッコミを入れる秀吉と美波。

「えーっと

それじゃあ

」

ガシャン

「ガシャン？って手錠？あー、誘拐なんだこれ」

両手を手錠で繋がれ、遊羽はようやく気付いた遊羽の暢気な態度に連れてきた不良がずっこける。

「お前、自分の立場わかってないだろ？」

「そんな事ないよ。さてと　　って誘拐君達は座らないの？」

図々しくソファーに座る遊羽をみて不良達は困惑していた。それもその筈普通の女の子なら怖くて震える程の展開だ。それが全く物怖じせずにフレンドリーに話かけてくるのだ。

「ていうかこんな玩具みたいな手錠じゃすぐに外れちゃうよ？こんな感じにさ」

「「「えっ？」「」」

そういつて遊羽は髪止めを延ばし針金みたいにすると器用に鍵穴に

いれてあっさり和外してしまう。

不良達は啞然としている。

「それじゃあ、雄ちゃん達が来るまで。思いきり歌うぞー」

「ちよつとまてええええええ」

完全に人質の遊羽に振り回される不良達の姿がそこにはあった。姫路達はそんな遊羽をあきれながら眺め雄二達の助けを待っていた。

「それじゃあ一曲目いくよー」

「きけよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

不良達は完全にツッコミ役となっていた。

蒼夜が学園長室の扉の前にたつと何やら中で声が聞こえる、おそらく学園長と教頭先生だろう。話の内容を掴む為に耳を済ませて様子を見る。

「全く、可愛い生徒達を誘拐だなんてやってくれたね」

「なんの事でしょう。学園長、言いがかりはよして下さい。」

「はっ、あんた以外に犯人はいないさね。そこまで私を陥れたいかい。」

「さあ、なんの事でしょう。それでは私はこれで……」

そういつて教頭は学園長室の扉を開いた、直後扉の前にいた蒼夜と目があう。

「約束が違うんじゃないですか教頭先生、全て僕に任せるんじゃないですか？」

そう尋ねてきた蒼夜に教師は苦笑いをしながら

「すまないね生徒に全て任せるのは教師として気が引けてね」

まだ蒼夜が味方だと信じている教頭はそのまますれ違いながら去っていった。

そして蒼夜は再び扉の前に立ちノックをする。

「学園長、雨咲です。入ります」

返事を聞く前に入室し学園長を一瞥して文句をいい放つ。

「学園長なら生徒の管理ぐらいして欲しかったんですけど

「そりゃ悪かったね、今回は此方の不手際さ。それで用件はなんだ
い。」

苦虫を噛み潰したような顔で言った学園長。

「ついてきて下さい。こうなってしまったからには貴方から被害者達に揃って事情を説明して貰います。断るようでしたらこんな生徒に秘密を隠すような学校潰します、学園長と教頭の一連の騒動全てさらけ出せば簡単に潰れますからね。」

蒼夜の口調から信じられない程の怒りを感じる。
流石に学園長もここまでくるとは思わず、素直にそれに従う事とした。

」

「そういう事です。遊羽の姉御」

「へー、やつぱり見たことあると思ったら雄ちゃんに昔喧嘩を挑んだ人達なんだ。」

「そういう事です。遊羽の姉御」

お茶を飲みながら不良達と会話をしていた遊羽、対して不良達は何故かポロポロであった。

理由は姫路達に手を出そうとしたからである。結果遊羽の蹴りが一人の不良に決まり、その後遊羽のお説教、そして事情を聞くと雄二に昔やられたリベンジがしたいとの事。その時とある人物がその手引きをしてくれたのだと言う。

それを聞いた遊羽は「それなら私一人ここに居れば解決だね」と言
つて姫路達を解放したわけである。

そして再び遊羽はカラオケを再開、不良達は何故かその後の態度を
変えて、何故か遊羽の事を姉御と呼ぶようになった。

「いやあ、驚きましたよまさか姉御がああ悪鬼羅刹を振り回す魔女
だったとは」

因みに魔女とは中学時代の遊羽の事で、喧嘩ばかりしていた雄二の
近くで雄二を振り回した遊羽の事である。

自分達をボコボコにした雄二を子供のように弄ぶ姿は不良達には魔
女に見えたとの事。

「魔女つて私そんな腹黒くないもん」

頬を膨らませていじける遊羽、すると遊羽が気付いたように声をあ
げた。

「雄ちゃん達が来たみたい。太郎、次郎、三郎がんばってね」

雄二達がやってくる頃には不良達は完全に遊羽の舎弟となっていた。
余談だが、太郎、次郎、三郎とは遊羽が勝手にきめた不良達の愛称である。

「あー、楽しかった。たまには知らない人とカラオケするのも悪くないね」

遊羽は横に並んで歩くケロベロスの頭を撫でながら言つと蒼夜はため息混じりに呆れていた。

「正直此方はびっくりしましたけどね」

「全くだ」

帰り道、雄二達が来た時には既に姫路達はおらず。何故か遊羽達が犯人達と仲良くはしゃいでおり、揚げ句の果てには遊羽の事を姉御と呼んでいる始末。

あまりの展開に蒼夜と雄二達はそのまま帰ろうかと考えてた事だ。

結局遊羽の舎弟（不良達）は雄二にリベンジを挑み返り討ちにあった。

「まあ昔から誰とでも仲良くなるのは遊羽ちゃんの良いところですからね」

小学校時代、ヤクザの親分と仲良くなってましたしと諦める。

「学園長、大事にならなくなったとはいえ。こんな事になったんだ、洗いざらい真実を話して貰うぞ」

「ああ、そのつもりさ。あんた達に頼んだ優勝の目的
回収
して欲しいのはチケットじゃないんだよ」

「なんだって？」

「雄二、そこからは僕が説明します。賞品の腕輪がありましたよね、分裂召喚の腕輪と教師の腕輪の劣化版の腕輪、これにはある欠陥があるんです。共にある一定の点数水準を超えると暴走してしまいません。」

「そうか、それで俺たちを優勝のさせれば無事に解決と言うわけだったのか」

「そういうことさね、因みにフィールド作成の腕輪は平均点、分裂召喚のほうはそれ以下の点数で暴走するんさ。」

「長先生、それじゃあ教頭先生が今まで地味に嫌がらせてきたのもそのせいですかー」

「遊羽知ってたのか」

「まあね、ムツツンの盗聴機のスピーカー私持ってるし、学園内なら基本的にどこで内緒話してもわかるよ？範囲外は学園長室と鉄人先生の城ぐらいだよ？」

けろっとした顔でとんでもない事を言う遊羽、つまり学園内なら秘密の会話は全て遊羽に筒抜けなのだ。恐るべし遊羽ネットワーク

「あ、長先生。この音声データ買わない？私新しい絵の具セット欲

しいからさ。5000円でいいよー」

そういつて流したのは教頭がとある企業に密告している音声データだった。

正にはじめから最後まで全て知っていた遊羽に只々驚いていた雄二達だった。

「雄ちゃん、明日はがんばってねーそれじゃあケロちゃん帰るっか」

「ワンッ」

「全く、姉と同じで本当にやりたい放題さね」

「えっ」

学園長の言葉に耳を疑う、しかし確認をする前に学園長は車に戻って帰って行った。

――

「ただいまー、ってあれ？」

帰宅した遊羽はケロベロスの足を拭いていると、玄関に靴がもう一つあることに気付いた。

同時に部屋から声が聞こえてきた

「ゆうーちゃん、おつかえりー。もーおねーちゃん待ちくたびれちゃったよお、おお、愛しのマイシスターまた1ヶ月みないうち可愛くなったよお。ていうかチャイナ？チャイナ服？あー、かわーいいー」

突如超ハイテンションで現れた女性、物凄い速さで遊羽に接近して抱きしめる。

「お姉ちゃん、久しぶり。もー、帰ってくりなら連絡いれてよ。とびっきりのご馳走用意したのに」

ほっぺたを膨らませて怒った素振りを見せる遊羽、彼女は遊羽の姉の遠月美羽。

そんな遊羽の頭を撫でながら謝る美羽、遊羽も直ぐに機嫌を直す。

「ケロベロスも久しぶりだね、ちゃんと遊羽の事守ってたみたいだね偉いぞ。」

そう言いながらケロベロスの頭を撫でる、ケロベロスも尻尾を振り回し喜びを表す。

「それでお姉ちゃん、何で帰ってこれたの？確か来月までお仕事で
かえれないんじゃない？」

遊羽は疑問に美羽が答える。ちなみに遊羽の姉である美羽は海外の
とある貿易企業に勤めている。

「それがね、お姉ちゃん ついに日本支部のメンバーに選ばれち
やたのだ」

ぶいっといわんばかりにピースサインをしている。

「まあとは言っても経営アドバイザーとして会社にアドバイザーする
だけだから私は基本的に家にいるよ。しばらくは一緒に暮らせるね。」

そういつて優しく笑いかける姉だった、新たな波乱の始まりである。

第19問 学園祭編10話 猫と姉妹と舎弟トリオ（後書き）

今回は色々悩んだ展開だったね

遊羽を活躍させるか、蒼夜を活躍させるかケロベロスをメインに入れるかとか

遊羽の性格じゃ間違いなくあなるんじゃないかなーって結果、舎弟トリオ結成という流れです。

今回は自分の文章表現の無さが目に見えて露見しているし。

個人的にはもうちょっと遠月姉妹の描写をしつかりしたかったのと、今後の活躍を考え蒼夜を空気にしようかと思ったりと

因みに補完しておきますが、太郎、次郎、三郎の舎弟トリオは今後もちよいちよい出てくると思います。

まあ名前は永久に出ませんがねwwwwww

美羽のキャラプロフィールは希望があれば出しますが、基本的には試召戦争に関わらないんで出しません。

それと活動コメントにも書きましたが、オリジナルキャラの設定中なんでネタ投下の為にオリジナルキャラ募集しています。

一人なんキャラでも構いません、メッセージか感想にてお願いします。

締め切りは とりあえずは学園祭編の間まで と言う
ことになるかな？

因みに遊羽、蒼夜に接点あり等の設定などとりあえずネタの参考にもしたいんであくまで此方のほいで条件はつけませんが、登場時設定が変更してある可能性があります

第20問 学園祭編1-1話(前書き)

第20問 学園祭編11話

「それじゃあお姉ちゃん、私行くね。」

玄関前にて姉に向かって挨拶をしている遊羽、久しぶりに誰かに見送られるせいかなしか嬉しそうだ。

「いってらっしゃい、お姉ちゃんもあとで行くからいっしょに学園祭回ろうね。」

「うん」

元気よく頷きながら玄関を開けて飛び出して行った。

「ふふふ、相変わらずお祭り好き何だから。とにかく」

微笑みながら遊羽を見送り、リビングに戻る美羽。そして深呼吸をしながら

「それじゃあケロボロス、さっさと片付けちゃおうか。」

エプロンを見に纏い、散らかった部屋の掃除を始める。
昨日は美羽の帰宅記念と言うことで、遅くまで部屋で騒ぎ倒した為
に現在部屋が猛烈に散らかっていた。

「蒼ちゃん、おっはよーって何これ」

「ああ、遊羽ちゃんですか。見て下さい派手にやられました。」

遊羽が昨日設置したテントの場所に来ると、ボロボロになったテントがそこにはあった。

「まさかFクラス妨害にここまでするとは怒りを乗り越して関心します。」

ため息をつきながら蒼夜はテントの片付けに入る。流石にここまでやられたら今日の活動は諦めるしかない、しかし遊羽は納得していない顔をしていた。

「蒼ちゃん、今日は諦めるの?」

「ええ、勝負を諦めるのは癪ですけど仕方がないです。それに学園祭は来年もありますし」

蒼夜が諭すように遊羽に告げるが、遊羽は首を振ってうつむきながら拒否をした

「いやだ、私は諦めたくない。高校2年の学園祭は一回だけなんだ

よ　それに、それに

」

「今諦めたら勝負に勝って霧ちゃんにメイド姿で専属メイドって私の目的が果たせないじゃん!!!!!!!!!!!!!!」

遊羽のあまりにもあほあほ発言に蒼夜は啞然とした。そして次に笑い声が聞こえてくる。

「ふふふ、遊羽ちゃんの言う通りですね。それじゃあ僕は雄二を遊羽ちゃん専属の執事にしてあげましょう。」

「さすが蒼ちゃんよく分かってる。」

(とはいえ時間がありませんね、仕方がないです気は進みませんが西村先生に応援を頼みましょう)

「とにかく、時間的にテントをこの大きさのテントを張る時間はありません。規模を小さくして、屋台みたいにしていきましよう売り物は　　そうですね、昨日よく売っていたクレープや携帯可能な物にしましょう。とにかく時間がありません、遊羽ちゃん早速作業に入りましょう木下さんを待っている余裕はありませんし

」

「了解でございます雨咲隊長!」

いつものようにふざけた態度で敬礼する遊羽、そのまま二人は作業に取りかかった。

「どうしたの?雄二」

「明久か、いや　　なんでもない。少し寒気を感じただけだそれより明久昨日あれだけ俺が教えてやったんだ、テストのほうは大丈夫なんだろうな」

昨日は殆ど徹夜で雄二に勉強を教えて貰っていた明久、全ては今日の試合に勝つためだ。

「それにしても、あの変態コンビも懲りないよね。遠月さんと雨咲君に妨害ことごとく邪魔されてるのに」

教室で補給テスト前の最後の確認をしながら明久は言うと雄二は笑いながら答えた。

「ははは、全くだあいつら大人しく受験勉強してたほうが建設的だ。それより明久、準決勝は絶対に勝つぞ。あの物分かりの悪い先輩達に教えてやるうぜ。お前らのやってることは無意味ってことをな」

雄二の言葉に明久が頷く、そして雄二が頼んだ補給テストを鉄人が持ってくるのと二人はテストの準備を始めた。

「困りました、西村先生に連絡がつかません」

テントを前に蒼夜は遊羽と共に考えていた、屋台を作る為にはこの壊れたテントをばらして作らなければならない。しかしそれには蒼夜と遊羽だけでは人手不足である。

鉄人が居れば力仕事はそれに任せられるが、肝心の鉄人との連絡が取れない。

正に八方塞がりである。蒼夜が悩んでると遊羽はおもむろに携帯を取り出した

「誰か呼ぶのですか？」

「うん、こんな事もあるうと6時間前から校門前に舎弟トリオを待たせてるんだ。」

「6時間前って今がだいたい7時ぐらいだから　　って遊羽ちゃん鬼ですか。ていうか、そんな早くから待機してるならあと二人組の所業止めてくれても　　」

「蒼ちゃん、何言ってるの？三人共寝袋で一晩過ごしてたんだよ、起きてるわけないじゃん。もー、蒼ちゃんばかだなー」

「はあ　　頭が痛くなりそうなんでもういいです　　てい
うか寝てるなら呼んでも来ないのでは？」

「姉御！！遅れてすいませんでした！」

蒼夜が言ったのとはほぼ同じタイミングで現れた三人組、色々納得は
いれないが気にしたら負けな気がしたのでそのまま無視した。

「みんな揃ったね、それじゃあ5人でさっさと作業終わらせちゃお
」

「了解です、姉御」

遊羽と三人組を見て蒼夜はため息をついて

「はあ、なんかもう頭いたくなって来ました こんなんで大
丈夫なんでしょうか 」

「なるほど、それで雨咲君は疲れた顔している訳ね。」

「 」

しばらく後に優子がやって来て事情を聞いて蒼夜を見ると、優子はそう呟いた。

優子が来るまで遊羽が悪乗りしはじめ、三人組はそれを焚き付ける。流石の蒼夜も対処しきれなく、蒼夜は死にそうな状態だった。

「雨咲君、あとは私なんとかするからとりあえず少し休みなさい。そんな目のくまがある状態で準決勝だなんてお断りよ」

優子がそう言いながら蒼夜の顔に触ると、珍しく顔を赤くする。

「だ、大丈夫です。徹夜は慣れているのでこの程度なら問題無いです。」

多少の照れ隠しをしながら蒼夜が優子から離れる、どうやら翔子と遊羽以外の女子とはあまり免疫がないらしい。

「とっとにかく、僕はやることがあるので少しここを離れます。遊羽ちゃんあとはお願います。」

「了解ー テスト頑張つてねー」

そう言うと蒼夜は雄二達と共に回復試験を受けるために雄二達のいる教室に向かっていった。

「流石に一般解放となると物凄いですね」

「流石にここまで人が来ると緊張するわ」

召喚大会二日目準決勝、今日より一般の人達にデモンストレーションを兼ねて観戦が可能な状態になっている。注目のシステムというだけあり、かなりの人数が集まっていた。

「もしかして 木下さん、緊張してます。」

「緊張？まさか雨咲君じゃないし、私は全然気にならないわ。」

少しからかうような言い方で蒼夜が言うと、優子はそれを否定するよう言い返す。

「それより 当然テストを受けたぐらい何だから勿論期待しているんでしょね。」

「はい、試合のほうは間違いなく勝ってます。」

あまりにも勝ちを確信したかのような顔で蒼夜が笑っていることに疑念を持つが、対戦相手の登場にその疑念を捨てた。

「蒼夜、約束」

「大丈夫です。霧ちゃんも守って下さい」

「「?」」

蒼夜と翔子の二人のやり取りに優子と愛子は疑問符を浮かべる。そして

「ついに始まりました準決勝戦、対戦のカードは両者Aクラスのコンビだ。それでは早速試合を」

「あ、先生。少しマイクよろしいでしょうか?」

試合開始の合図を引き留め、蒼夜がマイクを教師から借りると蒼夜は咳払いをして話を始める。

「会場の皆さん。清涼祭に来てくださりありがとうございます。僕ら2 Aではメイド喫茶、そして校門付近ではFクラス合同で軽食屋台を開いています。皆さん是非いらしてください」

そう言いながら頭を下げる蒼夜。翔子、愛子、優子も続けて頭を下げた、この人数での中での宣伝はかなりの効果が期待出来る。教師も苦笑しながらもそれを止めようとはしない恐らく容認してくれているのだらう。

「それでは宣伝も終わりましたので、試合開始！！！」

「サモン試獣召喚」「」「」

Aクラス 木下優子 古典345点

Aクラス霧島翔子 古典 381

Aクラス工藤愛子 古典 311点

それぞれの召喚獣が召喚される。そしてAクラスと言つこともあり、かなりの高得点の召喚獣に周りに喚声起きる。

「皆さん、やっぱり凄いですね。でも」

蒼夜は笑顔のまま答える。そして蒼夜の召喚獣が召喚された。

Aクラス 雨咲蒼夜 古典404点

「「えっ」」

翔子と愛子が蒼夜の点数に驚きを見せる、それもその筈蒼夜のAクラスの内の立場はクラス内で下から数えた方が早い成績である。その蒼夜が翔子を上回る点数なのだ、驚くのも無理もない。

388

「全く一夜漬けなんてするようなもんじゃないですね。まあ暗記科目じゃなければ出来ない芸当ですけど」

「一夜漬けでそこまで点数上がらないわよ 全く。」

蒼夜の言動に呆れる優子、口調から優子自身の似たような経験があるのだろう。

「さあ霧ちゃん、工藤さん。下克上です、覚悟してください」

不敵に笑うと同時に蒼夜の腕輪が輝きを見せて召喚フィールド内を激しい爆発させた。

第20問 学園祭編11話（後書き）

更新遅れて申し訳ないです

仕事に追われてそれどころじゃなかったです。

まあ言い訳ですね、それでは次回もお楽しみに

第21問 学園祭編12話 姉と兄妹と迷子探し（前書き）

仕事の多忙っぷりとネタが浮かばずに1ヶ月以上投稿ができませんでした

更新遅れて申し訳ありませんでした。

第21問 学園祭編12話 姉と兄妹と迷子探し

蒼夜の腕輪が光輝き、同時に爆発を引き起こす。煙幕に包まれ何が起きたのかはわからぬままである。

腕輪の効果は分からないが蒼夜は自身の召喚獣が動けると判断すると真つ直ぐ視界の悪さも気にせず動いた。

狙いは工藤愛子の召喚獣、予想外の状況に弱い彼女になら視界が悪くても間違いないといける。
そう考えての判断だ、しかし

相手もAクラスの生徒、とっさの判断で後ろに下がり回避する、しかしそれでも回避しきれず攻撃がヒットする。

Aクラス工藤愛子 古典 0点

「「「えっ?」「」「」

いくら爆発に巻き込まれたとはいえ、あの程度の当たりで戦死する筈がない。

いきなりの急展開に会場がざわめきを見せた。
そして再び両者の点数が表示されるが、その点数に一同啞然として
いる。

教科古典

Aクラス 雨咲蒼夜 1点 & amp; Aクラス 木下優子 1点

Aクラス 霧島翔子 1点 & amp; Aクラス 工藤愛子 0点

両者の召喚獣の点数が著しく落ちている。

（爆発を引き起こす腕輪だと思ったんですけど、少し違う見たいで
すね 爆発というより衝撃に近い強さですし 範囲も
召喚フィールド全て巻き込んでいるようですし。）

戦闘の最中、あまりの急展開に一時硬直状態となっていた。翔子の
ほうも既に瀕死、そして相手も戦闘不能なため下手な手出しが出来
ないでいる。

何だかんだで優子と蒼夜のペアのチームワークは良い、翔子から仕
掛ける事が出来ずまさに詰み状態であった。

審判員の教師も驚いた顔を見せる、学年主席の人物がまさに今手も
足も出ない状況なのだから。

「どうします、霧ちゃん流石に両者1点とはいえ此方は二人
そして木下さんの槍のリーチと霧ちゃんの武器ではどうみても打
つ手無し、勝負は見えています。」

しばらく無言で考えると翔子は尋ねるように答えた

「棄権しても

約束は守るなら

」

確認をとるように聞くと蒼夜は笑顔のまま頷き、翔子が降参という
形で決着となった。

「それにしても雨咲君、さっきの代表との約束って何なの」

試合が終わり二人で廊下を歩いていると優子が尋ねた。

戦闘中なんども出てきた言葉だけあり印象に残っているのだろう。

「ああ、あれですか

大した約束じゃないですよ。賞品のチ

ケットと代わりにとある約束してもらったんです、僕達と全力で戦
えてね。どうせなら学年最高成績保持者とは全力で勝ちたいです

し。それに決勝は別科目だとしても召喚獣の操作は集中力がいりま
す、霧ちゃんなら僕みたいなBクラスレベルなら決勝に備えて手加
減もしかねませんしね。」

優子はその話を聞いて自身を過小評価しすぎていると蒼夜に対して
思った。

（全く、代表が貴方相手に手加減なんてするわけ無いじゃない。だ
ってこの大会で一番Aクラスで代表が危険視していたのは貴方なん
だから）

他人の事はよく見てる蒼夜だが、自身の事となると勝手に謙虚に
なるのは彼の悪い癖だと優子は思った。

一見完璧主義者に見える蒼夜だが、不完全な部分も多く見える。む
しろ彼の場合不完全な部分のほうが多いだろう、そう考えると優子
はとあるテレビ番組の話を思い出した。

（完璧な人間は存在しない、何故なら不完全な部分が欠落してしま
うのだから　　か。よく言ったもんだわ、そう考えると遊羽よ
り雨咲君のが完璧に近いわね）

クスクス笑いながら優子は蒼夜を見ていた、そして蒼夜はそんな優子を見て疑問符を浮かべていた

一方その頃遊羽は

「きゃははは、だ〜い繁盛〜」

見事に蒼夜の宣伝が聞いたのか大量の客を遊羽一人で対応していた、既に三馬鹿舎弟トリオは忙しさでダウン　そして遊羽はピンクのハッピを体操服の上から見事に着こなして客を捌いていた。

「うーん、ちょっと忙しすぎるなあ。まあきーちゃんとかーちゃんが助っ人に来るって言ってるしなんとかなるでしょ」

そう言っつて遊羽は客の応対を再開しようとするが、客の顔を見た途端表情に変化が僅かにあった。

「いらっしやいませ。何か御用でしょうか」

表情は笑顔のままだが、先ほどのような笑顔ではなく仮面をつけたような作り笑顔であった。

「こんにちは、遠月さん。学園祭　　繁盛しているようだね少しだけ暇が学園長に用があつて帰りに遠月さんの姿が見えたからね。少し挨拶に来たんだよ。」

男は客として来たのではなく、遊羽に挨拶しにきただけのようだ。遊羽のほうは笑顔は崩さないが、多少困惑気味な態度が僅かに見える

男はそれを察したらしく、遊羽の言葉を待つことなく「それじゃあ」と言つて去つていった。

男が消えると遊羽は深呼吸をしてその後溜め息をついた、遊羽の態度の変化に気付いた舎弟の一人が尋ねた。

「姉御、あの生け好かない野郎は誰なんすか？」

「えーと、私の絵で人助けをしようとしてる人かな。とつてもいい人なんだけど私は何だか苦手なんだ」

あの人はちよいちよい遊羽の元に現れてはそう呼び掛けている、私の絵はネット辺りでそこそこ有名で売れば一枚50万を超える金額

らしく。あの人はその金を募金などに寄付すればたくさん人の助けになる。といつも力説している、しかし遊羽自身自分の絵はそんな大層な物ではないと考えて断っている。自身の絵はまだまだ満足はいける物はない、そんな中途半端な出来では相手に失礼だと考えている。無論普段鉛筆で書いている似顔絵や風景画は別だが。

そんな事を考えて溜め息混じりの発言をする遊羽、それと同時に優子と愛子がやって来た。

「思ったより余裕みたいね」

「遊羽ちゃん、助っ人にきたよ」

やって来たのはAクラスの工藤愛子と木下優子、二人が遊羽の助っ人としてAクラスから送られた二人だ。

「あれ蒼ちゃんは？」

「雨咲君なら寝てるわ、徹夜で勉強して召喚獣動かしてるんだから流石に休ませたわ。頑張るのは良いけど少しは休まないと駄目なのに」

真面目に蒼夜の心配をしている優子を遊羽が尋ねる。

「きーちゃん」

ひよっとして

「

「馬鹿な事言わないの、友人が疲れてるのに放っておくほどアタシは薄情じゃないわよ」

茶化すように言うがさらっと流されるどうやらまだ恋愛対象外のようである。

「へー、意外だね優子ってさてつきり雨咲君の事が好きなんだと思つてたけど　　まだそついう訳じゃないんだ。」

「姉御とお二方、そろそろ　　」

そつ言いながら舎弟の一人が客の列を指差す。

三人がそれを見て苦笑すると、遊羽が片手を振り上げ元気よく。

「それじゃあ皆　　ラストスパートがんばろー」

「「「「「おー!!!」」」」」

5人の掛け声が校舎に向かって木霊していった。

「そー兄ちゃん。どこにいるかな？」

「雪、迷子にならないよたうに付いてくるんだよ」

「雪、いない」

「やばい夏陽さんに殺される。みんな手分け探そう」

校門前には3人の子供男の子二人と女の子が一人のたっている。三人は何やら困った様子である。

「勇樹が目をはなすからこうなったんだろ！！どうするんだよ、夏陽さんにはばれたら殺されるぞ。」

「蓮だつて勝手に出歩いてたじゃん。」

蓮と勇樹と呼ばれた二人はそれぞれ自分の事を棚にあげて言い争っている。そんな二人に向かって声をかけて女の子が遠くを指差した。

「二人共、あれ」

指差した先には三人よりやや小さい女の子が暑苦しいかつい男性と長い髪の綺麗な女性　つまり鉄人と遊羽の姉の美羽が一緒に歩いてる。どうやら迷子の親探しのようだ、女の子は必死に「お母さん」と叫んで泣いている

「何だよ佳奈ってあれは
たいだぜ」

迷子の親探し？何だか困ってるみ

「人助け 。」

「あの人達に聞けば何かわかるかもしれないしね」

そう言っつて三人が鉄人と美羽の元にかけていった。

「西村先生、助かりました、この子の親探しをしようにも学校の中
がどうなってるのかわかりませんから。」

「これも教師の仕事ですから それにしても貴女が遠月のお
姉さんとは 」

驚きを隠せないような鉄人、気まぐれ猫と言われる程の遊羽の気ま
まっぷりだ。しかし姉のこの落ち着いた雰囲気は正直遊羽の姉とは
思えない。

美羽もそれを理解しているのか、うふふと微笑むだけで嫌な顔ひと
つしていない。

「良い大人が年甲斐もなくはしゃぐ訳にもいきませんし。」

世間話をしながら美羽は女の子を安心させるように手を繋いだり抱き上げたりと色々やっている。

「とにかく放送室に向かいましょうか。」

まずはこの子親を呼び出して一刻も早く安心させたいのだろう。

鉄人が放送室を目指して校舎に向かおうとする、しかしそれを遮るかのように後ろから声を耳にした。

「あの、すみません学校の先生がたですよ。少しいいでしょうか？」

「蒼夜兄　　探してる　　」

「ゆ　　妹が迷子になってるんだ手伝ってくれよ。」

それを言うと鉄人は蒼夜という聞き覚えのある単語を聞いて鉄人は三人に尋ねる。

「君達は雨咲の知り合いか？」

「そうだよ、兄ちゃんの学校の学園祭があるって聞いたから。」

それを聞くと美羽は笑顔で三人の前にしゃがんで目線を合わせて言った、流石遊羽の姉だけありこの手のトラブルはお手のものようだ。

「君達、お姉ちゃん多分力になれると思うんだけど　手伝ってもいいかな？」

「ほんとか姉ちゃん！サンキュー」

「蓮、年上の人には敬語で話さないと駄目だよ」

ニカツと笑みを浮かべる蓮に対して注意するように言う勇樹。
そんな二人のやり取りを見て美羽がクスリと笑う。

「それでは私はこの子供達を見ときますから、西村先生この子の事お願いしますね。」

「了解しました。」

そう言って鉄人は迷子の女の子を抱き上げ、放送室に向かって行った。

しかしはたから見ればゴツイおっさんが少女を拐っていったように美羽は見えたのだがそこは敢えて触れずに苦笑いしながら見送っていた。

姿が見えなくなったのを確認すると、三人の為にまずは目的の人物を探す為に情報収集を開始する。と言っても遊羽の携帯に電話して蒼夜の居場所を尋ねるだけなのだが

（蒼夜君か　最後にあったのは5、6年ぐらい前だったしなあ。今はどんな成長をしてるかな？）

と、遊羽の電話が繋がる合間に妹の親友に対して思いを馳せていた。

第21問 学園祭編12話 姉と兄妹と迷子探し(後書き)

お転婆兄妹と学園祭（前書き）

かなりの時間お待たせして申し訳ありません。

仕事が忙しくまともに執筆出来ない状態でした。

これからは最低でも月一更新を心がけたいので皆様どうかよろしく
お願いします

お転婆兄妹と学園祭

「はあ　　我ながら情けないですね」

消毒用のアルコールの匂いを感じる保健室で蒼夜はベッドに横になり休んでいる。

試合の後、色々無理をしたツケが周り体調不良という形で出てしまっている。

保険医からはしばらく安静にと言われ、召喚大会の出場もドクターストップとなっている。雄二達のペアも見事常夏コンビを打ちのめし、決勝進出を決めた。二人と戦えないのは残念だが、負けて教頭に言い訳する必要もないし結果オーライといった感じだ。

決勝が無いってのも非常にアレな話だが、自分の知った事ではない。

「どうせ、その辺は学園長がなんとかするでしょうし　　僕は
ゆっくり休ませて頂きましょうっておや？」

そっぽやきかけた直後、保健室の扉の窓に僅かに頭を見せる影があった。影から見える背丈から年齢は小学校低学年ぐらいだろうか。

迷子だろうかっと考えているうちに扉が開き、扉の窓から僅かに姿を見せていた人物が姿を表した。その姿を見た蒼夜は驚いた顔をし

て言った。

「雪、どうしてここに？」

「あ、蒼兄だー。」

暢気な声をあげてトテトテという足音を響かせそうな感じで蒼夜の元に近づき抱きつく少女。

蒼夜は多少困った顔をしながらも笑顔で少女の頭を優しく撫でる。

この非常にマイペースな少女の名前はあめさきゆき雨咲雪、蒼夜と同じ孤児院に生活する義理の妹である。

どうやら学園祭と聞いてやって来たらしく蒼夜を探しているの間にか迷子になっていたようだ、まああの本人は全く気づいていないようだ。

この子がここにいるとなると、他の三人もここに來ている事となる。恐らく今頃雪を探して学校を歩き回っているだろう、そう考え三人を探しに行こうとするが、そんなタイミングで蒼夜の携帯が鳴り響く。

画面には遊羽と表示されており電話に出る。

『もしもし、蒼ちゃん？いまからそっちにお姉ちゃん向かうからそこ動かないでね。それじゃあ私は忙しくからこれで！！！！』

出た瞬間早口でそう伝えると蒼夜が喋る暇も与える事なく電話が切れる。相も変わらず自由な彼女に苦笑すると、いつの間にかベッドに座っている自分の膝の上に乗っかっている雪はそんな蒼夜を不思議な顔をして見上げていた。

「あつ！蒼夜兄ちゃんだ」

「雪もいます。」

「これで 解決」

二人はその内現れるであろう人物を待っていると、突然扉を開き蒼夜のよく知る三人組が各々呟く。

「勇樹に蓮、佳奈まで来てたんですね。」

「三人供 だめなんだよ勝手に迷子になっちゃ」

「いや、迷子になっていたのは雪のほうですよ。」

子供らしい声で注意する雪を苦笑し呆れながら言う蒼夜、なにはと

もあれ無事問題なく解決したわけである。

「あ、兄ちゃん。そう言えば知り合いつれてきてやったぞ。」

「雪を探すのを手伝ってくれた人です」

勇樹が思い出したように言うと、蓮が付け足すように答える。一体誰なのか蒼夜が首をかしげていると、佳奈が扉を開き外の人物を招き入れる。

姿を見た蒼夜は一瞬息を呑んで呆然とする。

「久しぶりだね、蒼夜君。私の事覚えてるかな？」

雰囲気こそ変わってはいるが、蒼夜は間違える事無く答える。それもその筈、彼女　　遠月美羽は蒼夜にとって目標であり、憧れであり、そして原点なのだから天才少女の姉である美羽は何でも出来る才能溢れる人間という評価を得ているが、彼女は妹のような才覚があった訳ではない。妹の目標になるような人間になるという目標を持ち努力を惜しまなかった。表にはそれを決して見せなかったが、蒼夜は一度だけ必死に勉学に励む彼女の姿を見たことがある。

「お久しぶりです美羽さん、昔とだいぶ雰囲気変わりましたね。」

「私もいい大人だからね、まあとりあえず」

「

そう言って美羽は三人組と蒼夜の膝上にいる雪を見て。

「とりあえず積もる話は、学園祭回りながらにしましょうか。四人共お腹空いてるみたいだし何か食べ歩きながら　　ね」

ニツコリとそう言って勇樹達を見回すと、蒼夜は雪をおぶって三人組を引き連れ美羽と共に再び祭のなかに溶け込んでいった。

「それじゃあこの子達は蒼夜君の兄妹ってことなんだ。」

学園祭を回りながら、やや遅めの勇樹達の昼食を購入し適当にぶらつきながら歩く蒼夜と美羽、三人組ははぐれないように二人のあとを追いながら蒼夜に買って貰ったたこ焼きやら焼きそばを頬張っている。そして雪はここに来るまでに疲れたのだろうか蒼夜の背中ですやすやと眠っている。

「はい、夏陽さん　　孤児院の院長さんの所で皆お世話になっています。とはいってもしゅうちゅう放浪しては猫みたいに居場所

の無い子供を拾って来る変わった人ですけどね。基本的にこの子達の世話は僕が引き受けている訳です」

そう言いながら仲良く歩いてる三人組を見つめる。

「成る程、それであんなになついでる訳なんだね。」

「それ以外にも院長が色々してくれてるおかげでこの子達もだいぶ大人しくなりましたよ。」

蒼夜の滞在する孤児院は院長の方針で同じ釜の飯を食べば皆家族同然で、院長自身破天荒な性格ではあるが基本的にみんなの事を考えしてくれる優しい人だ。たとえ遠くにいても蒼夜が手に負えない困った事態に陥るとすぐに駆けつけたり、誰かの誕生日になればサプライズパーティーを開いたりと非常に出来る人である。

だからこそこうして端から見れば兄妹のように仲良く出来る訳である。

「最も、まだまだ学校では回りと距離をとつてるみたいですけどね。早く回りと溶け込んでくれるといいんですけど。ごめんなさい、愚痴っぽくなってしまいました。」

蒼夜が語っている間、美羽は黙って聞いて、蒼夜の話聞いていた。

そして再び蒼夜に向かって尋ねる。

「それじゃあここに帰って来た理由は？」

「色々ありますが、単純に行ってしまったえば僕の我が儘みたいな物です」

ばつの悪そうな顔をしながら答える、実際ここに帰って来たのは理由があるが大半は蒼夜が文月学園に行きたいと言った事が発端である。当初は一年早く入学する予定ではあったが、とある事情から困難になり。転校という形で一年遅れでここに来たわけである。

実際ここなら文月学園が潰れない限り勇樹や蓮達も進学する事が可能である、そう考えての引越しである。

二人がそんなやり取りをしていると背後が少しだけ騒がしくなる。

「あ、馬鹿勇樹人のたこ焼き勝手に食べないで下さい」

「蓮が隙だらけだから悪いんだよって佳奈！何どさくら紛れに人の食ってんだよ」

「 隙だらけ 」

勇樹が蓮の物をとり、佳奈がどさくさ紛れに勇樹の物をとって騒いでいるようだ。蒼夜は呆れながらため息をつく、三人の元に近いた。

「大体の勇樹はいつもそうです、自分の嫌がる事を平気でやるんですから」

「たかがたこ焼き一つで蓮は細かいんだよ。」

「二人とも 静かに 」

「静かにして下さい。勇樹は蓮に謝る、そして佳奈はさりげなく自分には関係ないみたいな態度取らない。蓮も場所を考えなさい他の人に迷惑です!!!」

「「「ごめんなさい」「」」

蒼夜の怒鳴り声で三人が一斉に謝罪をする。普段は優しい兄として振る舞ってはいるが怒る時はしっかりとしている蒼夜を見て美羽は穏やかに微笑みながら

「蒼夜君もしっかりお兄ちゃんやってるね」

と少し眺めると、今度は妹との約束を果たすべく一人で人混みの中に消え遊羽の元へ向かうのだった。

「勇樹君も蓮君も佳奈ちゃんも兄妹水入らずで楽しんでおいで。」

誰にも聞こえない音量で呟くと自分は邪魔者といわんばかりに

去り際蒼夜君が此方に気付いたようだが、此方の意図に気付いたらしく弟達に悟られないように手を降り見送っていた。

学園祭も残り僅か、自身の仕事を放棄するのは皆にわるいが蒼夜は弟達と学園祭を回ることにしたのであった。多少体にだるさが残るが、勇樹達の笑顔を見るとそんなものは気にならなくなった。蒼夜であった。

お転婆兄妹と学園祭（後書き）

誤字報告などありましたらお願いします

極道娘（前書き）

気まぐれ猫更新にてついでにこっちも仕上げました

短いですがどうぞお楽しみください

極道娘

「なんで
なんでヤクザの孫娘だからってこんな目に合わな
いといけないの？私は何も悪い事はしてないのに
」

夕日の中、とある公園のベンチで泣きじゃくりながらそう言う夏帆
を抱き締めながら翔子は言った

「夏帆、泣かないで。私は何があっても夏帆の友達だから
」

「本当？」

ゆったりと翔子に身を預け、翔子にすがり付くように尋ねた。

そして無言で夏帆の手をとると、強引に小指同士で指切りをする。
そうするとやっと夏帆の顔に笑顔が戻ってきていた

「うん、完璧。今日は良い出来だね」

エプロン姿で自身の料理を味見する夏帆、洋食は得意なのだが和食
はあまり得意ではない。しかし祖父が朝はご飯に味噌汁と言ってい

るため和食となっている。
夏帆も和食事態嫌いな訳ではなく朝食はいつも和食である。

「それにしても　今日はやけに静かだなあ

普段ならそろそろ組の人たちが調理場にやって来て手伝ってもらったりと騒がしくなる時間だ。基本的に家事のほとんどは夏帆の役目である、しかし人数が人数なので政さんに手伝ってもらっているわけである。

不審に思い調理場に設置されている時計で時間を確認すると、とある事に気がついた。

「あ　時計、止まっている」

そう思い自分の携帯で時間を確認するといつもより一時間早い事に気がついた。
するとどうせならと閃き業務用の冷蔵庫を開けて適当に食材を取り出す。

「んー、時間はあるし。もう一品増やしちゃおうか」

普段の朝食、ご飯と味噌汁と焼き鮭のメニューに一品追加しようと考えた夏帆であった。

てきばきと鼻唄混じりに食材を調理していく夏帆であった。

「夏帆、今日はなんだかご機嫌」

朝食を終えていつもの時間になりいつも通り友人が迎えにやってくる、毎度行われる盛大な見送りに照れながら家の門を出て私は学園へと向かっていた。

「えっ、そう？」

翔子ちゃんに言われていつの間にか舞い上がっており頬が緩んでいる事に気付いた。

「今朝ねちよつと早起きしすぎたから朝ごはんを気合い入れて作ったんだけど。皆が大絶叫してくれたからそのせいかな？」

「夏帆、大絶叫じゃない」

「正しくは大絶賛」

「ううっ

翔子ちゃんのbluey」

いつも通りの間違えに私は顔を赤くしながら英語混じりに悪態をつく。

どうも母国語である英語から離れられないせいかちょいちょいこのような使い方をしてしまう事がある。

翔子ちゃんには通じるが、他人や英語に親しみのない友人は首をかき上げてしまうのでこの悪い癖を治したいとは思いがどうもうまくいかないのである

翔子ちゃんのツッコミに少しだけいじけてツイントールの片方の髪を指に絡ませる。

「かわいい

」

そんな仕草がツボだったのか翔子は夏帆の頭を撫でる。

「ちょっと翔子ちゃん！？恥ずかしいって」

顔を真っ赤にしながら私が叫ぶが、翔子ちゃんはやめようとはしないでいつの間にか手まで繋がれ、校門をくぐるまで私はそのままであつた。

「よしFクラスclean up作戦開始」
教室につくとまだ多少早い時間ためか夏帆一人である。そこであらかじめ持ってきた三角巾とエプロンを制服の上から着こなし、教室の掃除にかかる

「んーまずは窓をあける必要はないか風通しはいいしそれじゃあまずは畳の掃除からかな？」

換気の為に窓をあけようとするが不要ない事に気づき

時間も少ない事から一番慣れた畳の掃除から始める。慣れた手つきで畳を返すと一つずつ丁寧に埃を追い出していく。

「政さんみたいに畳を返せれば楽なんだけど」

畳を叩いた拍子に畳を見事に返す技である。昔政さんがやっていてビックリした物だ、なんでも昔はあやって畳を盾にして曲者から身を守つたらしい。近頃は銃が回って畳一枚じゃ身を守れないと物騒なことを言っていた事を思い出し思わず一人で笑ってしまう。

そんな事を思い出しているとふとこんな事を思った。

「よし、私もやってみよう」

何を考えたのか政さんの動きを思い出し私はいざ挑戦してみることにした。

「秘技畳返し なんちゃって。ってあれ？」

畳を叩くと何が良かったのか目の前の畳が跳ねる、しかし勢いよく跳ねただけでそのまま畳は元通りになり、勢いよく埃だけが飛び回る。

「げほっげほっ。うー、埃被った。こんな姿誰かに」

自分の恥態を誰かに見られてないか確認をとろうとして扉を見回すとちょうど一人の人物と眼があう。

「えっと 福田さんおはよう。」

あまりの気まずさからばつの悪そうな挨拶をしながら明久が夏帆を見ていたのであった。

自分のやった事を見られた事に気づき徐々に顔を赤くしていく夏帆
そして恐る恐る尋ねる。

「吉井君 いつからいたの？」

「えっーと、秘技の辺りからかな」

見事に全て見られていたことに気付くとこれ以上はないほどにあわてふためく

「ちっ違うんだよ。えっーと違わなくてたまたま掃除してたらって、じゃなくいや違わなくて　　あー、いつもはこうじゃないんだよ。そ、そう今日はたまたまこういう気分だったの」

最早何をいつているのか解らないほど混乱している夏帆、どうしてこういう時つて変に言葉が繋がるのだろうか。しどろもどろになりながら言い訳を言う。

「なんていうか福田さんの、可愛い一面が見れて良かったよ」

「☎\$¥£%#&*@」

突然可愛いと言われて言葉にならない声をあげてしまう。もう何が何だか分からなくなっていた

やめて、見ないで

こんなの私のキャラじゃないのに

夏帆の悲痛な心の叫びであった。

極道娘（後書き）

誤字報告などありましたらお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3200/>

猫と絵画と召喚獣

2011年10月28日13時08分発行